

3. 津浪被害及狀況調查報告

市 町 村 索 引

北 海 道 之 部

根 室 國 之 部

根 室 郡	記 事 頁 (Page)	地 圖 番 號 (Map No.)	寫 真 番 號 (Fig. No.)
根室町	29	I, (1)	
根室	29		
花咲	29		
和田村	29	I, (1)	
落石	29		

釧 路 國 之 部

厚 岸 郡

厚岸町	29	I, (3)	
釧路市	29	I, (4)	

白 糠 郡

白糠村	29	I, (5)	
音別村	30	I, (6)	

十 勝 國 之 部

十 勝 郡

大津村	30	I, (6)	
厚内	30		

廣 尾 郡

茂寄村	30	I, (8), 1.2	
廣尾	30		
濱フンベ	30		
オナオベツ	30		
音調律	30		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
ルベシベツ	30		
タニイソ	30		

日高國之部

幌泉郡

幌泉村	30	I,(8).4.5.6.7	
ピクタヌンケ	30		210
オニトツブ	30		
猿留	30		
サクバイ	30		211~213
庶野	31		217~220, 222
トセツブ	31		216, 223
フンコツ	31		214~215
ルーラン	31		
チヒラ	32		
小越	32		
襟裳岬	32		
油駒	32		
歌露	32		
歌別	32		
幌泉	32		221, 224~225

様似郡

様似村	32	I, (8). (9). 8. 9	
哲内	32		
幌滿	32		
エハオイ	32		
冬島	32		
様似	33		

浦河郡

浦河町	33	I, (9). 11	
-----	----	------------	--

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
狹伏村	33	I, (9), (10), 12, 13	
三石郡			
三石村	33	I, (10), 14	
靜内郡			
下下方村	33	I, (10), (11), 15, 16, 17	
新冠郡			
新冠村	33	I, (11), 18	
沙流郡			
厚別村	33	I, (11)	
厚別	34		
門別村	34	I, (11)	
門別	34		
膽振國之部			
勇拂郡			
苫小牧町	34	I, (13)	
白老郡			
社臺村	34	I, (13)	
白老村	34	I, (13)	
幌別郡			
登別村	34	I, (14)	
室蘭市	34	I, (15), (20)	
ホロモイ	34		
ベキリウダ	34		
有珠郡			
伊達村	34	I, (15)	
エントモ岬	34		
虻田郡			
辨部村	34	I, (16)	
禮文	34		

山越郡	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map. No.)	寫真番號 (Fig. No.)
長萬部村	35	I, (16). (17)	
訓繩	35		
八雲町	35	I, (17). (18). 19. 20	
黒岩	35		
遊樂部	35		
山越	35		

渡島國之部

茅部郡

森町	35	I, (19). 22. 23. 24	
石倉	35		
濁川	35		
鶯ノ木	35		
砂原村	35	I, (20). 25	
鹿部村	35	I, (20)	

龜田郡

錢龜澤村	36	I, (21)	
根崎	36		
湯ノ川村	36	I, (21)	
函館市	36	I, (21)	

上磯郡

木古内村	37	I, (22)	
知内村	37		

青森縣之部

下北郡 (青)

東通村	38		
小田野澤	38		
白糠	38		
尻屋	38		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
岩屋	38		
大畑村	38		
湊	38		
正津川	38		
上野	38		
二枚橋	38		
木ノ邊	38		
釣谷濱	38		
赤川	38		
上北郡 (青)			
六ヶ所村	38	II, (1)	
泊	38		
應架	38		
三澤村	39	II, (4)	
谷地頭	39		
淋代	39		
四川目	39		226
三川目	40		
百石町	40	II, (5)	
一川目	41		
川口	41		227~230
三戸郡 (青)			
市川村	43	II, (6)	
橋向	43		
下長苗代村	43	II, (6)	
八太郎	43		
八戸市 (青)			
八戸市	43	II, (7. 8. 9)	
小中野	43		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
湊	44		
白銀	44		
鮫	44		231
白濱	44		
深久保	44		
種差	44		
法師濱	44		
大久喜	44		
金濱	44		
階上村	44	II, (9. 10)	
道佛(字大蛇)	44		
追越	45		
榑	45		
小舟渡	45		

岩手縣之部

九戸郡(岩)

種市村	46	II, (10. 11. 12)	
平内	46		
川尻	46		
横手	46		
八木	46		232
中野村	46	II, (12. 13)	
中野	47		
小子内	47		
夏井村	47	II, (14)	
半崎	47		
久慈灣	47	II, (14)	233~234
長内村	48	II, (14. 15. 16)	
二子	48		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
小袖	48		
宇部村	48	II, (16)	
久喜	49		
野田村	49	II, (16. 17. 18. 19)	
廣内	49		
野田	49		
三日市場	49		
米田	49		
玉川	49		
安家	49		
下閉伊郡(岩)			
普代村	50	II, (19)	
堀内	50		
澤	51		
白井	51		
力持	51		
普代	51		
太田名部	51		
田野畑村	51	II, (21. 22)	
明戸	52		
羅賀	52		239
平井賀	52		235
嶋ノ越	52		336
切牛	52		237~238
小本村	53	II, (22. 23)	
小木	53		
中野	54		
茂師	54		
田老村	54	II, (23. 24)	

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
攝待	55		240
青ノ瀧	56		
重津部	56		242
乙部野	56		243~244
田老	56		241, 245
小港	56		
崎山村	57	II, (24. 25)	
女遊戸	57		
中ノ濱	57		
宿	57		
日出島	57		
大澤	58		
鉾ヶ崎町	58	II, (25)	
宮古町	58	II, (25)	246
磯鷄村	59	II, (25)	
磯鷄	59		
高濱	59		
金濱	59		
太田濱	59		
白濱	59		
津輕石村	59	II, (25. 26)	
津輕石	59		
赤前	60		
重茂村	60	II, (27. 28. 29)	
追切	60		
閉伊崎	61		
鳥島	61		
立濱	61		
境神	61		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
鵜磯	61		
荒卷	61		
音部	61		247~248
重茂	61		
里	61		249~250
與奈	62		
種子刺	62		
熊崎	62		251~253
姉吉	62		354~266
千鷄	63		257
石濱	63		
川代	63		258
大澤村	63	II, (29. 30)	
山田町	64	II, (30)	259, 263, 264
飯岡	64		
織笠村	65	II, (30)	
船越村	65	II, (29. 30. 31. 32)	
船越	65		
田ノ濱	65		262~264
船越村の地峽	66		261
大浦	66		
上 閉 伊 郡 (岩)			
大槌町	67	II, (32. 33)	269~270
吉里吉里	67		268~269
浪板	67		
赤濱	67		
安渡	67		267
大槌	67		
鵜住居村	68	II, (33. 34. 35)	

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map. No.)	寫真番號 (Fig. No.)
室ノ濱	68		
片片	68		
鶉住居	68		
箱崎	68		
白濱	69		
大假宿	70		
桑ノ濱	70		
兩石	70		260
水海	70		
釜石町	70	II, (31. 36)	272, 274~285
越路	70		
瀧ノ澤	70		
釜石	70		273
嬉石	72		281, 284, 286
平田	72		
石濱	73		
白濱	73		
氣仙郡(岩)			
唐丹村	73	II, (36)	
花露邊	73		
本郷	73		287~289
小白濱	75		290~292
片岸	76		293
下荒川	76		294
大石	76		295
吉濱村	76	II, (38. 39)	
千歳	76		
根城	76		
本郷	76		256~297

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
越喜來村	77	II, (38. 39. 40)	
崎濱	77		299
浦濱	78		298, 300~301
泊	79		302
下市嶺	79		303~304
鬼澤	79		
綾里村	79	II, (40. 41)	
小石濱	79		305
砂子濱	79		306
綾里灣	80		
白濱	80		307~309
野々前	82		310~311
田濱	82		315
綾里	82		312~314
石濱	83		316
赤崎村	83	II, (40. 42)	320
合足	83		317~319
長崎	83		
千丸	84		
小外濱	84		
蛸之浦	84		320
清水	85		322, 324
永濱	85		323
山口	86		
生形	86		
宿	86		325
盛町	87		
大船渡町	87	II, (42)	
大船渡	87		327

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
笹ヶ崎	88		328
永澤	88		
平	88		302
下船渡	89		
珊瑚島	89		
末崎村	89	II, (42, 43)	
船河原	89		330
石濱	89		
細浦	90		326, 331
小細浦	90		332
碁石	90		
泊里	91		334
中井	91		
門ノ濱	91		
梅真	91		
廣田村	91	II, (43)	
長洞	92		
大野灣	92		
大野	92		
花貝	92		
畑	92		
六ヶ浦	92		
岩倉	92		
根岬	92		
集	92		
金室岬	93		336
泊	93		337~338
越田	94		
大陽	94		339~340

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
小友村	94	II, (43)	
蛇ヶ崎	94		
唯出	94		333, 335
獺澤	95		
矢ノ浦	95		342
鳥島	95		
鹽谷	95		
三日市	95		
兩替	96		
米崎村	96	II, (44)	
濱砂	96		
脇ノ澤	96		
沼田	97		
高田町	97	II, (44)	
長砂	97		
高田松原	97		343~345
氣仙村	98	II, (45)	
長部	99		341, 346, 351
双六	99		
要谷	99		
福伏	99		

宮城縣之部

本吉郡(宮)

唐桑村	100	II, (45.46.47)	
大澤	100		347
館	100		
載釣	100		352
堂角	101		
只越	101		348~350

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
白濱	102		
高石濱	102		
石濱	102		353
馬場	102		354
中井	103		
瀧濱	103		
御崎岬	103		
大立	103		
下ノ濱	103		
長濱	104		
津本	104		355
神止	104		
小鯖	104		358
鯖立	105		356
藤濱	105		
宿	105		
舞根	106		
日向貝	106		
大島村	106	II, (46. 49)	357
外濱	108		
廻館	108		
長崎	108		
通島崎	108		
横沼	108		
駒形	108		
要害	108		360
淺根	108		
高井	108		
田尻	108		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
浦ノ濱	108		
大水	108		
磯草	108		
鹿折村	108	II, (46)	
鶴ヶ浦	108		
梶ヶ浦	109		
氣仙沼町	109	II, (48)	
内ノ脇	109		
松岩村	109	II, (46)	
片濱	109		
尾崎	109		
階上村	110	II, (46. 49)	
臺ノ澤	110		
川原	110		
七半澤	110		
濱	110		
波路上	111		359
崎野	111		
岩井崎	111		
旭崎	111		
大谷村	112	II, (50)	362
大谷	113		361
明神崎	114		364
館鼻崎	114		
日門	114		
前濱	114		
赤牛	114		
御嶽村	115	II, (50)	
大澤	115		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
風越	115		
登米澤	115		
小泉村	115	II, (50. 51)	
小泉	115		365~366
二十一濱	115		363
今朝磯	116		
藏内	116		
歌津村	116	II, (51)	
港	116		367
田ノ浦	117		368
石濱	117		370
名足	117		
中山	118		
馬場	118		
泊	118		371
管ノ濱	118		
伊里前	118		372
寄木	118		369
韭ノ濱	118		373
志津川町	119	II, (51. 52. 53)	374~377
荒戸	119		
平磯	119		375
袖ヶ崎	119		376
志津川	119		
戸倉村	120	II, (53. 54)	378~382
折立	120		378
波傳谷	120		380
津ノ宮	120		
瀧濱	120		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
藤濱	120		381
長清水	121		382
十三濱村	121	II, (53. 54. 55)	
小瀧	121		383
大指	121		
相川	121		384~385
小泊	122		
白濱	122		387
長鹽谷	122		
月濱	122		
桃生郡(宮)			
十五濱村	122	II, (55. 56. 57)	
船越	122		385
荒屋敷	123		388~389
大須	124		393
羽坂	124		
桑ノ濱	124		395
分濱	125		
立濱	125		
大濱	125		
雄勝	125		390~392, 396
石卷町	125	II, (64)	
牡鹿郡(宮)			
女川町	126	II, (57. 58)	
指	126		
御前	126		
桐ヶ崎	126		
石濱	126		399
宮ヶ崎	126		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
女川	126		404
高白	127		
江ノ島	127		
出島	128		397
大原村	128	II, (59, 60, 61, 62)	
寄磯	128		398
前網	128		
鮫ノ浦	128		
大谷川	128		
谷川	128		401
小淵	128		402
大原	129		
給分	129		
鮎川村	129	II, (62, 63)	
山鳥	129		406
鮎川	129		403, 405
金華山	130		
荻濱村	130	II, (63, 64)	
牧ノ濱	130		
小積	130		
萩濱	130		
小竹	130		
仙臺市(宮)	131		
宮城郡(宮)			
松島灣	131		
鹽釜町	131	III, (1)	
七ヶ濱村	131		
菖蒲田濱	131		
松ヶ濱	131		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig. No.)
七鄉村	131	III, (1)	
深沼	131		407
名取郡 (宮)			
東多賀村	132	III, (1)	
閑上	132		
亘理郡 (宮)			
荒濱村	132	III, (1)	403
荒濱	132		
坂元村	133	III, (2)	
中濱	133		409
磯濱	133		410~411

福島縣之部

相馬郡 (福)

福田村	135	III, (2)	
埤濱	135		413~414
新地村	135	III, (2)	
釣師	135		415~416
今泉	135		417
松ヶ江村	135	III, (2)	
原釜	135		
真野村	136		
鳥崎	136		
福浦村	136	III, (2)	
村上濱	136		419
前谷地	136		418
角保内	136		

雙葉郡 (福)

富岡町	136	III, (3)	
佛濱	136		

	記事頁 (Page)	地圖番號 (Map No.)	寫真番號 (Fig No.)
富岡	136		
木戸村	136	III, (3)	
山田濱	136		
石 城 郡 (福)			
小名濱町	136	III, (3)	
茨 城 縣 之 部			
多 賀 郡 (茨)			
大津町	139	III, (3)	

北海道之部

根室國之部

根室國根室郡

根室町 (根. 根室) Map No. I, (1)

(根室) 根室港は北向きの港で直接太平洋には面してゐないので津浪に關しては何等得た材料はない。地震は相當強く當地としては珍らしく、人々何れも戸外に飛出した。

(花咲) 根室町花咲に於ては稍々津浪らしい現象を認めた者がある位で一般には津浪の襲來したことが感ぜられなかつた。津浪當時(踏査の時も)附近には積雪 1.2~1.5 米あり、波打際にも 1 米以下積つておつたが津浪のため大分洗去られてこゝまで浪が來たのだらうといふ推定だけはつけることが出來たさうである。それによると少くも常時の海水面より 1.2~1.5 米位の水位の變化があつたことになる。浪の襲來したときこれを見てゐた者の談によると檢潮所に通ずる突堤の上を水が越したさうである。津浪當時の海水面からこの堤防の上面までは約 1 米はあつたらう。それ故に津浪當時の變化は先づ 1 米前後であらうと思はれる。

和田村 (根. 根室) Map No. I, (1)

(落石) 0.6~0.9 米程度の波が最初徐々に押寄せたとのことである。

釧路國之部

釧路國厚岸郡

厚岸町 (釧. 厚岸) Map No. I, (3)

厚岸町は厚岸灣の一番奥にある町でこゝでは津浪の襲來したことを知らない者が多い。或人の話すところによれば當日の夕刻まで 0.6~0.9 米の高さの潮汐の干満があつたといふことである。

釧路市 (釧.) Map No. I, (4)

釧路港は當時釧路川の河口附近に結氷してゐた氷が打ち上げられたので津浪のあつたことはいち早く報知された。而し波の高さは 0.6~0.9 米位であつたらう。被害の著しいものは皆無である。

釧路國白糠郡

白糠村 (釧. 白糠) Map No. I, (5)

音別村(釧.白糠) Map No. I, (6)

共に津浪は 1.2~1.5 米位である。

十勝國之部

十勝國十勝郡

大津村(十.十勝) Map No. I, (6)

(厚内) 津浪は 1.5 米程度で僅かに流木等により津浪の高さを知ることが出来るのである。

十勝國廣尾郡

茂寄村(十.廣尾) Map No. I, (8). 1. 2.

(廣尾)(濱フンベ)(オナオベツ) この間に於ては 3.0~4.6 米の津浪のあつたことを認めた。

(音調律)(ルベンベツ)(タニソ) 津浪の高さは次第に南下するに従つて増して来る。音調律では約 3.0 米位であるがルベンベツでは 4.6 米, タニソでは 4.6~6.0 米になる。この間岩と岩との間を縫つてゆく悪路で干潮時にのみ通行し得る難所である。而も西側に 100 米乃至 200 米の斷崖が聳えてゐて、雪が颓れ落ちて 1 丈以上も波打際に積つてゐた。また斷崖の上の方を見上げると谷間に残つてゐる雪は今にも雪が颓れ落ちて来るかと思はれてよい氣持はしない。但し足元が悪くて上ばかり氣にして見てゐることが出来ないので恐ろしい物を時々ヂロヂロと見るだけですんだ。

日高國之部

日高國幌泉郡

幌泉村(日.幌泉) Map No. I, (8). 3. 4. 5. 6. 7.

(ピタタヌケ)(オニトツブ) 津浪の高さ大體 4.6 米位。

(猿留) この町では漁船數艘を流失したのであつたが、津浪もこの附近になると大分強くなつて來た。猿留、サクバイ間の新設コンクリート舗道は數ヶ所津浪の爲に破壊されて居た。舗道が盡きると道路としてはなく足場の悪い磯濱を傳つて行かなければならない。この磯濱の所々には流木、海草の類が海面より 4.6 米位のところに打上げられてゐるのを認めた。

(サクバイ) 明治 29 年の大津浪の際はサクバイ川を津浪が溯つたため大被害を受けたのであるが最近川口を埋立て川幅が狭くなつたために今回の津浪では何等被害はなかつた。

(庶野)(トセツプ)(フンコツ) 庶野は今回の津浪のため被害を蒙つた主たる部落である。驛遞の主人郵便局長岡氏の談によると、海拔 8.7 米の同驛遞の家屋土臺と略同一の高さにまで波は押し寄せたさうである。尙同氏の津浪實見談を記すと次の様である。

この附近一帯の海底は 100 乃至 150 米位海岸から距つたところで約 7 乃至 8 尋で磯濱が可成沖の方まで續いておりそれより沖合は急に深くなつてゐるさうである。庶野に於てはシトマン川河口の 2 戸全潰。その他壁、腰板等を破られた被害は至る所にある。同氏は津浪當時の様様を更に詳しく説明されて曰く、先づ津浪で呼び起されたのは午前 3 時過ぎて強震後 40 分であつた。地震は當地方でかつて経験したことのない位大きく長びいた。第 1 回の津浪は同驛遞の石垣の下(海拔 7.5 米)まで来りその後何回も小さな波は襲來し最大なるものは午前 3 時 30 分過ぎてあつた。第 1 回目襲來してから後暫くは波は來なかつたので何氣なしに海岸に下りた所大なる音を立て、水は凄い勢で引いてゆく。再び波は海岸に打寄せたがこれは第 3 回目の比較的小さい津浪であつた。その後約 10 分間にて最大なる津浪となつて星明りに沖を透してみると波頭が一直線に白く碎けて進んで來るのを明瞭に認めることが出來た。波は眞南より押し寄せ同氏宅の下まで來たときには庶野部落の東端には未だ來てゐなかつた。それより非常な速度(同氏の談によれば急行列車以上)を以て海岸を東に廻り東端に近き家屋は全壊或は大破を蒙つたとのことである。これより先第 1 回の津浪の來た時には前記シトマン川河口の家屋は破損を受けず、直ちに警戒のためフンコツまで人を走らせた。トセツプまでは約 1.5 軒の距離があり夜道に雪が數尺も残つてゐたのだが一生懸命走つた。トセツプに到着後間もなく最大の津浪が襲來し 8 戸中 2 戸のみを残し全部流失してしまつた。然しこの警報のあつたため人々は無事避難することが出來た。但しフンコツまでは警報が間に合はなかつたため死者 2 名を出したる家 1 戸、1 家 6 人中 5 人の死者を出し流失した家 1 戸を出したことは實に遺憾であり氣の毒であつたと同氏は暗然と語られた。

この 2 戸の家は海岸の岩陰にあり水際よりは相當高い所にあつたのであるが津浪は 6~9 米の高さで襲つて來たのでどうすることも出來なかつたらしい。兩家屋とも家の裏は絶壁であつてよし津浪の襲來を氣付いてゐても避難することは不可能であつたらう。

(ルーラン) ルーランの南端に立つて見渡すと北端の民家は大半、戸、障子、腰板を

打抜かれたためか新しく修繕されてあつたのが目についた。この部落の某氏の談によると道路面(海拔約 2.4 米)を越す位の波が強震後 40 分の後に來た。それに續いて 2 度同程度の波があり第 4 回目の波は最大となり家屋の破損、船の流失等の損害をもたらしたさうである。第 1 回目よりこの最大の波まで約 30 分間であつた。津浪が引くときには通常の干潮時の汀線より 3 倍も沖の方まで海底が現はれ、後暫くして再びゴーと恐ろしい音を立て、襲つて來たといふことである。

(チヒラ) ルーランよりチヒラの間は残雪未だ腰を没する位、全部落浸水しその内 2 戸大破し、小兒 1 名はその下に壓死した。部落といつても全く淋しい寒村である。

(小越) 當部落にては津浪のため民家 1 戸流失、死者 1 名を出した。この附近は緩傾斜をなして家屋は籬段の如く順次に高い所に立てられてゐるが被害を蒙つた家は最も低い所にあつたのである。

小越より北約 10 軒の間は砂濱廣く、景色優れ、百人濱の名稱を以て知られてゐる所である。この間民家としては 1 軒もなく、幾條となく氷解の水を集めた河が滾々と海に注いでゐる。内には波を立て、相當すごい勢で流れてゐるものもあつた。海岸線は平坦で所々に津浪のため漂流して來た物が汀線に並行して散在してゐるのを認めた。

(襟裳岬) この附近では津浪の高さ約 3.6 米であつた。

(油駒) 2.4~2.7 米

(歌露) 3.0~4.6 米

(歌別) 4.6 米

(幌泉) 幌泉は村役場の所在地であつて海岸に設けられた防波堤を越へ岸に襲來した波は漁船數十艘を破壊し民家は大概床下に浸水した。波高は 2.7~3.0 米であつた。

日高國様似郡

様似村(日. 様似) Map No. I, (8). (9). 8.9

(誓内)(幌滿)(エハオイ) 誓内にては 2.4~2.7 米。幌滿, エハオイにては約 2.1 米の波が押し寄せたが民家は相當高い所に建てられてあつたために何等の被害はない。平常の汀線より約 15~20 米の地點に雜漂流物がずつと並んでゐる。

(冬島) 冬島の漁業組合長の談によると冬島附近には海藻が多く採集されるのであるが津浪のために岸の岩に打上げられ、約 2.4 米の高さの所に附着してゐたことを認めたとのことである。尙この 2.4 米の高さの津浪は僅かに 1 回あつたのみで當日は晝過ぎまで潮汐の干滿があつたさうである。海岸に乾してあつた海産物、磯船數艘流失

の損害を蒙つた。

(様似) こゝでは漁船の流失、乾魚の流失程度の被害を認め得た。様似海岸にある一民家では干潮時の海拔約 2.1 米の所まで水が押寄せたといふことである。この家の人は津浪當時水の押寄せたことを知らず夜が明けてから津浪のあつたことを知り同日は晝頃までに著しい波が 2~3 回あつたことを認めた。先づ 2.1 米程度の津浪であつたことは確かである。漁船数艘流失或は破損した。それより東約 4 軒、サヌンベに至る海岸線に並行な道路上には所々津浪のために破損してゐるところを認めこの道路を越して水が押寄せたことが知られた。津浪はこの附近までは確かに大きかつたと言はれる。

日高國浦河郡

浦河町(日.浦河) Map No. I, (9). 11

こゝの海邊には別に被害はなかつた様である。浪高 1.5~1.8 米。

荻伏村(日.浦河) Map No. I, (9). (10). 12. 13

浪高約 1.5 米。

日高國三石郡

三石村(日.三石) Map No. I, (10). 14

前者同様約 1.5 米。

日高國靜内郡

下下方村(日.靜内) Map No. I, (10). (11). 15. 16. 17

下下方(シモケホウ) 今は靜内といつた方が判り易い。町のはづれの染退川の河口、及び日高門別の門別川の河口に於ても氷の粉碎されたことが認められたそうである。

靜内から三石、荻伏に至る間、海岸には前にも述べた流木、藁屑等の漂流物が海岸に連続して打上げられてゐる。いづれも 1.5 米程度の津浪の襲來した事を示してゐる。

日高國新冠郡

新冠村(日.新冠) Map No. I, (11). 18

判官館の舊跡で有名なる新冠の附近でも新冠川河口の氷が浪のために川岸に打上げられたさうである。

日高國沙流郡

厚別村(日.沙流) Map, No. I, (11)

(厚別) 厚別川の河口に張つてゐた氷は津浪のために川岸に打上げられて粉碎してゐたさうである。

門別村 (日. 沙流) Map No. I, (11)

(門別) 門別では津浪當時は 1.5 米位の波が數回押寄せ、枯木の株、蘘屑その他の雜物が満潮時の汀線より高い所に打上げられてゐるのが連続して見得られる。土地の人も津浪のために打上げられたのだといつてゐた。

膽振國之部

膽振國勇拂郡

苫小牧町 (膽. 勇拂) Map No. I, (13)

苫小牧町の海岸では 0.9~1.2 米程度で僅かに津浪の痕跡らしいものが認められる。

膽振國白老郡

社臺村 (膽. 白老) Map No. I, (13)

白老村 (膽. 白老) Map No. I, (13)

共に波高約 1.2~1.5 米程度。

膽振國幌別郡

登別村 (膽. 幌別) Map No. I, (14)

前者同様約 1.2~1.5 米程度の波が認められる。

室蘭市 (膽) Map No. I, (15). (20)

室蘭港に於ては何等の被害もなかつたが同港に据付けられた檢潮儀の記録によれば平均水位より 0.5 米位の波が明瞭に記されてゐるとの事である。

(ホロモイ) (ベキリウダ) 室蘭港の北岸にある兩地では全く津浪を認めることが出来なかつたらしいが 0.3~0.6 米位の波は當然押寄せたらしい。

膽振國有珠郡

伊達村 (膽. 有珠) Map No. I, (15)

(エントモ岬) 虻田、西紋鼈の略中間にあるこの岬附近に於ては僅かに潮汐の不時の干満が 0.6 米程度に起つたことを長流附近の人々が認めたさうである。

膽振國虻田郡

辨部村 (膽. 虻田) Map No. I, (16)

(禮文) 内浦灣の最も奥に近く存在する部落であつて禮文華川の河口に近く、砂濱

に点在する漁民の家屋は海岸より相当高い所にあり被害は無論ある筈なく、人々は津浪の襲來を知らなかつたらしい。たゞ大きな波、高さ0.9~1.2米のものが數分置きに數回押寄せたのを見たものが2~3名あつただけである。

膽振國山越郡

長萬部村(膽.山越) Map No. I, (16). (17)

(訓縫) 訓縫川の河口に於ては1.5~1.8米の浪が來たことが橋脚に引懸つてゐた雜漂流物によつて認められた。尙土地の人の話を綜合しても矢張りこの程度の浪が押寄せたらしい。この地點より北方約1軒の地點では0.9~1.2米位であつた。

八雲町(膽.山越) Map No. 1, (17). (18). 19. 20

(黒岩) こゝには0.6~0.9米程度の波が押寄せたのであるが津浪の痕跡は全く認められなかつた。

(遊樂部) 黒岩と同様であつた。

(山越) こゝでは0.9~1.2米程度。

渡島國之部

渡島國茅部郡

森町(渡.茅部) Map No. I, (19). 22. 23. 24.

(石倉) 1.2米。

(濁川) 1.5米。

(鷺ノ木) 1.2米。

森町の東、停車場より約1軒、中の川の河口附近は0.9~1.2米、これより僅か西の地點では1.5米、森町の中央部の海岸では0.6~0.9米位の波が押寄せた事が人々の話によつて想像することが出来る。

砂原村(渡.茅部) Map No. I, (20) 25.

駒ヶ嶽の北麓、噴火灣の入口に近い部落である。津浪當時平常より干潮の程度が大であり平常より僅か強く大波が押寄せた位で被害は皆無である。土地の者の案内にて町の東部では1.5~1.8米、町の中央部に於ては1.2~1.5米位の高さの波だつたらしい。

鹿部村(渡.茅部) Map No. I, (20)

當村は噴火灣の南側入口にあつて多少津浪の押寄せた形跡でもあらうと思はれたが

全く豫期に反し何等得る所なし、但し津浪の高さは直接外洋に面してゐるだけあつて同じ噴火灣の奥と比較すると稍高く 1.5~1.8 米位であつたらうと思はれる。

以上で内浦灣の沿岸を一週したことになるがさて津浪の高さを見ると灣口に近い森、砂原に於ては灣内或は灣の奥に比較して稍高く、而も灣口より内部に入るに從つて順次に波の高さは減少を示してゐる。又禮文より室蘭に至る海岸は對岸にくらべて殊に波が小さかつたことを認めた。内浦灣は灣口より内部に入るに從つて幅が廣くなつてゐるために斯の如く津浪が灣に入つてその勢力が順次に減退してゆくのであらうか、注目に値することと思ふ。たゞ以上に述べ來つた津浪の高さが不確實であるために的確なる數量を以て津浪減退の状態を定めることが出來ないのは遺憾であつた。尚こゝに附記しておくことは上述の如く、0.6~0.9 米位の高さの波であると平常の潮汐の干満と同程度或はそれ以下の水位の差である。それ故に津浪が押寄せた跡方は満潮時に沫消されて仕舞つたのが多い。然し目撃者の談によつて高さを推定すると津浪の灣内侵入に從つて高さの減少することのみは確實となつた。

渡島國龜田郡

錢龜澤村 (渡. 龜田) Map No. I, (21)

(根崎) こゝの海岸は磯濱で岸邊で押寄せた津浪は碎けて幾分湯ノ川海岸よりは津浪らしく見えたのであらう、この村の人々に聞けば水位は約 1.5 米位津浪の時に高くなつたさうである。附近の濱には所々藁を敷いてその上に木屑や小枝を集め乾してゐる、これは焚木に使はれるのであるが今回の津浪のために幾つか流された。

湯ノ川村 (渡. 龜田) Map No. I, (21)

湯ノ川村の海岸、大瀧温泉の附近にては強震後津浪が襲來するだらうといふので用心して居つたが僅かに満潮の汀線を少し上つた程度に波が打上げただけで何等被害は無かつたさうである。從つて強震のあつたことは誰でも知つてゐるが津浪を知らなかつたものゝ方が多い。

函館市 (渡) Map No. I, (21)

函館市では3月3日の強震は相當強く感じたらしく熟睡中の多くの人々戶外に飛出したが地震のための被害は見當らなかつた。港の船大工に聞いたところ函館港では強震の約 40 分後 0.6~0.9 米の潮汐の時ならぬ干満があつた。回数は7~8回までは數へることが出來たけれども、それより後は平常の波浪と區別がなくなつたので數へることが出來なくなつたさうである。

潮の干満は約 5 分乃至 15 分位の時間をおいて行はれたとの事である。先づ最大の波の高さは 0.9 米位あつたらうと思はれる。船舶その他の被害は殆んど皆無であつた。

渡島國上磯郡

木古内村 (渡. 上磯) Map No. I, (22)

當村海岸にては津浪に對して何等得る材料もなし、但し或者の言によると地震後約 1 時間たつて海が時化の時のやうな音を立て、波が 2~3 回打上げるのを聞いた。

知内村 (渡. 上磯)

當村海岸部落に於ては木古田村と同様である。渡島國の沿岸各地に於ても何等被害がないやうであるから北海道の調査はこれで打切りとした。

青森縣之部

青森縣下北郡

青森縣の東北端尻屋崎を含む郡であつて當郡の部落の多くは海岸より遠く距りて存在する故家屋の被害は皆無といふべく僅かに海岸に繫留或は陸揚げせられてありし漁船の被害を蒙りたるに過ぎず。

東通村、猿ヶ森、田代、尻屋各小學校よりの報告によるに何れも海岸より相當の距離にあるため津浪襲來の模様を目撃する事は出来なかつた。然し何れの部落に於ても地震後10分時間後位に大砲或は遠雷の如き音響を聞きたり。

主なる部落に於ける被害は次の通りである。

東通村（青.下北）

（小田野澤）地震は強かりしも津浪なし。翌朝平常より1~2間海岸に浪の寄せたる形跡を認むるのみ。

（白糖）小舟大破6, 發動機船小破1.

（尻屋）桐材100丁.

（岩屋）小舟大破2.

大畑村（青.下北）

（湊）小舟小破數4,（正津川）小舟大破3小破10,（上野）小舟大破2小破1
（二枚橋）小舟大破3發動機船略小破1,（木ノ邊）小舟大破6小破10,（釣谷濱）小舟小破1,（赤川）小舟小破1.

青森縣上北郡

六ヶ所村（青.上北）Map No. II, (1)

（泊）津浪第1回3時, 0.8米; 第2回3時50分, 3.6米;

津浪は潮が満ちて來る時の様であつたが一度寄せた波は再び下らず其の上に又量を増すといふ有様であつた。

寄せて來る前には潮はズツと引いてゐた。

3時50分の大波は大うねりを爲し海岸近くでは波頭が折れて來た。

（鷹架）當部落の津浪は至つて弱く損害も殆んど無く殊に眞夜中なりしを以て人々は翌朝起き出でし後, 少し強き暴れ海であつたと小屋を見て思ひしのみにて誰も津浪の模様等を見たるものなし。

海邊の納屋に納めし罌粕多少浸水せるものあり。されど流されず舟等は冬期なるを

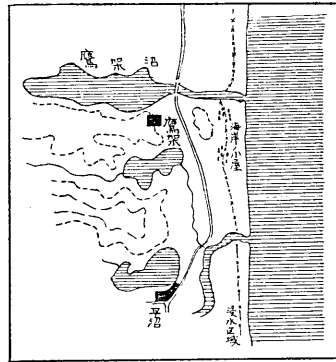
以て時化を恐れて遙か岡の上に引上げて置きしを以て損害なし。(第33圖参照)

三澤村(青.上北) Map No II, (4)

淋代以北の土地は海岸に家数も少いがため統計に表はれる被害も少い。當時この部落より以北は積雪 0.6~1 米あり。人々はこの積雪のため津浪勢力は緩和せられたといつてゐた。津浪の襲來は何回も繰返したがこの方面では約 20 分の間を置いて來たといふことである。

(谷地頭) 地震後 2 回の爆音を聞けり、津浪の様は一向不明。

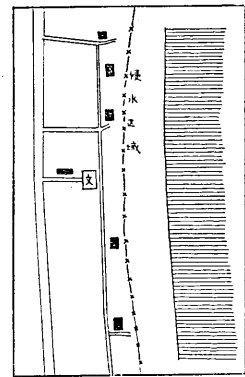
(淋代) 津浪と知つたのは 3 時 45 分でしたが、沖が暗くて何が何だか解りませんでした。飛出して見た時はもう私の学校の東端から 10 間餘りの所まで水が來てゐました。1 回目も 2 回目も更に解りませんでした。最後の波かと思つたのが 4 時 10 分頃に一段と高く見えました、明方の空は曇りではつきりしませんでした。兎に角學校から浪打際まで平常 395 米ありますが、一帯の海となつて砂濱が見えなかつたのが事實であります。



第 33 圖

津浪の 15 分位前に高い所から壘の上に飛降りた様な音がしました。又午前 4 時頃 八戸鮫岬の沖合に赤い火が探照燈の様に見えた。何か燃え上つた様であつたと云ふ者があります。(淋代小學校 吉田訓導)

(四川目) 海岸は砂濱廣く遠淺にて津浪當時陸地には積雪 0.3 米程ありしため津浪の勢力を幾分緩和したと此の村の人達は言つてゐた。波打際から約 200 米もあらうか小高い崖に積つた雪の下方が津浪のために洗ひ去られてドス黒い線が残されてゐた。あれが津浪の跡だといふ、海面からその線の高さを測定して見ると 4 米となつた。村民も 1 丈位だといつてゐた。この四川目部落では全戸 51 戸の中住家 10 戸、非住家 18 が流失され、住家 10 戸、非住家 4 が大破された。死者 6 名(男 4, 女 2 名)。この部落には海に面した方に砂防があつて助かつたといふ家がある。幾分



第 34 圖

淋代では舟の破損はあつたが其他罹災者なし。

海に一番近い家も波が近づいた丈。

廻りの地所よりは高いが浸水もせず完全に残つてゐた。

(第 35 圖参照)

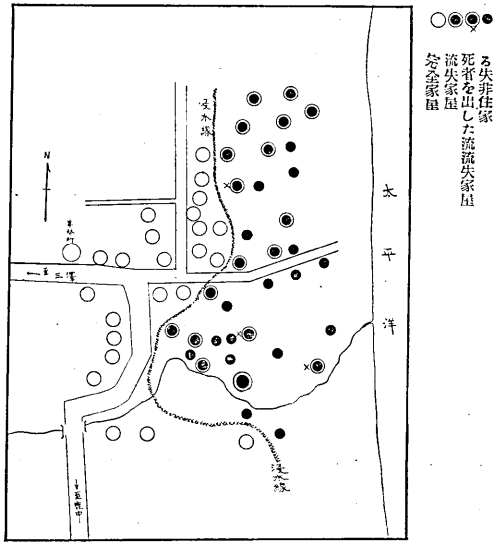
(三川目) 全戸 56 戸。

三川目部落は四川目よりは海岸の砂濱の傾斜が幾分急である。こゝでは浪の高さは約 4 米である。(第 36 圖参照)。

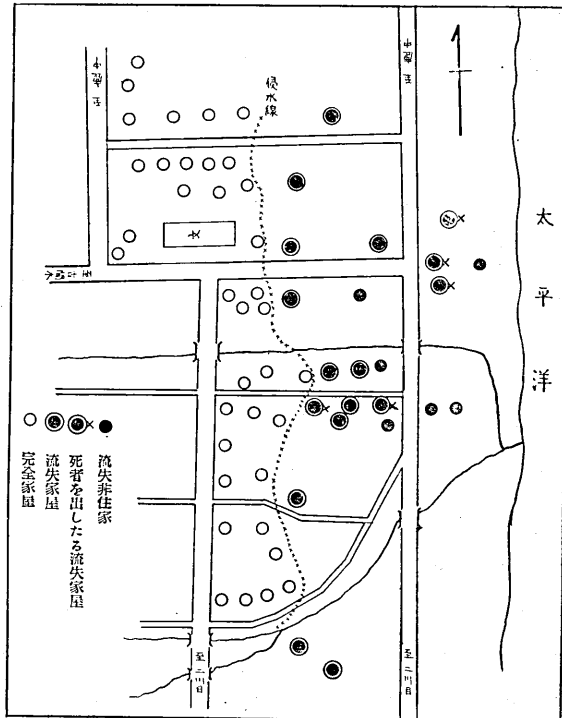
百石町 Map No. II, (5)

(二川目) 地震後約 40 分頃「ドドン、ドン」と 2 回大きな音がした。其後間もなく第 1 回目の津浪襲來す。第 1 回の浪で 300 米程浸水す。5 分後第 2 回目の浪襲來す。此回は汀線より約 400 米浸水せり。第 3 回目の浪は沖の方がノンノンノンと唸つて浪は青黒く土手の様に見えた。浪は岸にのろのろと近づいて來た。今まで黒く見えてゐた濱は一面に眞白く雪の様になつた。此の波が一番奥まで浸水した。津浪到着の時間及び浪高は 第 1 回, 2 時 57 分 (浪高 4.0 米); 第 2 回, 3 時 25 分 (浪高 7.0 米); 第 3 回, 3 時 50 分 (浪高 8 米)。

當部落の縣道より南にて 5



第 35 圖



第 36 圖

軒浸水，縣道の橋の兩袂の家2軒半浸水せり。暗夜の爲確實なる事は知り難きも沖一帯は低き黒雲の張りなびきたる如く見ゆるは盛上りたる浪なるべしその音もノンノンと聞ゆ。

砂洲に上りたる浪は殆んど崩れて白く光れば明白に襲來の様を見得たり其の音は秋雨の強く枯草に注げる如し。

津浪の30分位前。地震の直前に遠方にて大砲を放ちたる如き音南東海上より聞えたり。睡眠中のもも驚きて立ちたる程の強さなりと。又2時32~33分頃南南西の方位にて餘り高からざる空に電光に似て青白き光火事の如く見えて直ぐ消え失せたり消ゆるに際して西になびきて廣がりし如く思はると。光の強さは其邊一帯を明るくする程の強さなりと。

地震前後に井戸水の減けたるもの2,3あり，津浪襲來前二川目川の水2~3寸減けたり。

3日夜気温は夜半より急降下し，星の輝き物変き程の快晴となりたり。

(一川目) 第1回の波は3時頃，波高4.5米；第2回の波3時30分，3.6米。

津浪の前30分位に大砲の様な音「ドン」と轟き地響がして障子や硝子戸はガタガタと音を立てた。方向は南東。

第2回目の波の前約20分にも極低い音であつたが矢張り「ドン」と音がした。

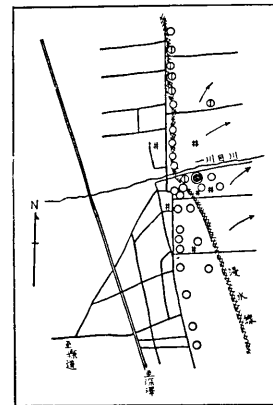
又地震の最中に南西の方向に當つて3,4回電燈の光よりもやゝ赤味を帯びた光が地面から眞直に上の方に7,8間の長さ上つた。

津浪は崩れて「デワデワ」と來た。然し押波も引波も普通の波よりは非常に速い様に見受けられた。

本村には倒壊家屋なく，破壊1，浸水5，流失破損附屬屋23，死體漂着2。

常には如何程波んでも濁らなかつた井戸が津浪3日前には五斗樽で8,9回汲んだら濁つたと云ふ。

(川口) 津浪は地震後約30分位大約3時00分頃に襲來した。津浪の來る直前に遠方から汽車でも走つて來た様な音が南方沖合から次第に北方に移つて聞えた。大分強い音であつた。又第1回の津浪の時，沖合に電光の様な星の様な光がピカピカ



● 流失家屋
○ 浸水家屋
□ 完全家屋
← 襲つて押しき井戸物の流れた方向

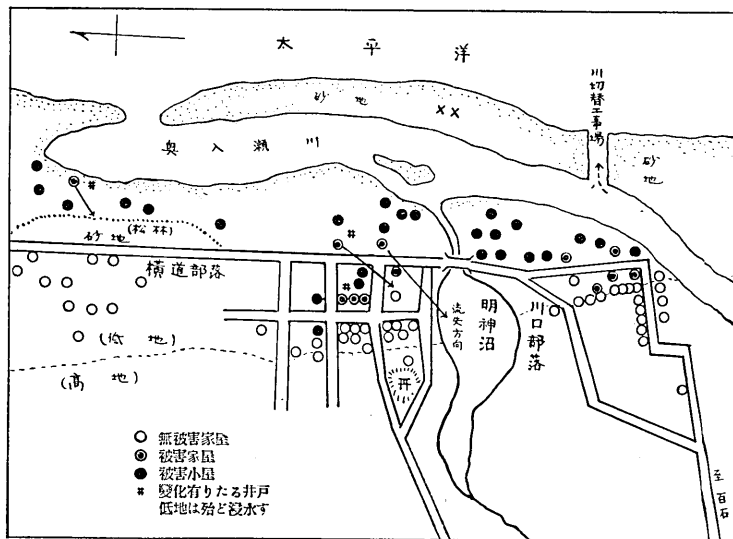
第37圖

と光つた。色は電光に赤味を帯びた色だといふ者もある。ピカッと光ると附近はボンヤリ明るく見えた。多分潮光りであらうと云ふ。

波の高さは明かでないが3米位。第1回波と第3回波の間は各波の間隔は5~6分であつた。第3回波と第4回波との間には相當の時間があつた様である。

小向仁助氏の實見談の一節。

波の音が「ハタ」と止んだ。はてなと思ひまして又家を出て沖合を眺めて居りました。ところが南の沖合から汽車でも走つて來た様な音が北の方へ移りました。すると間もなく沖から藍青色の山の様な大波が「グングン」やつて來ました。そして川口の砂丘(××印)を越える時浪は崩れシヤアシヤアと物凄い音を立て、一帯が眞白になりました。川上へ押流される船の速い事目に見えぬ位でした。云々。



第 38 圖

部落内の井戸水は殆んど全部10日も20日も前から減水してゐた。

津浪の前兆と思はれる事は鱈の大漁であつた事、明治29年の津浪のあつた年も鱈の豊漁にて今年も29年以來の豊漁の年であつたので老人達は津浪があるから油断ならぬと言つてゐたと。又嘗て此の地方にて獲れた事のない小鯛が昨年九月頃澤山とれた。又満潮の時でも平素の干潮位しか水が上らなかつた事。

3月2日正午から午後1時迄の間だと思ふが川切替工事状況を見學に海岸に行つた所が、兩日以前から海水が5~6尺も減じたと言つてゐた(海深が減)。案

内者は海底の砂が風で押寄せられて浅くなつたのだと説明してゐた。

青森縣三戸郡

市川村（青，三戸）Map No. II, (6)

（橋向） 流失家屋 非住家 2, 半潰家屋 非住家 9, 浸水家屋 $\left\{ \begin{array}{l} \text{床上 住家 3, 非住家 2,} \\ \text{床下 住家 8, 非住家 3,} \end{array} \right.$
船舶 小舟 流失 3, 大破 11, 小破 4.

下長苗代村（青，三戸）

（八太郎）に於ては，家屋半潰 非住家 4, 浸水 床下 非住家 6, 船舶 小舟 小破 6, 浸水田畑 23 町 8 段。

八戸市（青）Map No. II, (7.8.9)

八戸市地方の津浪は 3 日午前 3 時 30 分から 5 時 30 分迄約 10 回襲來し同 7 時ごろ迄に約 30 分おきに緩漫に襲來した。水は平均水面より 4.5 米高くそれがため八戸港内の發動機船約 150 艘遭難し，小舟の行方不明となつたもの約 50 隻あり。外湊海岸の納屋及び家屋に浸水した。燕島への橋は陥落し，湊海岸にある鯛しめ粕の流失，水浸しとなつたもの可なりあつた。

鰹港に踏査の節土地の人に聞いたところ津浪は初め小さいのが 2 回あり，3 回目のは大きく岸壁（平均海水面より約 2.5 米と測定す）を越え，同岸壁附近にある共同販賣所（岸壁上と略々同じ高さの所に建てられてゐる）の床上にまで浸水した。これから津浪の高さを推測すると約 4 米となる。尙ほ燕島棧橋は確かに流失して假橋が架せられてあつた。しかして第 3 回の大きい津浪は 3 時少し過ぎであつたといふ。それから數回小さいのが來て 5 回目だか 6 回目だかが又強かつた。この時はもう朝の 4 時を少し過ぎた頃だつた。地震のとき山の方に當つてドンといふ音が聞えたとの話。

又曰く第 1 回目の浪は 3 時 30 分にて高さ 1.8 米第 2 回目は 4 時頃 2.4 米，第 3 回目最大にして 4 時 30 分頃に襲來し高さ 3.3 米餘なりと。第 1 回の津浪は最初に潮の引くこと最干潮線より甚だしく襲來するときは盛り上る如くして來る。第 2 回目も初は潮引き襲來するときは折上る如く渦卷くが如し。第 3 回は潮の引くこと少く波頭を折返して猛烈に押寄せたり。津浪の直前に波音を聞く。また 5 分位前に地響の如き重音を北方に聞く。又地震前に北方に赤く（青くといふ者もあり）ポーッと空明るきを見たり。

當市各部落の被害次の如し。

（小中野） 重傷 1, 浸水 床上 非住家 3, 床下 非住家 12, 船舶 小舟 流失 大破

小破 18. 發動機船. 大破 19, 小破 14.

(湊) 浸水. 床上 住家 2, 非住家 7. 床下 住家 9, 非住家 28. 船舶. 小舟 流失 16, 大破 31, 小破 21. 發動機船 流失 1, 大破 12, 小破 25.

(白銀) 流失. 非住家 3. 全潰 非住家 7. 半潰 住家 2, 非住家 12. 浸水. 床上 住家 15, 非住家 88. 床下 住家 8, 非住家 30. 船舶. 小舟 流失 18, 大破 7, 小破 31. 發動機船. 大破 2, 小破 4.

(鮫) 家屋. 全潰 非住家 9, 半潰非住家 3. 浸水. 床上 非住家 2. 床下 住家 1, 非住家 5. 船舶. 小舟 流失 4, 大破 16, 小破 7. 發動機船. 大破 8, 小破 6.

(白濱) 第 1 回 2 時 40 分, 2.4 米; 第 2 回 3 時 00 分, 2.7 米; 第 3 回 3 時 20 分, 3 米. 津浪の押寄せる直前はバツタリと波音絶えて静かになつた (不思議に思はれる位)そしてモクモクと盛上る様に来て岸でドツト打付け大きな響がした. 各回共同様.

津浪の時音も聞かず又光を見たものもなし.

津浪後井戸水白濁せるものあり.

(白濱) 家屋. 半潰 4. 浸水. 床上 住家 5, 非住家 32. 床下 非住家 5. 船舶. 小舟 流失 11, 大破 19, 小破 3. 發動機船 大破 3.

(深久保) 家屋. 半潰 非住家 2. 浸水. 床上 非住家 1, 床下 非住家 2. 船舶. 小舟 流失 8, 大破 11, 小破 2.

(種差) 家屋. 流失 非住家 3, 全潰 住家 2. 半潰 非住家 1. 浸水. 床上 非住家 3, 床下 非住家 1. 船舶. 小舟 流失 17, 大破 5, 小破 4.

(法師濱) 家屋. 半潰 非住家 2. 浸水. 床上 非住家 1, 床下 非住家 6. 船舶. 小舟 流失 16, 大破 7, 小破 6.

(大久喜) 家屋. 流失 非住家 5. 全潰 非住家 1. 浸水. 床上 非住家 2, 床下 非住家 3. 船舶. 小舟 流失 15, 大破 11, 小破 4.

(金濱) 家屋. 流失 非住家 1, 全潰 非住家 4. 半潰 非住家 2. 浸水. 床上 非住家 1, 床下 非住家 5. 船舶. 小舟 流失 21, 大破 13, 小破 6.

階上村 (青. 三戸) Map No. II, (9.10)

此村は青森縣下では最も被害多し.

(道佛宇大蛇) 死 1, 重傷 5, 輕傷 7, 行方不明 1. 家屋. 流失 住家 8, 非住家 28. 全潰 住家 1. 半潰 住家 4. 浸水. 床上 住家 1, 非住家 3. 船舶. 小舟 流失 44, 大破 3, 小破 4. 發動機船 流失 1.

(追越) 死 1, 輕傷 3. 家屋. 流失 住家 1, 非住家 6. 全潰 住家 5, 非住家 3. 半潰 住家 1. 浸水. 床上 住家 5, 非住家 12. 船舶. 小舟 流失 11, 大破 5, 小破 6. 發動機船 流失 2.

(櫂) 家屋. 流失 非住家 12. 全潰 非住家 12. 半潰 住家 1. 浸水. 床上 非住家 4, 床下 非住家 3. 船舶. 小舟 流失 29, 大破 7, 小破 6. 發動機船. 大破 1.

(小舟渡) 輕傷 1. 家屋流失 非住家 2. 全潰 非住家 19. 半潰 住家 2. 浸水. 床上住家 2, 非住家 14. 床下 住家 8, 非住家 4. 船舶. 小舟 流失 35, 大破 21, 小破 15. 發動機船. 大破 5.

岩手縣之部

岩手縣九戸郡

種市村 (岩. 九戸) Map No. II, (10. 11. 12)

(平内) (川尻) 第1回目, 第2回目の波は未だ暗かりし爲よく判らず. 但し第3回目以下のものは海底からモクモクと盛上つて来る. 以後各回とも同様であつた. 第1回目の波は平内にては4時15分, 1.5米; 第2回4時55分, 2.1米; 第3回5時15分, 3.3米であつた. 川尻にては平内と同じであつた.

津浪の襲來前約35分東方に電鳴の如く又は遠方にて大砲を發射したる如き音を聞く, 又川尻にて3時40分に東の方向に電光様の光を見た.

川尻の津浪第1回3時10分, 3.6米; 第2回3時40分, 4.5米; 第3回3時50分, 6米ともいふ.

(横手) 第1回3時10分, 3米; 第2回3時40分, 3米; 第3回3時50分, 4.5米.

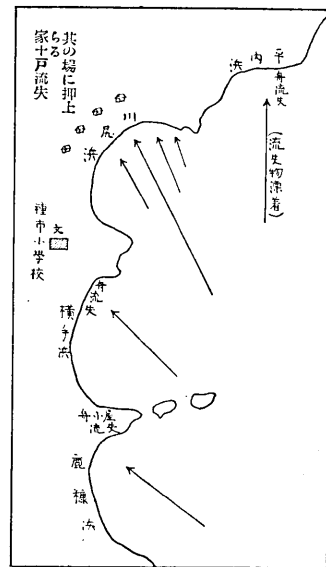
津浪は下からモクモク盛上る様に波は逆卷いて來た. 第4回目以下は潮の満ちて來る程度の強い様な有様であつた.

横手にては海岸の人は音を聞かず5里も7里も山奥の村ではドンドンと大砲を打つた様な音を聞いたと云ふ. 強さは就寢中の人の驚く程度であつた. 又青白い光を東南方に見てゐる.

(八木) 地震津浪のため被害を蒙つた鐵道は八戸線(八戸久慈間)のみであるが沿線の被害夥しく就中種市, 陸中八木間には海岸の民家は殆ど跡方もなく流失され, 所々線路の砂利が浚はれ, 八木川橋梁の兩岸の橋礎の裏約五米づゝ缺潰し一時列車運轉不能となる. この附近の海岸にては少くも3.5米乃至4米の高さの波が襲來したものとされる. 八木濱は被害最も多く全戸120戸の内流失41戸, 納屋51棟, 半壞の住家, 非住家を合して5棟である.

中野村 (岩. 九戸) Map No. II, (12. 13)

津浪の前20分頃大砲の如き音3回程聞えた. 又青白い光を見たもの小子内方面に



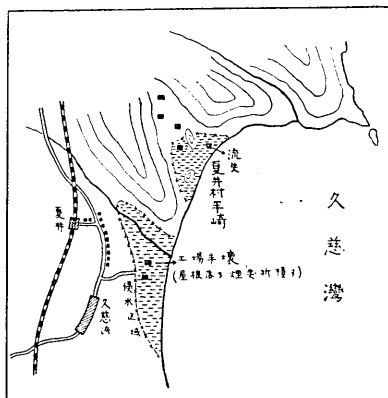
第 39 圖

ある。中野部落に井戸濁れ、又は水濁りし所あり。

(中野)(小子内) 第1回の波3時30分、第2回3時40分、第3回3時50分頃に到着したる由。

夏井村(岩・九戸) Map No. II, (14)

(半崎) 第1回波3時00分、6米; 第2回3時4分、4.5米; 第3回3時10分7.6米にて第3回目の波最大なりき。此外に小なるもの2回あり、津浪は潮の満ちて来る様にジワジワと押寄せ波の前方は崩れて来た様であつたが大きな石が押流されて来たので海底からかき廻して来た様である。各回共同様である。津浪の25分位前(5~6分前ともいふ)に南方沖合より恰も遠方を走る自動車の様な音(強さは50~100間程隔て、自動車の音を聞く位)が聞えた又午前2時30分から3時頃迄半崎海岸にて、南より東にかけて一線に通常海面より高く光が見えた、色は青白く(暗夜に波の光る色)水平線上に探照燈を以て照らした様に見えた。



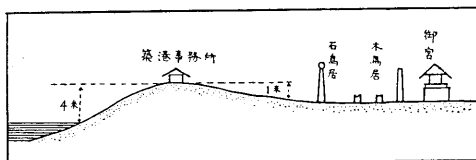
第 40 圖

久慈灣は灣口を略北 100° 東の方向へ向けた灣で、灣の奥は高 2 米。内外の海岸線に平行な砂丘と中生代岩層からなる海岸とからなり、海崖は北部と南部とにある。津浪はこの砂丘を乗り越えて久慈川の沖積地に浸水したのであるが、浪高は州河場の南方、久慈川氾濫原の出口南隅で測つた値は 3 米。(生のまゝ故潮汐干満により換算を要す)で崖下の1階家屋の下部羽目板、土臺の一部を流失大破してゐる砂丘上にあつた仕事小舎、漁船の類は殆ど流失して、之等は海岸に積重ねてあつた材木や久慈川河口に結氷してゐた厚い氷の津浪で破壊された裂片等が一緒になつて、著しい破壊力を示したやうに見える。久慈灣築港事務所の見張小舎はかなり破壊し去られたが久慈砂鐵工場は一部分破壊されたが流失するまでには至らなかつた様である。その當

久慈灣 Map No. II, (14)

筆者の觀察した時刻は 3 月 14 日午後 2 時~3 時頃である。

久慈灣は灣口を略北 100° 東の方向へ向けた灣で、灣の奥は高 2 米。内外



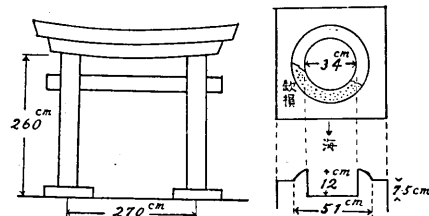
第 41 圖

の海岸線に平行な砂丘と中生代岩層からなる海岸とからなり、海崖は北部と南部とにある。津浪はこの砂丘を乗り越えて久慈川の沖積地に浸水したのであるが、浪高は州河場の南方、久慈川氾濫原の出口南隅で測つた値は 3 米。(生のまゝ故潮汐干満により換算を要す)で崖下の1階家屋の下部羽目板、土臺の一部を流失大破してゐる砂丘上にあつた仕事小舎、漁船の類は殆ど流失して、之等は海岸に積重ねてあつた材木や久慈川河口に結氷してゐた厚い氷の津浪で破壊された裂片等が一緒になつて、著しい破壊力を示したやうに見える。久慈灣築港事務所の見張小舎はかなり破壊し去られたが久慈砂鐵工場は一部分破壊されたが流失するまでには至らなかつた様である。その當

時の光景は物凄かつたらしく、若し砂鐵工場にゐる人が、外の浸水の景色を見たならば、その恐ろしさのため必ず逃げ出して、却つて流されたであらうが、幸ひ工場にゐた人は外の景色を見ないで夜を過したので傷一つ負はずに助つたと言はれてゐる。

海水の氾濫は主として沿岸及び久慈川氾濫原上で、湊部落の背後から久慈川に沿つては久慈驛の東方 1500 米附近に迄達してゐる。津浪氾濫の平面形及び測定浪高から見て久慈川氾濫原では北半の方が稍々高度及び浸水分布が大きい。特に氾濫原南隅砂丘の陸地側には人家が相當に建つてゐるが、今回の津浪では殆ど被害を受けてゐない。

久慈の海岸砂丘上の小舎にゐた人夫等が津浪の襲來で、裸足で湊町まで逃げたがその人達の話では津浪の夜は海岸は波が静であつたが、海に注意してゐると地震後 30~40 分位たつと海が急に騒しくなり、外へ出て見ると久慈灣の全海岸の汀線が異常に白く泡立ち恐ろしい音をたてゝきたので、取るものも取り敢えず逃げたさうで、少し後れた 1 人の者は時々津浪に浸つたさうである。この邊では人が全速力で走る程度の速さで侵入して來たものと見える。久慈町より湊に至る途上松方製鐵所附屬發電所の溜池(閉伊川に連絡あり)の結氷厚さ 20 糎が割れて津浪のため運ばれ四邊の田圃中に散亂してゐる。道路を越して 300 米位奥まで見受けられた。氷塊の大きさ大なるものは壘 1 枚位である。同じく久慈の海岸に稻荷神社の祠がそつくり残つてゐる、高さ約 1 米で 2 米角位に石で築き上げられた土臺にボルトで締めつけてあつた。その前に幾つかの木の鳥居(直徑 20 糎位の脚)が立つてゐたのであらうがボツキリと打ち折られて枯木の株のやうに地上僅か 10 糎位が残つてゐた。又石の鳥居(第 42 圖参照)は片脚だけを残してゐる。一方の脚(石材)は舊位置より約 100 米も陸地の方へ押流されてゐる。これはゴロゴロと轉つたらしく同鳥居の笠木及貫(いづれも石材にて作られてある)は脚より 10 米ばかり離れた所に轉落してゐた。いづれも舟又は小屋の材料等の擧突したために破損したらしい。



第 42 圖 石の鳥居の損傷状態

長内村(岩・九戸) Map No. II, (14. 15. 16)

(二子)(小袖)にも被害があつた。

宇部村(岩・九戸) Map No. II, (16)

久喜から野田を経て玉川附近に至る海岸は大體野田附近を基邊とした東向きの海岸

で、所謂久慈型白系が露出してゐるところで、海底は凹凸があるが餘り深くない。

(久喜) 海岸の斜面に住家があり、漁船、漁小舎が海濱砂上にあるので海岸際の數軒の家屋と海濱上のもものが破壊流失されただけで済み、浸水区域も狭い。波高は部落中央部附近で測定したところによると 4 米内外である。久喜-野田間を結んでゐた電柱の内、濱砂中に立てられたものには流失したものがあつた。(3月14日調査)

野田村 (岩. 九戸) Map No. II, (16. 17. 18. 19)

(廣内) 殆ど被害がない。廣内の澤の出口で、津浪の高さは同様に 4 米内外である。

(野田) 宇部川と明内の澤との合しな大きな溪谷底は低平な沖積原が發達し、野田村は近時の林業の勃興により、その沖積原の上に發展しやうとしてゐた部落である。海濱は N 10° E 位で、宇部川口はその北端、港に開く。海岸には 3 米内外の砂丘横はり、汀線に平行してゐて、その陸地側には小松林があつた。

津浪は之等の小松林、砂丘を超えて海岸にあつた大材木と共に三日市場、野田部落の東端を襲ひ、港では波高 6 米に達した。(3月14日調査)

(三日市場) 三日市場及海岸砂丘の陸地側の人家には流失したものが相當にあつた。併し久慈灣と同様に、樹木が全く薙ぎ拂はれてしまふと言ふやうなことはなかつた。

津浪侵入の平面分布は沖積原の低平地であつたためかなり廣面積を占め、久慈灣同様に北部に廣く、野田村の中心地は辛うじて難を免れた。玉川野田間の海岸道路は野田町附近では津浪を被つたが、交通に差支へる程の被害はなかつた。

(米田) は野田に比して狭い沖積原であるが、極めて低平である。灣口は N 45° E の方向に開く。北隅の家屋が數軒流失してゐる。改修の新道は殆ど破壊されなかつた。流された漁船等が田圃の中に置かれた儘であつた。

(玉川) 10 米以上の海岸段丘上に部落が存在するため、道具小屋、漁船の流失をみたのみである。この附近では津浪の高さは餘り高くなく、玉川の入口で約 4 米内外であつた。

(安家) 安家川河口は幅約 200 米程で、長さ 1200 米に達する潟があり、濱堤砂に堰かれてゐる下安家の部落は海岸から 500-600 米の處の北岸低い段丘上に分布してゐて、其の高度は海面上 8 米内外の位置を占めてゐるため、海水は陸の中へ 1200 米以上も侵入してゐるが、被害は殆どなく、改修新道の鐵筋コンクリートの橋も殆ど破損せず、津浪もこの橋を越えなかつた。

海岸南側で測定した津浪の高さは5米で、そこにあつた家屋も流失を免れて、腰板が剥がされてゐた。河口の瀉の結氷は破壊されて周囲に置き残され、耕地の上に横はてつゐるが、徑10厘位の割木で作つた柵を破壊する程度でなく、後に記述しやうとする二つ、三つの例に比べて、稍々浪の速さが弱かつたやうに見える。

玉川から安家川入口までは花崗岩の急な海岸で、津浪の高さを知ることができなかつた。この海崖は久慈中生層の不整合線と略々一致するので沖には海蝕面が作られ易い中生層が存在すると考へられるので、海岸は野田附近と同様比較的遠淺ではないかと思はれる。海濱の向きはN120°Eである。瀉も津浪の勢力を費させる役に立つたやうに見える。

尙津浪の高さは奥で増してゐるやうに見えなかつた。(3月13日午後2時半前後調査)

岩手縣下閉伊郡

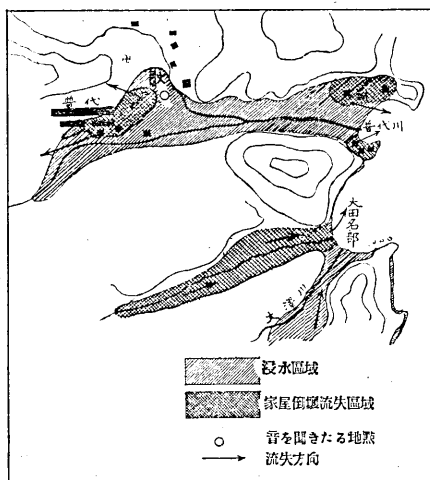
普代村 (岩. 下閉伊) Map No. II, (19)

津浪は第1回2時50分、第2回3時00分、第3回3時15分頃に襲來す。第2回目の浪が最も著しかつた。津浪はドツト水鉄砲の様に打付けて來り見る間に一面の水泡となる。

地震後普代に於ては大砲の如き音を聞く、津浪襲來前4分(正確に)風の如き音何れも東南方より聞ゆ。兩方共弱音なり。又地震後約10分頃東北方一帶に明るく橙色に丁度火事の時の如くボーツとした光を見たといふ。

(堀内) 堀内の部落は50米の海岸段丘上に横はるので著しい被害はなかつた。唯だ堀内の西北の海濱にある大倉庫はその腰板を破壊された程度に終つた。汀線からその腰板までの高さは約8米で相當高い。

堀内の段丘は礫層と久慈中生層の續きらしい軟弱な岩石からできてゐる。



第 43 圖

元村 } 罹災 戶數 85 戶 死 行方不明 131 人
太名田部 }

(澤) 澤の部落は海岸から450米内外の奥の兩斜面にあつて、澤は狭く、沖積原等はない。出口は多少ラツパの口のやうで、左右に海の方へ突出して開く海崖がある。谷底は眞直ぐでなく、少々S字状をなしてゐる。津浪は海岸からS字谷に沿つて、約450-500米も陸地へ侵入した。澤の各底海岸近くにあつた家屋は流失破壊した。津浪の高さは海岸で6.5米、海岸から200米の谷底で8米、325米近所で10米、末端で12米に達してゐて、海岸より奥の方が波高が増してゐる。入口の方では灌木はそれ程でもなかつたが大きな立木は薙ぎ倒されてゐる。海水侵入の末端には「そだ」その他家財破片が密集してゐる。

(白井) 白井の東南の澤は海岸で懸谷地形を示してゐるので津浪の侵入は極めて少く、海濱の納屋漁船等が流失した。

(力持) 力持の澤は澤の澤と同様に狭く、河口は岩礁で、大きな高い岩が横はつてゐる。津浪の高さは出口で約6米で約250米ばかり侵入した。津浪の侵入した末端は10米で、奥で高くなつゐる。海岸にあつた漁船、薪等が流失した。

(普代) 普代の谷は普代川の沖積原で、極めて低平で約1.5%の傾斜である。谷幅は平均300米内外で、普代村部落のある位置は茂市や芦渡からの合流點で、氾濫原は更に廣まつてゐる。河口は砂丘があり、海岸へは稍急に迫つてゐる。

津浪は河口から約2000米の内部に入込み普代村郵便局附近は浸水した。河口で津浪の高さ約8米。

河口附近の海岸松林中にあつた家屋は粉碎されてゐた。河谷兩側の松林は地の上から約3米附近まで小枝の折られたものや、傷付いたものが見られた。普代川氾濫原が全く低平であつたため浸水面積は相當廣かつた。併し普代部落は海岸から2000米も離れた位置にあつたため、人畜、家屋の被害が甚だ少かつたのは不幸中の幸と言はねばならぬ。普代村の被害高の大部分は太田名部の被害が占めてゐる。(3月13日調査)

(太田名部) 太田名部はこの附近で最も著しい被害を受けた部分で、全部落の大半は流失し、僅に普代元村に至る道路のある澤に建つてゐた數戸が残されただけである。津浪の高さ約8米内外。(3月12日調査)

田野畑村 (岩・下閉伊)

羅 賀 戸數 11.

平井賀 戸數 61, 人口 430 人.

嶋ノ越 戸數 65, 人口 360 人, 死者 18 人.

(明戸) 明戸の澤も普代の澤と同様に低平で、氾濫原は主として松林からなつてゐる。谷底の平均傾斜は 1.13 %、津浪の高さは河口北隅で 8 米、南隅の岩の部分で同様に 8 米あつた。浸水範囲は河口から約 1 軒に達してゐる。津浪の高さは末端で高まつてゐるやうに見えない。小松の類は餘り折れてゐないが、丈の高い樹木は薙倒されてゐる。耕地は相當に荒された。明戸の部落は海岸から 1750 米奥にあるので殆ど被害がなかつた。(3 月 12 日調査)

(羅賀) 羅賀は 20 米と 40 米との段丘上にあるので、海岸に沿つた家屋が少し被害を受けたのみでなる。

(平井賀) 平井賀の谷は約 300 米の奥行を持つた灣の奥にある部落で、近年沖積原にも人家が相當密集したが、こんどの津浪で著しく被害を受け、流失 60 戸以上にも達してゐる。併し斜面に在る家屋は殆ど被害がなかつた。筆者の調査した時は既に救護班が設けられ、食糧の分配等が行はれてゐた。津浪の高さ 8 米、浸水距離海岸から 500 米。平井賀と島ノ越との間の一つの澤では津浪の高さ出口にて約 8 米。上流の方稍高く海水侵入の距離 500 米。

(嶋ノ越) 嶋ノ越は平井賀と同様に被害の大きな處であつた。部落は松前澤河口の沖積地にあり、一部は 40 米内外の高さの斜面に分布してゐる。海岸は廣い砂濱で、砂丘が谷の口を塞いでゐる。津浪はこの海岸を超えて、低い沖積地にある家屋を押し流すと同時に斜面の下部に在つた家屋をも破壊した。津浪の高さは海濱で 4.5~5 米の間で、沖積原上の部落は殆ど全部流され、土臺だけ僅に砂中から現はれてゐた。二階屋の上半分が流し残されて砂濱上に横はつてゐた。海水侵入の奥行は海岸から約 500 米で松前澤を溯つて入り込んだ津浪の高さは奥で 6 米位で海濱より少し高くなつてゐた。侵入区域の末端は少し高まつて松林になつて、破壊した家財が松林の根元に密集してゐた。流失戸數その他(計 65 戸)が比較的多いのに死者その他(18 名)が少かつたのは避難が速かに行はれたためであらう。こゝも筆者が訪ねた時は配給船が着いた時で、漁船もないので小さな端舟で數回となく物品を運んでゐた。

嶋の越の南の澤は狭い澤であるが約 450 米も入込んでゐる。

(切牛) 槇木澤の下流である切牛の南の澤は普代や明戸の澤と同様に低平な沖積地である。従つて、その被害状況は殆ど前二者と同様である。澤の出口の海濱にあつた數ヶの納屋は殆ど影も形もなく、數回となく押し寄せた津浪が次第に浪高を減じ、その都度汀線に破壊した物を残して行つたのがよく追跡できる。出口附近の林の樹木(徑

30 糶) はすつかり根元から切られて何處かへ持つて行かれてゐる。

津浪の高さは 8 米乃至 7 米で、海水の侵入した奥行は海濱から 850 米に達してゐる。この 850 米附近では流れ込む海水の速度が漸く弱つたためか樹木は倒されてゐるだけである。筆者は浸水区域の最奥で有孔蟲を多數に含んだ濱砂を採集することができた。海水の流れ込む際、濱砂が多量に運ばれてくるやうに見える。(3 月 12 日調査)

小本村 (岩・下閉伊) Map No. II, (22. 23)

小本村唯一の耕地、中野-小本間 700 町歩の畑地は津浪のため全部被害をうけたが本年度中の畑作は植付けるとも収入は皆無であらうと云はれてゐる。尙ほ大半は砂地となつた。死者 160 名、行方不明 38 名、家屋被害 144 戸に上り田老村と同様一般の同情を集めてゐる村である。

津浪襲來 30 分位前、地震と同時に約 1 分間に亘り東南の方に非常に大きな地鳴を聞いた。津浪の時にはボーツと赤いほつそりした光を見たと言ふ。

(小成)	罹災戸數 9 戸	人口 59 人	死亡 36 人
(中野)	1 戸	7 人	1 人
(小本)	79 戸	532 人	死亡 112 人 行方不明

津浪の最初の浪は 3 時 30 分頃に襲來す。

(彌生澤の南)(水尻崎の澤) この澤は此附近一體にひろがる海岸段丘の薪炭積み出しの爲に歩行容易の小徑が作られてゐて、澤の出口、海濱には之等の積み出しの物置小舎が作られてゐるが、之は津浪で流されてしまつた。浪高 5 米。

(小本) 小本は小本川河口にある小都邑で、小本川は南方から突出した山嘴のため河口附近で大迂回をして海に注いでゐる。小本の部落はこの南からの山嘴の内側即ち陸地側に大部分を占めてゐて、この山嘴の裾を海濱に迄達する新しい部落もあつた。海濱近くにはコンクリート土臺に金物を埋めて、上部の木造家屋をしつかり附着させたやうなしつかりした家屋等もあつたやうだが、之等は殆どすつかり押し流されてしまつた。無事だつたのは小本橋通以南の山嘴の内側にあつた部分だけで、小本橋通以北では橋の東裾にある 3 家屋が、その内の東端のものが土藏であつたために助つただけである。小本橋の欄干、橋脚の一部も海水の流入の際、流されて來た家屋その他のものに衝突されて多少破損した。

谷幅は 650 米ばかりあり、侵水区域の奥行は約 1500 米以上である。津浪の高さは

3~4 米で、小本街道の桐の木に附着してゐる海藻、傷跡を調べると地表から平均2 米位の高度である。(3 月 11 日調査)

(中野) 東端の一部が被害を受けた。

海岸砂丘上に高さ 1.5 米の土臺を持つ記念碑があつたが碑は倒れてゐた。又海岸南側の崖の中途(約 6 米位の高さ)に木製の鳥居があつたが、之は流失せずに残されてゐた。小舟の類は海水の流れ込むと同時に小本川の上流へ流されて、桑畑、河原等の中に數多くの漁舟が點在してゐた。

吹雪の暗い空に炎々と大焚火をして流失物の整理に活躍してゐる處は何となく陰慘な感があると同時に涙ぐましくもあつた。

(茂師) 茂師の南小成の澤は 3 月 10 日午後 3 時頃調査したが、谷底にあつた家屋その他は殆どなく津浪がこゝで著しく暴威を逞うしたことを示してゐる。谷壁の傾斜は甚だ急で、岩壁である。谷底は少々傾斜を有し、階段状に盛土して家屋が 20 戸位並んでゐたのが、僅に土臺石のみ残して、跡形もなく流失してゐた。死者も相當にあつた。電柱その他も全く浚はれて、岩壁に囲まれた谷と化してゐた。海水の侵入距離 600 米で津浪の高さは奥で高くなつてゐる。

筆者の訪ねた時は死者の供養をしてゐる時で、筆者も暫し黙禱哀悼の意を表した。

田老村(岩、下閉伊) Map. No. II, (23. 24)

田老、乙部に於ける津浪襲來の模様を調査するに大體次の如く回答を得たり。

第 1 回目大浪は 3 時 0 分、6.7 米位；第 2 回 3 時 1 分~3 時 2 分頃 6 米以下。

最初小浪(此地方にて「ヨダ」と稱する程度)あり第 2 回目最大にして(6 米位か)其後は次第に衰へて數回あり。6 時頃にも小波の襲來を見たり。強大なるもの 2, 3 回にて其の浪間は凡そ 1 分位と思はる。

(以上は小學兒童及村民、職員其地多數より調査せる所なるも一人として判然たる答を爲すものなく、想像を加へて記したるものなり)(本村は全滅の厄にあひ各人極度の恐怖に陥り、人心動搖して、辛じて浸水せずに避難したるものも泣き喚ぶ者、凍えんとするもの、重傷者等の中にあり加ふるに暗夜の事とて浪の高さ、回数など能く知りたるものなし。)

津浪は 6 米内外の高さにて浪の上表面だけ白波をけたてゝ、夫より下方は只黒く見えて押して來る様に見えたといふもの多數なり。此の爲か風起つて浪に先立つて家が倒れたと云ふ。各回共同様の來方なり。

1 秒 10 米位の早さにて山上の木々を吹く暴風の如き音を立つて来れりと云ふ。

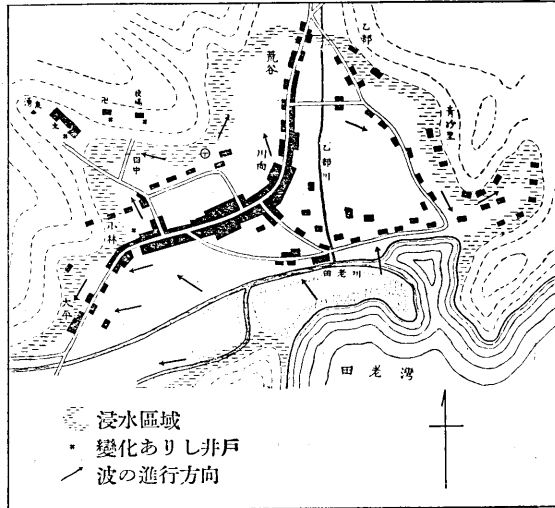
高臺なる部落にては音を聞きたりとも言ふも、此處にては波のよせる音のみ聞けり。光を見たといふものなし。

冬以來めつたに涸れた事等なき井戸や涌泉など涸渴せり。津浪後は暖氣加はりし爲か復活せりと云ふ。又減水の爲か濁つた井戸(小林の井戸)あり。(以上小學校長談)

南西方面より順にやられた即大平, 小林, 町の中央, 川向, 青砂里の順に襲來し, 波と同時に自動車の前燈の如き青々とした光次第に岸に近づきたりとも云ふ。

漂流物は3日朝に港灣内3分の1を覆ひ居たるも後風の爲次第に沖へ流され行方不明。

當村に於ける重なる被害次の如し。



第 44 圖

田老	罹災前	戸數 500	罹災	476 戸	死者 950 人.
乙部		人口 3000		3194 人	
下攝待		戸數 18		3 戸	
		人口 126		21 人	
小港		戸數 7		4 戸	死者 6 人.
		人口 35		34 人	
檜内		戸數 26		2 戸	死者 2 人.
		人口 185		14 人	

(攝待) 攝待の澤は普代や, 明戸の澤と同様に低平な谷底を持つ澤で, 平均傾斜は 0.66% に達してゐて極めて緩い。河口にあつた家屋數戸と下攝待の部落の東端の 2 戸ばかりが被害を受けた。侵入距離は海濱から約 1300 米に達した。津浪の高さは海崖の貝砂の分布から約 12 米の高さを示すが, 陸内ではそれよりずつと低くなつてゐる。

この澤では明戸の澤のやうな森林の被害は見受けられなかつた。(3月11日調査)

(青ノ瀧) 青ノ瀧の南側の澤は比較的狭い澤で、澤口に小舎が1戸あつたが流失した。海岸は砂礫の濱でかなり急である。重津部からこの澤口への下り道途中で漁小舎が4軒斜面に上下に並んで配列してゐたが、最下の2軒は流失し、真中の1軒は破壊し、最上部のは何ともなかつた。谷底の殖林の一部は破壊されてゐた。津浪の高さは破壊された漁小舎の基礎の高さをそれとして約10米を示してゐる。

(3月10日調査)

(重津部) 重津部の澤は青ノ瀧の澤と同様で、津浪の高さは7米、浸水奥行550米、乙部野澤に至る海濱は殆ど津浪の被害跡をみない。

(乙部野) 乙部野は出口が廣く、河口には渦状の水溜があるが、そこに張つてゐた30糎位の米は津浪のために破壊されて、押し流され谷壁の森林中に引懸つてゐる。又津浪浸水の末端には之等の破壊された氷が綺麗に汀線状に排列されてゐる。森林中には罌らしい魚と鰻とが畑上にコチコチに凍つて死んでゐた。津浪の高さ河の出口で10米、浸水奥行約675米、森は餘り破壊されてゐない。

(田老) 田老は3月10日午前10時30分-11時に宮古からの汽船にのつて行つた。端舟がないので田老村の慘狀を前にして暫く持たされたが漸く上陸することができた。

流された人達の内、奇跡的に助つた人が數人あるが、その人達は海水と共に押流され辛うじて岸近くに泳ぎつき、水に浸り岩にかかりついてゐて助けられたとの事である。灣の北隅船着場には今迄無かつた大きな(徑2米内外)石塊が海中に露はれて來て、一寸船着けに不便になつた由である。

田老は全く正視することさへ出来なかつた。縣廳の地區整理の人が元の地割區分を知らうとしても、尋ねる人もなければ、目標、痕跡もないと言ふ始末である。筆者も無鐵砲に山の端に向つて被害地を歩いて行つた。家畜類は大部分肛門より出血して斃死してゐた。何れも寒氣のためコチコチに凍つてゐると言ふ始末である。

(小港) 小港の澤は海濱から約370米位の處に4戸程の人家があり、澤の底は凹凸のある稍々傾斜した谷底で畑が階段状に作られてゐたが、浸水區域は殆ど荒されてゐる。

津浪は谷の奥370米にある人家を襲ひ、東端にあつた2戸に被害を與へてゐる。畑地も殆ど荒されたが、階段状の盛土や道路には大した被害がなかつた。津浪の高さは

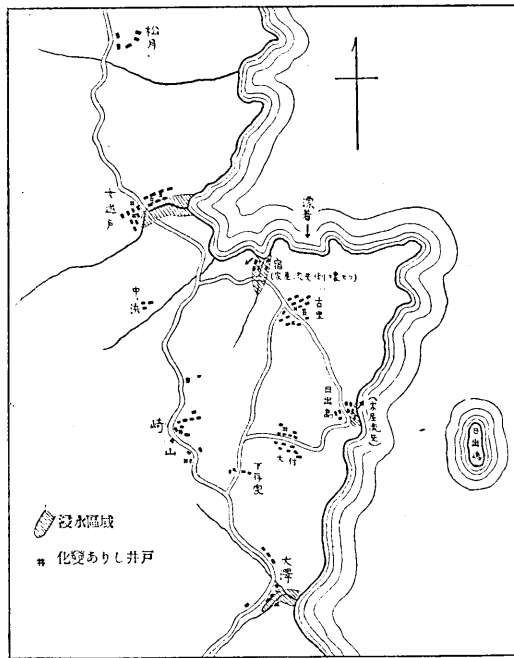
海岸で 10 米. 家屋のある位置で 15 米で, 谷の奥で少し高くなつてゐる.

(3月10日調査)

崎山村 (岩, 下閉伊) Map No. II, (24. 25)

津浪襲來の 5 分程前沖の方より音聞ゆ. 女遊戸にては襲來 3 分前に同じく沖の方に赤色の徑 2 米位の光を見たと云ふ. 最初の浪の襲來時刻は 2 時 40 分頃にして以後 5~6 分の間をおいて第 2, 第 3 回の浪襲來せりと.

(日出島)(中ノ濱)(女遊戸)(大澤)の各部落では下から盛上る様にモクモクと來, 宿では逆卷いて來たと云ふ. 津浪前に鮑の陸に寄せられたものが多かつたのと, 鯛が



第 45 圖

	第 1 回	第 2 回	第 3 回
日 出 島	3.8 ^米	6.1 ^米	3.0 ^米
中 ノ 濱	6.1	4.5	3.0
宿	3.6	6.1	4.5
女 遊 戸	4.5	3.0	1.5
大 澤	2.4	3.6	1.8

近年にない豊漁であつたのもその前兆ではなかつたかと云はれてゐる。各部落の浪高は前頁の表に示してある。

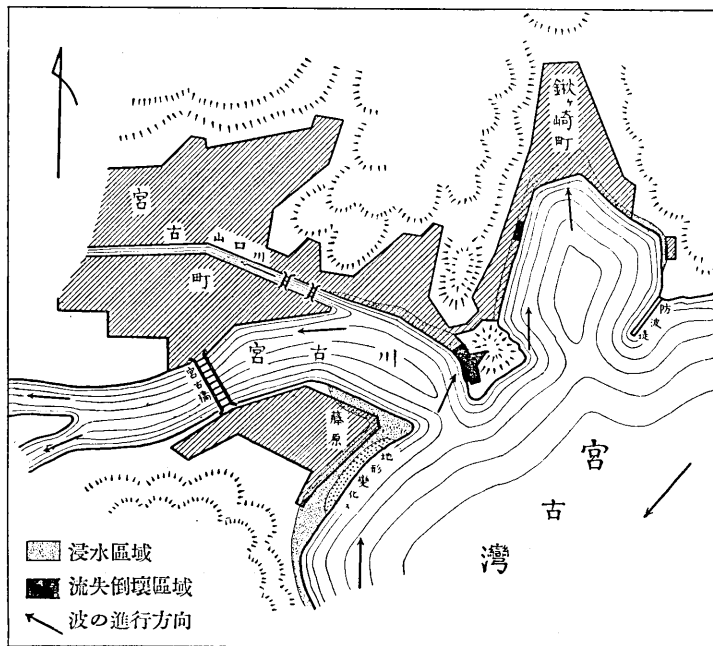
津浪の災害は地形の関係上宿の部落のみやゝ著しい損害を受けただけである。

(大澤) 津浪の高さ海濱約 6.6 米で、海濱の松葉の變色によつて知つた。

(5月12日調査)

鉾ヶ崎町、宮古町(岩・下閉伊) Map. No. II, (25)

鉾ヶ崎町では約 25 戸程住めなくなる程度に被害を蒙つた。鉾ヶ崎の海岸には大型の發動機船が街を越して木造 2 階建の家に横付けに打上げられてゐるのが誰しも目につく。宮古橋(木橋)は奇麗に切斷されて交通することが出来なくなつてゐた。この橋の附近の或者に津浪が川を押上つて行く時の有様を聞くことが出来た。即ち津浪が川を溯るときは河の中央部が盛り上り所謂中高の形となつて進んで行くが引く時は水面は略々水平であるといつてゐる。宮古橋の磯鶴村寄の方は 2 回目の津浪のために又、宮古寄りの部分は第 3 回目の津浪のために破壊されたのを目撃したといふことである。



第 46 圖

閉伊川を隔て、南にある藤原部落の海岸に面した家屋は約 3.5 米位の津浪の見舞を受け倒壊、大破可成りあるやうに見えた。宮古湾の一番奥にあたる津輕石では少くも

浪の高さは5米位に達したらしく、この邊りは流木多く、津輕石より金濱に至る道路を波が越して山地に突き當つたらしい形跡がアリアリと見得られる。

津輕石川の海にそゝぐ點より約3料上流まで流木の散亂してゐることからこの邊まで津浪が押し寄せて來たことは明かである。宮古灣に津浪が入つてから浪の高さは順々に大きくなつた割合は次のやうであらうと思はれる。即ち灣口では約3米、鉞ヶ崎海岸では4米、閉伊川河口藤原では3.5米、高濱では4米、津輕石川河口では5米である。津浪は下からモクモクと水が盛上るが如く襲來し、第1回目の浪の襲來時刻は宮古川口で3時11分、浪高2.4米；第2回目は3時23分、浪高3.6米；第3回目は3時35分、浪高2.4米であつたと云ふ。津浪の際海面點々と漁火の様に光つた。但し光の色は漁火よりも青白く且つ明滅しなかつたと云ふ。被害状態は次の様である。

宮古町

罹災前	{ 戸數 2,210 人口 11,955	罹災	{ 戸數 4 人口 12	死亡行方不明 1
-----	-------------------------	----	-----------------	----------

鉞ヶ崎町

罹災前	{ 戸數 1,210 人口 6,170	罹災	{ 戸數 25 人口 161	死亡 1
-----	------------------------	----	-------------------	------

磯鷄村(岩・下閉伊) Map. No. II, (25)

當村の被害は次の如し。

		罹災前	罹災	死亡及行方不明
磯	鷄	{ 戸數 127 人口 915	戸數 12 人口 84	
高	濱	{ 戸數 97 人口 698	戸數 25 人口 180	5
金	濱	{ 戸數 51 人口 367	戸數 5 人口 36	
太	田	{ — —	戸數 0 人口 0	
白	濱	{ 戸數 38 人口 273	戸數 0 人口 0	

(白濱) 對岸の白濱は流失した小舎1戸、浸水1戸で、南の小澤出口では3戸程流れた。津浪の高さは2米位で部落人家には殆ど被害がなかつた。(5月10日調査)

津輕石村(岩・下閉伊) Map. No. II, (25.26)

(津輕石) 津輕石も浸水面積の大きなところで、津浪の高さは3米内外である。津輕石では浸水の奥行 3300 米以上に達してゐる。之は津輕石川の沖積原(平均傾斜 0.5%)が極めて低平なため、津浪の高さがそれ程高くないにも關らず、廣大面積に

氾濫したものと思ふ。

宮古灣の一番奥にあたる津輕石では少くも浪の高さは5米位に達したらしく、この廻りは流木多く、津輕石より金濱に至る道路を波が越して山地に突當つたらしい形跡がアリアリと見得られる。

(赤前) 津浪襲來時刻及び浪高は次表の如くである。(小學校調)

	第1回目の津浪		第2回目の津浪		第3回目の津浪	
	襲來時刻 時 分	浪 高 米	襲來時刻 時 分	浪 高 米	襲來時刻 時 分	浪 高 米
乙 堀 内	3 5	3.6	3 16	4.5	3 39	2.7
小 堀 内	„ 6	3.6	„ 17	4.5	„ 30	2.7
釜 澤	„ 7	3.6	„ 18	4.5	„ 31	2.7
柳 澤	„ 8	3.9	„ 19	4.9	„ 32	3.0
油 牛	„ 9	4.2	„ 20	5.1	„ 33	3.6
直 下	„ 9	4.2	„ 20	5.1	„ 33	3.6

津浪は宮古灣より白泡を立て、襲來した模様で、3時50分頃北方の灣口方面に仄かに青白く光るを海面上に見たと云ふ。

被害は次の如くである。

(津輕石)	罹災前	罹 災
	戸數 390	戸數 4
	人口 2,340	人口 26

(赤前)	罹災前	罹 災
	戸數 156	戸數 4
	人口 986	人口 28

(追切) 白濱東部宮古の對岸の小部落で、こゝは漁船が流されたが、人家には殆ど被害がなかつた。津浪の高さ3.5米。(5月12日調査)

重茂村(岩・下閉伊) Map. No. II, (27. 28. 29)

	罹 災 前		罹 災		死亡及び 行方不明
	戸 數	人 口	戸 數	人 口	
元 村 里	60	420	29	不明	41
音 部 里	25	175	6	„	6
鶉 磯	5	35	1	„	0
姉 吉	13	122	13	„	118
千 雞	40	280	2	„	10
石 濱	22	155	3	„	不明
川 代	15	105	1	„	4

(閉伊崎)(鳥嶋) この附近は岩磯で、海岸が高く切立つてゐるので、津浪の跡が見出せなかつた。併し、東北隅のアカブ島に面した小溪谷では津浪の高さ10米餘に達してゐる。(5月12日調査)

(立濱) 立濱の澤は稍々口の廣い小澤で浪の高さは海岸で約9米で、最も奥で13米位で奥で高くなつてゐる。被害は漁船の流失等で人家には被害がなかつた。澤の奥の小箆の中には漁船の破片その他が散らばつてゐた。浸水奥行は約400米(この附近の地形は地形圖の精度が5萬分之1では物足りない感があつた)。

(境神) 小さなラツパ状に開いた澤で、津浪の高さ10.5~12.5米。漁具小舎流失。

(鶴磯) 前と同様の澤で谷底は相當に傾斜してゐる。北側斜面にあつた人家を流失した。津浪の高さは海濱で10.5米、奥で12~13.5米で奥で高くなつてゐる。舊道の橋は破壊された。納屋4棟被害を受けた。浸水奥行約370米。

(荒巻) 荒巻の澤は小澤が3つばかり合流した出口の廣い澤で澤口には漁具小舎その他があり、廣い澤底は松林であつたが、津浪のために小舎2戸流失した。松林はすつかり取拂はれて、林の一隅に推しやられてゐた。津浪の高さ海濱岩壁で9米。谷奥で7.5米。浸水奥行330米。(5月12日調査)

(音部) 音部の里は熊崎半島の中部から流れてくる音部川の河口にある部落で、河口には多少の沖積地があり、海濱は約5米内外の砂丘堤で境されてゐた。津浪はこの砂丘を越えて音部の平地に流れ込んだが、砂丘のために十分に海水を流し込むことができなかつたやうに見える。津浪の高さは砂丘堤の外側で約9米。砂丘堤内側人家に就いて調べると7~6.5米である。浸水奥行は約420米である。

こゝで注意すべきは砂丘内側にある人家の或るものは海濱に近く建てられてあつたにも関わらず流失を免れたことである。そして北側は南側に比して被害が著しかつた。改修の新道路が砂丘に略々平行してあつたが之は多少破壊された。特に北側海崖に沿ふものはかなり損傷を受けてゐた。この海崖に於ける津浪の高さは約10.6米である。

(5月10日調査)

(重茂) 重茂の海崖の津浪の高さは獨立標高點71.3米の東の海崖で10.6米(5月10日午後5時測定)。避病院東の澤の海岸で10.6米、澤の奥で12~13米、(5月10日午後2時30分測定)。重茂部落の小澤で14.2~16.6米(5月10日午後2時測定)に達してゐる。

(里) 重茂の里の部落は熊崎半島に於ける大きな澤の1つにあつて、出口の低平な

沖積原上に發達してゐる。沖積原の平均傾斜 1.7%。海濱は粗砂礫で、辨天島と云ふ岩島が横はつてゐる。この部落は相當人口密な部落で全體 43 戸の内住宅の流失 27 戸で全體の過半数である。死亡者も 16 名、行衛不明 31 名の多數に上つてゐる。危く逃れた人の話によると浪は谷中に擴がつて白い幕のやうになつて追掛けて來たと言つてゐる。

津浪の高さ 8.5~9 米 (5 月 10 日午後 1 時測定) 浸水奥行 770 米、津浪の襲來した地域は殆ど家屋も何物も残さず、唯だ明治 29 年の大海嘯記念碑が荒野に淋しく残されてゐるだけである。

(興奈) 津浪の高さ 9 米、谷の奥で 10.6 米 (5 月 11 日午前 8 時半測定)、浸水奥行 350 米、住家 1 戸被害、木材が津浪の汀線狀に美しく排列してゐた。興奈の東 1400 米の入江。津浪の高さ 8.6 米 (5 月 11 日午前 9 時 30 分測定) 興奈の東 1750 米の入江。津浪の高さ 10.6 米 (5 月 11 日午前 10 時測定)。

(種子刺) 鮎山 (標高 465.1 米) の北 1500 米の澤。木材搬出のため巨材が積んであり、番小舎もあつたが津浪のため亂雜になつてゐた。津浪の高さ海濱で 10.6 米、途中で 12.1 米、末端で 16~14.2 米に達し、奥で高くなつてゐる。

(鮎崎) この附近は海崖が急に海に迫つてゐて人口も稀なので、被害は殆どない。

津浪の高さ 8~9 米 (鮎崎燈臺東北側の深い入江で)。燈臺では殆ど津浪を知らなかつたと。又燈臺沖の漁船も陸に怪しい大きな音がしたのを聞いたのみで、津浪に氣付かなかつたと。(5 月 11 日調査)

鮎崎一姉吉間は急な海岸のため殆ど津浪に關する調査が出来なかつた。

(姉吉) 鮎崎半島に於ける津浪被害の最も悲惨であつたのは姉吉であらう。姉吉は鮎崎の西南 2500 米に在る小灣で、灣の平面形はラツパ狀で、兩壁は急な岩壁で、多少の屈曲はある。灣底も V 字形で急に淺くなつて居る。陸上は 7.5% の平均傾斜を持つた狭い谷で、谷壁は急な岩壁である。この附近は絶好の漁場であるため相當な人口を有する部落がこの谷を占めてゐた。

重茂村役場の調べによると住家 15 戸、附屬建物 34 に達してゐたが家屋はすつかり破壊流失され、人口 92 人の内僅か 3 人が負傷生存したのみであつた。この様な澤で、而も交通比較的不便なため、筆者が訪ねた際にも全く跡片付けもできてゐなくて、悲惨の状態をその儘そこに示してゐた。森林は無雜作に谷壁の一部になぎ寄せられ被害者の嘗ての心盡しのビール瓶の底で縁取つた地割などが、土臺のコンクリートと

共に淋しく残されてゐるのみである。谷の奥で押し流した家材道具を狭い谷底に所狭いまで流し寄せてあつた。

要するに一つの荒れ果てた岩澤と言ふ状態であつた。津浪の高さは著しく高くなつてゐる。濱の岩壁で 13 米(南側)~14.2 米(北側)。途中の谷壁で 20~21 米、最奥で 21 米に達してゐる。

姉吉で危く助かつた者の談として重茂駐在所で聞いた話に、地震後暫くして何だか物音波音がしてきたが、波は音と一緒に家より高く來てゐて、逃げることもできなかつたと言つてゐる。又鯉崎燈臺の人の話に、姉吉では波がくる前にもう家は風壓で倒れたと言つてゐる。この様な地形の處の津浪襲來は大きな灣内のものに比べて性質がかなり異なるやうに見える。(5月11日調査)

(千鶴) 千鶴は重茂に次で大きな部落であるが、住家は 20 米以上の段丘上にあるので津浪の被害は海濱に近い 2 戸及び納屋 8 戸流失しただけでもが、死亡行衛不明は 10 名に達してゐる。

津浪の高さは學校裏の澤では海濱寄りで 10.6 米、奥で 13 米、浸水奥行 200 米、千鶴の澤は海濱 10.6~12 米、奥で 12 米、浸水奥行 300 米に達してゐる。

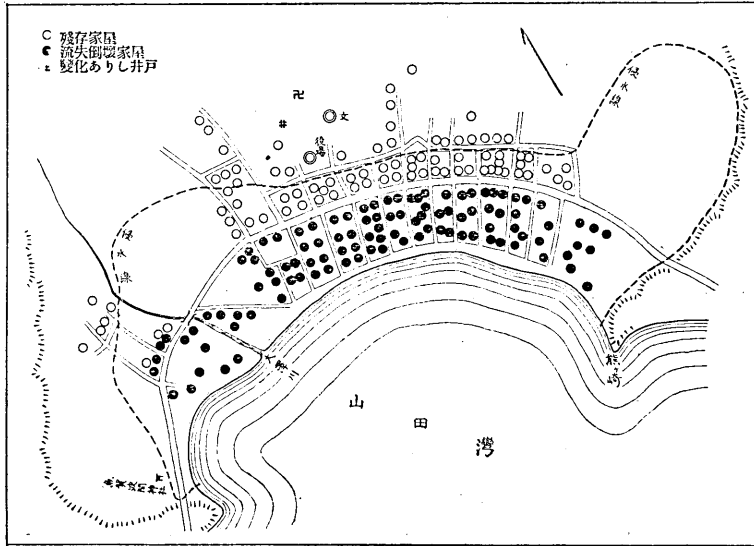
(5月9日調査)

(石濱) 部落は千鶴と類似の地形で被害状況も殆ど同じである。海濱・澤底に近い住家が流失又は被害を受けた。津浪の高さ海濱で 9 米、奥で高さを増してゐない。浸水奥行 250 米。

(川代) 川代部落も大體前と同様な地形にあり、海岸線近くまで段丘があり、部落は主としてこの段丘上にある。住宅の流失 1 戸、死亡・行衛不明 4 名、津浪の高さ海濱竹藪で 8.5 米、奥で 9 米で少し高い。小學校の橋下まで津浪は來た。浸水奥行約 150 米。

大澤村(岩・下閉伊) Map No. II, (29. 30)

山田町の東北にある村であるが同村は殆ど全滅し慘たる光景であつた。こゝでは濱邊の家は殆んど建つてゐるものなく屋根ばかり残つてゐた。すこし山の手の或る家の高窓の障子がすつと下半分だけ津浪のため破られた。この高さを海面上から測定すると約 3 米となつた。津浪の高さも大概この程度であつたのだらうと思はれる。大澤部落の人に聞くと今度の津浪は沖鳴りをしなかつたといつてゐた。



第 47 圖

罹災前	{	戸數 217	罹災	{	95 戸	死亡 1 人
		人口 1385			617 人	

魚賀神社（部落の西端）下より役場下學校下へかけて浸水す。主道路の南側の家は全部倒潰又は流失す。部落西端にては主道路の北側の家 4 戸倒る。

第 1 回の浪 3 時 00 分、6.1 米；第 2 回 3 時 10 分、6.7 米；第 3 回 3 時 20 分、3.0 米。津浪前 7~8 分頃遠くより自動車の走つて来る様な音が東南海上より聞えて來た。又小學校庭（部落の北に接してあり）より眺めたるに午前 2 時 50 分南東に流星の如き光を見たと云ふ。寺（役場の北、學校の西）の境内の井戸數日前より減水尺餘且少々濁りたりと云ふ。（小學校調）

山田灣の北岸。山田町より明神崎に至る沿岸は山田附近で 4 米内外一熊ヶ崎附近で 2 米内外、明神崎附近では 3~4 米内外であつた。

山田町（岩・下閉伊）

山田灣の一番奥にある町であるが同町の南端飯岡が一番被害が多い。濱邊の電柱に海藻が引懸つてゐる。その高さを測定すると約 4.50 米であつた。この附近一帶の濱は遠浅で海苔を作つてゐた。これより北山田の町の略々中央の海岸に岸壁を設けて汽船の發着所がある。こゝでは浪の高さは 2.50 米、又關口川の河口で 3 米位であつた。

らう。この地の人に聞けば津浪は5分乃至10分時の間隔をおいて數回押し寄せ津浪の襲來の時は音を聞かなかつたさうである。而しあの強震の時は週期が相當に早かつたらしく棚上の器物は棚上を點々移動し電燈のゆれるのも比較的目立たなかつた。尙ほ關東大地震の場合は電燈が大きく揺れたといつてゐたがさもあるべきことと思ふ。山田に限らずこの三陸地方は岩石上に立つてゐて所謂地盤の非常によい所であるから近い地震の場合には相當週期も早いのであらう。

津浪のためにさらはれたのは山田町川向町境崎で、可成り多くの家が流はれ土臺石がズラリと残されてゐる。約300戸といふ家が流されたといつてゐるが海岸から10町も離れた岡まで發動機船が押し上げられてゐた。海岸には埋立工事中の護岸工事があつたが津浪はこれ乗り越えて猛威を振り前記の300戸を一掃してしまつた。しかしその割に死者の少なかつたのは皆な山手に逃げた爲だといはれてゐる。

織笠村(岩・下閉伊) Map No. II, (30)

此の村の前面山田灣中に大島、小島の二小島を控へて居る爲か被害比較的僅少にて罹災戸數1。人口7。行方不明3人にすぎない。浪高は約2米。

船越村(岩・下閉伊) Map No. II, (29.30.31.32)

(船越) 當部落は海面より可成り高い場所に位置して居た爲に津浪の災害は免れ、僅かに海岸の低地に建てられた納屋數棟が流失したにすぎない。

第1回の浪3時05分、3.9米；第2回3時12分、5.5米；第3回3時20分、4.9米なり。津浪は潮の満ちるが如くジワジワと來れり。

本村南端の井戸は津浪の3日位前より2日後まで濁つた。船越にては津浪の3分前に遠潮鳴の如き波の進行の音を聞けり。又此と同時にS60°Eの方向に青白き光り物横長に見えた。

(田ノ濱) この部落は全戸231戸の内220戸罹災したのであるから正に95%の被害を受けたことになる。しかし死者及行方不明を合して僅々數名にしか達しない。聞けばその夜灣の向ふ側の山内部落の崖に大浪のぶつかる物凄い音が聞えたので「それ!」とばかり部落民全部が我先にと電燈の消えた暗やみの細道を裏山に群をなして逃げた。それから約10分間も経つか経たぬ間に向ふ岸から跳ね返された浪が更に力を増し、高さ9.1米の大津浪が襲來して部落をたゞきつぶし、かき廻して約半分を沖へ持ち去つた。此の部落は鰯粕の本場で有名であるがこの方の損害も多大である。部落の南端、濱の崖に辨天様が祀られてある。この邊では浪の高さは約3米位。船越と

の間の崖では 3.5 米位、田ノ濱部落に浪の上つたときは 5 米乃至 6,7 米位あつたらしく、船越灣を北上した津浪は船越半島の頸部に打上り一部の勢力は東にそれ、田ノ濱を襲つたものらしい。

又當部落にては津浪前 3 分位 N 70° E の方向にうす赤き光を見た。横に長かつた。又同じ頃にハツパの如き音響を聞いた。方向は南西。

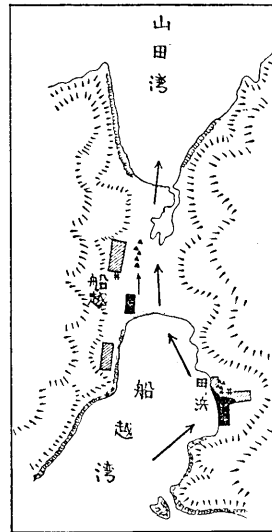
第1回の浪 3 時 05 分、5.8 米；第2回 3 時 12 分、7.3 米；第3回 3 時 20 分、6.1 米。津浪はモクモク盛上る様に急速に來た。

(船越村の地峽) 此地峽の中央部に(船越湖とは別に)新しく湖水を現出す。地峽の北端山田灣に面せる所、家 2 戸高所にあるも被害なし、浪高 3 米位なり。地峽より織笠に到る間の澤の浪高 2 米、船越部落下の地峽部に漂流物多數あり。此の地峽を越えて海水大槌側より山田灣へ注げりと云ふ。左様の形跡を認むること困難なれ共或は事實ならんか。

(大浦) 縦に長き光(黄色)を見た(方向 N 35° E, 津浪前 3 分頃)。津浪は第 1 回 3 時 10 分、3.0 米；第2回 3 時 15 分、4.2 米；第3回 3 時 20 分、3.9 尺にしてモクモク盛上る様に來た。

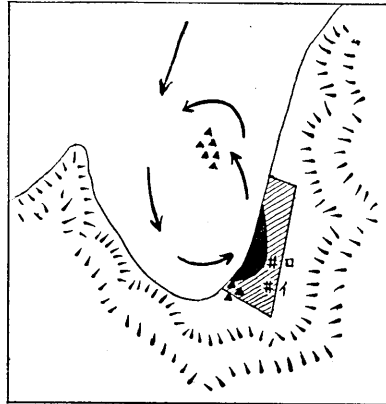
(第 49 圖)

罹災前	戸數 179,	人口 —.
罹災	戸數 38, 死亡 0,	人口 247.



■ 流失倒浜區域
▲ 流失物
↑ 浪の方向
非 變化ありし井戸

第 48 圖



(イ)の井戸
水量が津浪の來る時減つた
(ロ)の井戸
津浪後 30 日程濁る
▲ は漂流物

第 49 圖

岩手縣上閉伊郡**大槌町** (岩. 上閉伊) Map No. II, (32. 33)

(吉里吉里) この部落は被害 60%にも達したらうか、海邊の家は殆んど全滅し山間に木片が散亂してゐる。波打際より約 100 米、一本の樹の梢に海藻が引懸つてゐるのでその高さを測つて見ると 6 米位あつた。この部落の數人の漁夫は津浪當時沖で仕事をしておつたさうだが沖では津浪はなく村に歸つて來て初めて津浪のあつたことを知つたといふ話がある。又これは津浪の夜出漁準備中大浪に打上げられ顛覆した船で 9 人中 7 人は死し、1 人ははね飛ばされて家にひつかゝつて助かり 1 人は船の中へとちこめられ助を求める聲がするので穴をあけて見ると水一滴もぬれずに出て來た。「足をおろしたらジャブジャブするので引き込めた。どうやら水がひいたらしいので助けを呼んだのさ」といつた奇談がある。此部落では 133 戸倒壊流失し死者 12 名に及んだ。(吉里吉里小學校長の談)

(濱板) 倒壊 1 戸を出したるのみにて道路面及家の所在地共に高き所にあり。

(赤濱) 倒壊 3 戸を出したのみである。此の部落は大槌を東に去る約 2 軒半大槌灣に面してゐる。

(安渡) 大槌灣の奥近く存在してゐる部落であるが被害は 70% 位。なかなかひどくやられてゐる。完全な家は學校、寺及高い所に建てられた民家位なもので浪の高さは 3-50 米位は確かにあつたらう。安渡より大槌町に至る間大槌川に架せられた橋床まで約 3 米欄干まで 3-70 米、5 本の鐵桁を渡したコンクリートの橋は大槌町寄の橋詰からスツパリ落されてゐる。橋脚は無茶苦茶になつて橋軸線より上流約 3~4 米の所に轉がつてゐて漂流物の撃突が相當激しかつたことを思はせる。橋詰に立つて西方をながめると一面の廣い田圃が大槌川の兩岸にひらかれてある。その中に小船があちらこちらに打ち上げられてゐる。一番奥まで行つてゐるのは橋から 14~15 町もあらう。そうすれば屋敷といふ字の部落近くまで潮が押寄せたものらしい。

(大槌) 大槌の町の被害は豫想以上であつた。世の注目が釜石町に集中されたため繼子扱ひにされてゐると土地の者がつぶやいてゐたが全く同情に價する。大槌町の主な通りは山手に軒を並べてゐて銀行もあれば郵便局もある立派な町である。町を巡つて見ると雨戸やガラス障子に津浪の跡がアリアリと残されてゐるのが見える。高さも腰を没する程度である。床上浸水による被害は相當に上る見込である。町の濱邊寄りのところはひどくやられてゐる。大和館といふ活動小屋の正面へ大型の發動機船が入

口を塞いで打ち上げられてゐる。そのところから約 150 米、奥に不思議に残つてゐる家があつた。見れば海岸とは反対の西側に丈夫な土蔵があつた。この土蔵と本屋とはつながつてゐたためか津浪にさらはれなかつた。その家の腰板に残された數條のゴミで畫かれた水平線を認め、その線の高さを地上から順次に測つて見ると、1.40 米、1.32 米(?), 1.20 米であつた。本通りの入口の某商店の陳列窓ガラスに残された數條の平行線の地上からの高さも序に記しておく。地上から 0.80 米、0.72 米、0.64 米、0.54 米、0.40 米のところにあつて明かに 5 回の浸跡を認めることが出来た。大槌海岸の津浪の高さは約 3.50 米位であつたらう、町の者の 2 間位といふのに一致してゐる。

大槌町在(大字小鏡ノ渡)の某氏の談によれば地震にて炭焼ガマの崩潰して火災を出す恐れあるを慮り炭ガマ見届けに駆付けての歸途、地震後 12~13 分して強き雷鳴の如く大山崩の如き音を東北北の方向に聞きたり。又其後 2 分位の時薄青の光が探照燈の如く東より西へ続けざまに 2 回走り、(南寄りの空特に光が強かつた)空一面に明るくなつたのを見た由である。

鵜住居村 (岩・上閉伊) Map No. II, (33.34.35)

(室ノ濱)(片岸) 共に大槌より釜石町に至る途中の部落で大槌灣に臨んでゐる。室ノ濱では浪の高さ 5 米、片岸では 5 米半位であつたらう。前者の被害を約 40% 後者のそれは約 80% 位と見たのであるが、無論後者の部落の方がひどくやられてゐて海に開いた澤の奥まで流木や家のバラバラになつたものが押し上げられてゐた。片岸の被害は 50 戸中 23 戸流失、半壊 10 戸位である。

(鵜住居) 片岸、鵜住居間の道路は大部分浸水したるも本村は地盤高き爲被害は僅少であつた。

(箱崎) 津浪襲來時刻及び浪高は次の様である。

第 1 回	3 時 5 分	4.3 米,
第 2 回	3 時 15 分	4.1 米,
第 3 回	3 時 25 分	3.3 米.

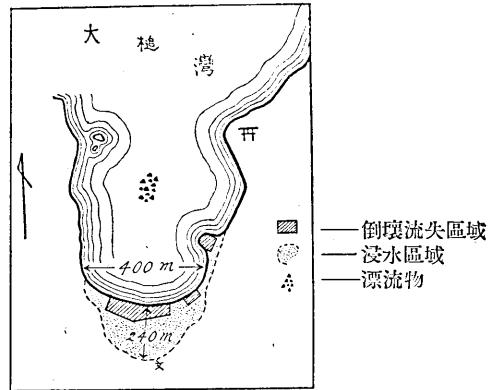
津浪は下からモクモクと盛上る様に來た。第 2 回目の浪は浪高低かりしも力强かりし浪と見え學校下まで襲來した。

箱崎にては津浪の約 10 分前遠雷の如き音東 15° 南の方向に聞ゆ、又音の少し前學校附近にて光を見たもの相當あり。東南方に當り山陰で探照燈を向けた様にポーツと白くなつた由。

部落内の井戸全部濁り3~4日飲用出来なかつた。但し津浪前には氣付かず、濁れた様にも思はなかつた。

漂 流 物

出 所	行 先
鷯住居, 片岸	箱 崎
〃 室濱	白 濱
大 槌 町	元 網
桑 ノ 濱	東 南 沖 合
雨 石	同 上



第 50 圖

(白濱) 津浪の襲來時刻は不明なるも大槌を襲ひし波よりも約10分早かりし事は、白濱部落の第2回目の浪が過ぎてから大槌や安渡等對岸の電燈の消えたのを見た事より明な由。

第1回目の津浪は高さ1.8米以上ドツト音響強く崩れたる模様なるも怒濤の岩に激する勢には非ずと。引足早く干潮線を退く事10間餘と夜目にも認められた。

第2回の浪は高さ2.4米以上。第1回の浪引きてより數分後に來る、潮の満ちるが如く下からモクモクと盛上る様にも見えたり。一番大きく高く寄せて引波の早き事瀧瀬の如く騒然と引いた。

第3回は高さ1.8米以上にて第2回目の規模小なるに似たり。

第4回以下も同じく次第に水勢弱まりて間斷なき平常の波に復歸せりと云ふ。

對岸大槌、安渡、室ノ濱の漂流物は3日朝6時頃に白濱大槌間の海を覆てありしも次第に沖と白濱へと漂流せり、明治29年の時も然りと云ふ。

白濱にては平家1軒流失す。

津浪前の音は聞かず、但し第4回目の津浪のあたりにパツと南の山端に廣く一面にスパークの如く何回も青白き光(弱き光)見えたりと、部落民は浪の光なりと云ひ居る由。

白濱部落は水道(山の水ならん)を使用し居るも前夜(2日夜6~8時頃)水道の水少々混濁せりと云ふも詳ならず。

海水の色例年と異なり馬の小便の如くなり又混濁せりと。又干潮満潮不規則にして

時ならぬ浪あり又津浪の前日には潮汐尋常ならず、風もなきに浪荒く磯の採集も出来ず歸りたりと云ふ。

(大假宿) 立網の宿舎3棟倒潰す。

(桑ノ濱) 第2回の波最も高く10米位と云ふ。

(兩石) 全戸數96の内残存戸數3。被害甚しき部落なり。今回の津浪の高さは10米~10.5米なりき。

明治29年の海嘯記念碑の3.0米位手前まで浸水す。河(溪合の中央の)内に藁、ボロ切、木材など充滿せり。(29年の津浪は記念碑まで來りたる由)。谷の兩岸の杉林潮の爲に水平に一直線にかれたる爲浸水區域甚明瞭なり。(4月19日調)

(水海) 兩石灣に面した小部落であるが海岸より水海川の流れにそつて溯れば傾斜は非常に緩漫である。この澤に並んでゐた民家は残戸もなく綺麗に押流され、海岸より600~700米の奥まで木材が散亂してゐた。後章の本郷部落と例を同じうする地形だけに波勢強く津浪の高さは少くも7米位はあつたに違ひない。

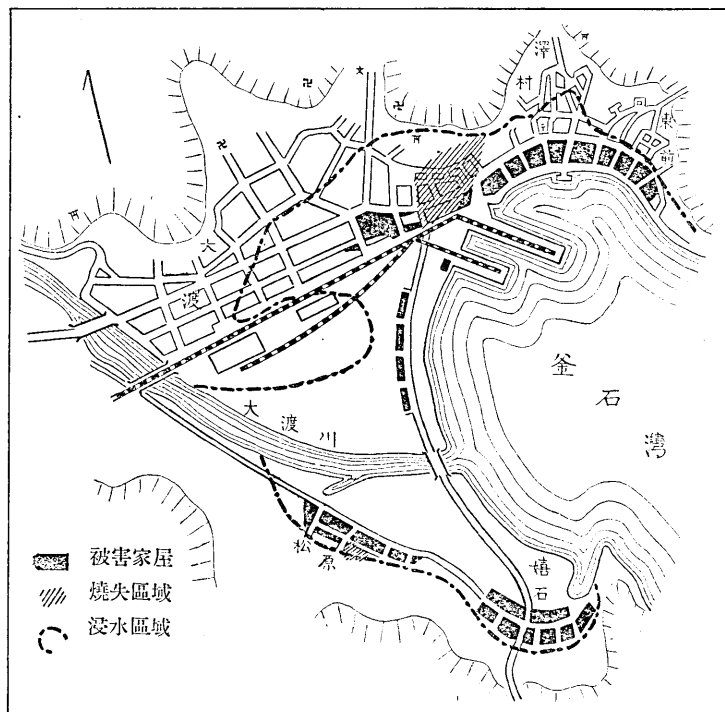
釜石町(岩.上閉伊) Map No. II. (34. 36)

(越路)(瀧ノ澤) 何れも被害なく越路にては地震の強度は棚上の物を落下せしむる程度なりしと。津浪の浪高は夫々3.2米, 3米, 3米の程度なり。

(釜石) 釜石は逸早く被害の狀況が報知され、東北屈指の繁華な町だけに被害を金高で表はしたなら一番多額に上るであらう。殊に津浪に加へて町が目抜き^の場所が火災を起したのでその損害は岩手縣下の他町村の被害を總計したものに必適するであらう。釜石灣は奥で二又に別れ北は釜石港として船舶ふくさうし製鐵所よりの臨港鐵道もあり仲々繁昌してゐるがそれに引換へ南方は平田といふ漁村が存在してゐるだけである。釜石町に押し寄せた津浪は水上派出所附近では4米位が最大であつたらう。同派出所の家屋内の壁、吊棚に残された跡がそれを物語つてゐた。浪は主なものが3回、大小合して14~15回襲來したらしい。當時釜石港に碇泊中の漁船約500隻は木ツ葉微塵に粉碎、或は陸に打ち上げられ尙大渡川を溯つて大渡橋附近まで打ち上げられたもの十數隻に達してゐる。港内は沈没船多く、マストを僅かに表はしてゐるものや船腹を水面に横様に倒覆してゐるものが數々認められた。

海岸近く尾崎神社の社殿が跡方もなく焼失しそれより町の方は全く焦土と化した。打ち上げられた船は火災のため焼けたもの數隻、そのエンジンが焼野原に轉つてゐる。火事の原因に就て青年團の消防員に聞いて見たが地震後町の人々は一旦表に飛び出し

た。その時の焚火の不始末か又は漏電ではないかと思はれるとの答へであつた。又焼失区域の略中央にあたるところで恐ろしく電気のスパークするのを見たさうで漏電説が有力だらうとの事である。又地震後大槌町より津浪の知らせ(實は津浪の有無の問ひ合せだつた)があつたので直ちに警鐘を亂打し、町筋を「津浪だ! 津浪だ!」と呼びながら走つたので町の多くの人々は山の方に避難したので死者は僅か数名に過ぎなかつた。地震は如何と尋ねたら「いや大したことはなかつた。棚のものは落ちたが時計は止まつたり止まらなかつたりである」といつてゐた。丁度この話をしてゐた所のすぐ傍に消防自動車の格納庫があつた。コンクリート造りで焼け残つてゐたが津浪直後扉の前に色々な漂着物は盛り上つてゐたので戸を開いて唧筒を出すことも出来ず、火の手がすぐ前に上つたのに出動することも出来なかつたと残念がつてゐた。その小屋の内壁に津浪がきれいに跡方を残してゐた。地面から 2・10 米の高さにある。海水面からの高さ約 2 米を加へると約 4 米となる。焼残つた家で津浪の猛襲を受けたものを見ると殆んど皆船或は其他の漂流木材が撃突し、撃突したところからポツキリ羽目板



第 51 圖

が折られて流されてしまつたり、其の儘に残つてゐたりしてゐる。焼失区域では津浪の浸跡を尋ねるわけには行かないが同町只越といふ方面では家々の戸袋や、戸、障子の腰板に大槌町で見たと同様の平行線が數條残されてゐる。海岸に乾してあつた鰯粕が津浪で浮き出して塵埃に交つて町内一面に押流され、鰯油とゴミで黒くクツキりと線を残してゐる。その高さを地上から測つて見ると 0.95 米、0.80 米、0.65 米、0.48 米、0.30 米(?) の 5 本の線であつた。恐らくこの一番上の 0.95 米が第 2 回目の津浪の此邊での高さを示してゐるのではなからうか。只越より鐵道線路寄りの某製材所附近では鋸屑に例の鰯粕の油を含んでトタンの腰板にも數條の線が残されてゐるのを認めた。こゝでは地上より 1.50 米、1.30 米、1.10 米、0.80 米、0.55 米の 5 條の線を測定した。そのすぐ傍では 1.72 米、1.54 米、1.32 米、1 つ置いて 0.83 米の 4 條の線を認めたが最後より 2 番目にあるべき線は不明瞭になつてゐた。地震後大雨や吹雪がなかつたため津浪の浸跡を逃さず測り得たことは幸ひであつたがこれ等の線は何か役に立つと思つてゐる。津浪の本當の浪の高さを出すにはその地點の海拔(津浪當時の海水面よりの高さが必要)を加へなければならぬが精細な標高の數字的のデータはないがいづれも 3 米位のところといつて大差ない。

(嬉石) 釜石港の南岸にある部落であるがこゝでは浪は高さ 4 米位。民家は殆んど全滅である。部落の東端に岸壁上に建てられた家が残つてゐる。その壁は土臺より約 1.50 米の高さまで海水に浸された跡を残してゐた。當部落にて屋根の廻轉せるもの或は家屋全體横倒れとなりたるものを認む。殘存全戸數約 10 ならん。

嬉石、鎌ヶ崎間は釜石灣の北岸より波高大なる傾向あり、釜石港口に直面せる爲か。

(平田) 村の敷地比較的高き爲被害僅少なり。十數棟倒壊、死者なし。地震後 40 分位にして津浪襲來し、4~5 分置きに押寄せたと云ふ。

第 1 回の津浪は 3 時 5 分、2.1 米；第 2 回 3 時 10 分、3.6 米；第 3 回 3 時 15 分、3 米にて第 2 回目最大にて其後は極て小さいものが 35 分置きに襲來せる如し。

部落民の談る所によれば、津浪は想像外にて 3 回ともモクモクと盛り上りて來れりと云ふ。誰に聞きてもこう言ふ。又津浪の 5 分位前大砲の如き音を聞きたり。又津浪直前には強風の如きゴーといふ音を聞く。漂流物は大抵石濱へ漂着、1 死體のみ大向濱より發見せり。大向濱上にては翌朝まで津浪を知らざりしと云ふ。尙部落に於て光を見たりと云ふものあれども場所、方向、形狀、色何れも判然せず。一致せず。且又後日になりて井戸の涸れたる事を思ひ當る由なり。當時は寒氣の爲井水凍りて出な

いと思ひみたる由。部落内の井戸全部なりと云ふ。平田の東にある部落戸數 20 位あり此部落にては被害大ならず。棧橋二箇の内一箇根元を破損流失す。浪高 2.50 米位なり。

(石濱) 白濱の直ぐ西、黒崎と白濱との間の濱なり、人家 1 軒もなし 38 年前の津浪の時も此の濱に澤山漂着物ありしと云ふ。今回も然り。平田のものは大ていこゝに集る。一老婦人の死體のみは大向濱より發見。

(白濱) 浪の高さは 3.50 米位なり。

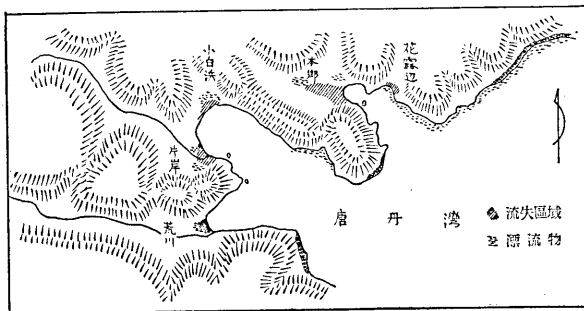
岩手縣氣仙郡

唐丹村(岩・氣仙)

Map No. II, (36)

(花露邊) 第 1 回津浪 2 時 50 分頃、4.5 米; 第 2 回 2 時 51 分頃、6.1 米; 第 3 回 2 時 52 分頃、3.6 米。

津浪は大うね形に潮の満ちる如く來りたり。



第 52 圖

花露邊より佐須へかけて海岸に一面漂着物ありしと云ふ。

罹災前	{ 棟數 129 人口 397	罹災	{ 流失 17 全潰 3	{ 死者 1 行方不明 9

(本郷) 當部落の全滅の報は早くも傳へられてゐたが實地に踏査して文字通り全滅の有様であることを知つた。家の土臺が原形を保つてゐるだけでバラバラになつた板や柱が散亂してゐて街がどう列んでゐたかさつぱり判らない。海岸より眞西に主道路が山に向つて走つて居つたさうだが海岸からは極めて緩傾斜で約 1 軒も奥に平地が開けてゐる。南北の幅は約 300 米である。全く荒野原と化し附近に人影もまばらで鳥が群がり鳴いて淋しい事この上もない。

地震當日岩手日報社の記者が釜石を發してこの地を訪れた記事を手に入れることが出来たので抜萃してこゝに記述しておく。

「3 日夜 10 時嬉石を経て海岸線傳ひに沿岸の状況を具さに視察し乍ら約 4 里の夜道を陸行で氣仙郡唐丹村に向つた。唯一つの提灯の光を頼りに餘震頻々たる中を濱傳ひに進む無氣味さ——松原は倒壊家屋 35 戸、嬉石では 75 戸行手の道に無残に倒れた。

これらの家屋が累々と重つて居る。柱を戸を屋根を電柱を踏み越え踏み越え進むこと約30分、時々電線が足にからんで轉がる。潮騒がゴーツゴーツと鳴つて居る。何だか又津浪が押よせて來たやうな氣がしてドキツとする。漸く街道に出ると左手は夜目にも凄しい眞暗な海、右手の崖からは、ゴロゴロと大きな石が轉げ落ちて道を塞いでゐる。約2里行進平田部落に着いた。部落の某氏方に青年團員がこの夜を警戒のため集つてゐるので立寄る。この部落は倒壊家屋17戸、死者1名何でも死んだのはこの家の下手の方の某といふ婆さんで50歳になる嫁が背負つて運び出さうとした時には既に浪が押寄せて來たので嫁が婆さんを置いて逃げたのだと云ふ悲惨な話した。

庭先きの達磨ストーブに暖を取つて居ると3日の地震以來の疲労が出てウトウト他愛なく3人とも倒れて仕舞ふ、目を覺ますと4時だ恰度花巻町の人が唐丹村の實家に急を聞いて急ぎ歸るのだとて立よつたので私等3人は此家を立ち行手はだんだん氣仙と上閉伊郡境の凄しい平田峠にかゝる、奥州流血録に出て來る野田の百姓一揆が越した名だたる嶮所だ。

道には氷が張り詰めた道はズルズルすべり何遍すべつて轉んだか涙が出そうだ。これも尊い報道の役目である。ひどい山坂を約1里登ると頂上から谷は南向きなのでもう立派な春だ雪を求めんとするならば曉の光を浴びて遙か眞南の中央に見ゆる鉾臺山脈あるばかり、道を下つて行く事約半里其處は唐丹村本郷部落のありし處——渺茫たる一面の曠野が唐丹灣に面して居る約100戸の部落は全部影も形もなく流失し流れ散りよくもこれ迄紛微塵に碎けたと思はれる木片の山、家の恰好が残つたのはタツタ二軒其一軒の方から大漁半天を着た親父が出て來た、女房をなくしたと云ふ人が聲を立て泣いて訴へるのだつた。誰が此大慘狀を見て涙なしと云ひ得よう。然も救護班の縣廳員よりも誰よりも眞先きに此部落を訪ねた新聞記者は我々一行だつたのだ。聞くと3日地震後の夜明け浪打際に打上げられてウメキを立て救ひを求めぬ瀕死の罹災者が10人餘りも居り其の凄惨さは二目と見られなかつたと云ふ。今はゴザをかけられて居る累々たる死體の山其數50を越すだらう鬼氣自ら迫るものがある。其あたり倒壊した水浸たしの屋根の下に、バリバリ破けた唐紙、赤ん坊は何處に行つたのか嬰兒籠、赤い鼻緒のボンボン下駄、出齒庖丁等を見ると薄氣味悪くゾクゾク寒氣が身に迫る、鳥が群をなして居る。何を啄いて居るだらう。ゴロゴロした中を歩いて行くと大木の下からギロリと兩足が出て居る片方にだけ足袋を穿いた無残な足。

約4丈の大津浪だつたとの事で發動機漁船が二隻遙か山腹に腹を見せて覆つて居る

その山に1頭の馬が主を失つた事を知つてか知らでか青草を食べて居る馬は獨りで逃げ出したのか。人の親は大抵寝て居た子供を助けるために命を失つたと云ふ事で此部落丈でも海底の藻屑と消えたもの350人生き残つたものは半数にもたらぬ205人で大抵男であつた。今はうちが倒れてそれぞれ他家に收容されて居る有様である。」

この海岸にての津浪の高さを測るに上手の森林に漂流物の引懸つてゐるのを目標にした。そしてクリノメーターを用ひてその高さを測定すると約10米となつた。

石塚峠道の曲り角に小高き所に稻荷社あり、其崖にて浪高11米と目測せり。第1回の浪3時00分、7.6米；第2回3時01分、10.1米；第3回3時02分、7.6米なりと。大3回小1回を數へたりと云ふ。

津浪は上部を巻き崩し乍ら押寄せ上陸してから渦流せりと。漂流物は山手へ押込まれ残りは花露邊海岸へ漂着せり。

海岸より約250米東に檜島といふ島があつて僅かに100米位の幅の所を通つて灣口に出るので唐丹灣の中に更に小さな灣の奥にこの小部落があつたのである。

(小白濱) 唐丹村では前記の本郷と共に被害激甚であつた。此の部落の大半は洗ひ去られて僅かに高い所に十數軒の家が残つてゐるだけだ。海岸に集つてゐた村の一老人は當時の様を語つて聞かせて呉れた。此村は明治29年の大津浪にも全滅の憂目に遭ひ大正12年には火事で大部分焼失等全く浮かばれぬ苦難をなめて來た。今度の津浪は地震があつてから40分位経つてからやつて來た。而もジワジワと襲つて來た。濱の中央より北の民家は北へ、南の民家は南の方へ大略二手に別れて流されてしまつた。海岸一邊は水面より2米内外の護岸工事が施してあつたが船の激突のため損傷箇所多く、大龜裂所々にあり。部落の東端、赤土の高臺に海水に浸された黒ずんだ部分は津浪の跡である。この高さを測るに20米の基線を取り、その兩端に於ける仰角を測定すること通常の測量に於て行ふ如くし6.3度及8.4度とダイヤルコンパス上で求めた。基線は略々水平で、測定當時の海水面上より3.05米の高さにあつた。尙ほ此時(3月6日正午頃)の海水面は津浪の時よりは約10厘高であることが潮汐表から求め得たのでこれの補正を行つて津浪の高さを算出すると11.64米となる。即ち大略12米と見て差支へない。又片岸寄りの場所にて9.2米(4月10日午前10時10分)と測定す。

津浪第1回2時50分頃6.1米；第2回2時51分頃9.1米；第3回2時52分頃7.6米。津浪はジワジワと但し上部が水鐵砲の様に潮を吹き上げて來た。漂流物は海岸に近き所のものは沖へ、少し陸のものは寺の下へと押流され沖へ出たものゝ内幾分は花

露邊へ漂着す。

地震前日3月2日午後9時40分頃遠雷の如き音(小さい)2回、津浪の7~8分前に小銃の如き音響(2軒位遠方にて撃つた小銃位)を東南方に聞く、都合3回なり。

此の音響より一寸前に東南方に當つて稻妻の如く、下部は縦模様にて、上部は横縞の、紅黄色より青色の光を見た。小白濱東部の井戸3,4日前より減水す。小白濱の被害は160戸中130戸流失、10戸倒壊、死者5名、行方不明4名と傳へられてゐる。

(片岸) 全戸數70戸の内62戸流失、倒壊3戸、行方不明6人。漂流物は皆沖或は山手へ押込まれる。音は1回ダイナマイト様の底力ある音を聞きたり。光物も見たそうである。津浪は大3回、小は無數ありたりと。浪高は龍神の石段にて9米ありたり而して海岸より1軒位奥まで浸水せり。

(下荒川) 浪高5.70米位なり。而して音は遠雷の如く地震後25分頃聞ゆ。其後15分で津浪來る。光物としては津浪の時ピカピカと稻妻の如き光沖合に見え段々明るくなつて來たのを認めた。而してその光の強さは逃げる足元が見えた位であつた。津浪は大潮の如くジワジワ縣道の橋まで來る。大2回、小は多數。而して漂流物は山手へ押しこまる。第1回の浪2時50分頃、4.5米；第2回2時51分頃、7.6米；第3回2時52分頃、3.6米。當部落は流失21戸、全壊2戸、死者6人。

(大石) 棧橋流失し海岸の納屋2~3倒壊、半壊1戸。音は聞きたるも光物を認めず。津浪は大潮の如く3.5~4.0米浸水したるのみにて破壊力全くなし。

吉濱村(岩・氣仙) Map No. II, (38.39)

(千歳) 吉濱灣の北岸にある千歳は海岸急傾斜にして砂濱もなく家は海面上約10米位の臺地上にあり、船は海岸の急傾斜面に引上げて綱にて引張りおく程なる故津浪に對しては至極安全なる地形なり。浪高6米なれども損害なく船の流失せるもの2~3あるのみなり。こゝでは2度目の浪最大にして雷の如き音がして僅か數分にして津浪來る。光り物は別段認めたるものなし。船は沖合に漂流せる由。

(根白) 住宅は大低海岸の崖上にあり崖下に製造場など少々あり。浪高8米餘にて崖下の製造所2ヶ倒壊流失、漂流せる船は根白の前を前に後に數十回も往復し居たる由。雷様の音がした後約10分餘で津浪來る。

(本郷) 家は道路の兩側にあり大部分は高所にありしたため浸水せるもの少し。津浪は14.1米の水準點(寺院へ少し入つた所にあり)の下まで來る(浪の高さ13.6米)。海岸の岩上の杉樹にて16米と測定せり。谷間の田圃には一面に石塊、砂を流入して

ゐる。また堤防(高5米長100間)は跡方もなく流失し所々に残骸あり。

當部落某氏の談；—

「津浪前12分頃大砲様の音突然したり、而してザーツと音がして後しばらく静かになり約10分の後第1回目の津浪来る。第1回目の波はジワジワと来た。家中の人も浸水し来るを知らず、急に水が疊についたので驚いた。

第2回目は第1回目の浸水に驚いて逃仕度をして外に出ると忽ち顔に沫が當つた。ハツと思つた時は頭から潮をかぶつてみた。第1回目と第2回目との時間差は不明なる由。

明治29年の津浪は今の寺(當時小學校なりし)の庭まで上る。寺内に海嘯記念碑あり。

今回の津浪にては高位にある家の方が却つて潮をかぶつた所あり、引潮の際やられたらしく思はれる。又當日午前6時頃第數回目の津浪來りしがツゝゝと浸水して來る有様は大變早いものであつた。」

小壁漁場の番小屋の人の談によると音より前に稻妻様の光ピカピカとす。青白色の強き光ありたりと。

越喜來村(岩・氣仙) Map No. II, (38.39.40)

(崎濱) 今回の地震は棚上の器物轉落する程度なりし由。地震後約30分にして津浪襲來せりといふ。而して津浪は大なるもの3回小なるもの無數にて第2回目のもの最大なりき。浪の襲來する模様を見るに浪の先端逆巻き後部は平にして岸近くにて崩れたりと。

浪の高さは部落東端の家屋の石垣にて8・10米ありたり。

第1回津浪は3時15分頃で約6・1米；第2回目は3時20分頃、7米；第3回3時27分5・5米位なりき、津浪は潮の満ちるが如くヂワヂワと來た、然し結果から見ると水鐵砲のやうに打ちつけた様にも見える。各回ともさうであつたか否かは不明である。

又津浪前15分位底力あるダイナマイト様の音響を聞きたる者もあれどもその方向は各人區々として一致せず。光り物として地震直後SEEの方向に當つて沖一面に夕焼けの如き光りを見たる由。(部落西端にて)

當部落の流失物は多く鬼間ヶ崎附近に集中し居りし由。又或る物は對岸砂子濱へ漂着せしものもありたり。又部落の海岸には浦濱より流れたる家財類も相當ありたる由なり。大船渡、濱崎間の定期船員の談によれば越喜來灣の沖合に輕石多量浮游せるを

認めたり。廣田村泊の船(積善丸)は同灣沖合に一面泡立ち居れるを見たる由なり。津浪當時崎濱地先に停泊中の船(1000噸)は津浪のありし事を知らず。錨鎖も切れず無事であつた。又當部落にて井戸水の混濁せしものあり正源寺(部落の WSW 印地圖参照)の井戸それなり。

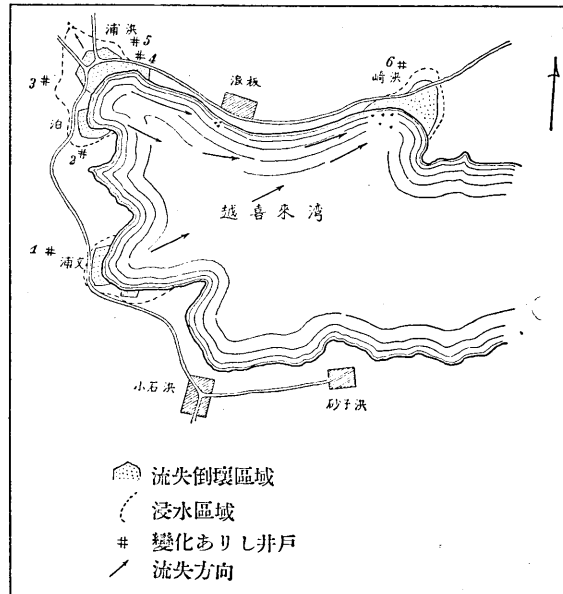
(浦濱) 地震は性質急にて6,7分一様に強く持續し, 時計は止れるもの止らぬものあり, 棚上のもの落下せるものあり, 間もなく餘震ありたれども弱し。

地震後東々北の方向に光り物あり青色にて探照燈様に光る。瞬間的に光れり。光の後に音響あり2回鳴つたるを聞きたるものあり, 音を全然聞かぬものもあり。音は大砲を遠方にて打ちたるか又は雷の如き音であつた。

音の後10~15分にて津浪来る, 其時はサーツ風の吹く如き音を伴ひ後靜かになつてから電燈消え其後2~3分にて人聲喧しくなる(津浪を報ぜるものなり, 避難の人々の聲なり)。第1回目の津浪は小さかつたので學校の校庭まで來らず。第2回目のは大にして強く 田中少佐の追悼碑(碑の後の小山滿潮面より高さ10米)を越せり。

當部落にありたる明治29年の津浪の記念碑, 臺石長さ7尺6寸5分, 厚2尺2寸, 幅3尺2寸5分, 花崗岩で造られたるもの原位置より2米高き場所へ流さる。

第一回の津浪2時58分3.0米; 第2回2時59分約6.1米; 第3回3時00分5.2米, 大3回, 小6回。



井戸の番號

- (1) 甬山嶺龍昌寺内の井戸汚水す
- (2) 泊部落平田玉男の井戸津浪前三日ヨリ混濁
- (3) 村社新山神社々務所の井戸 " 4,5日 "
- (4) 浦濱及川義雄の井戸混濁汚水
- (5) 浦濱熊谷興右衛門の井戸 "

第53圖

第1回目のは潮の満ちて来る様にデワデワと来た、第2回目のは第3回目のは下からモクモクと盛上る様に来た。各部落共同様の如し、第1回目の浪の来る前に甚しく潮が引いた。第3回目の津浪が最大であつたと云ふものもあり。

當部落の流失物は高低川を溯上せしも一部は崎濱へ流れたり。井戸水の變化諸所にありたる如く。津浪前に涸渇混濁した。而して全村の井戸は皆多少變化があつたやうである。村社事務所の井戸は(海面上 22 米)未だ曾つて涸れたる事なきに(深さ 11 米)津浪前 4~5 日より混濁涸渇す。津浪後数日にて恢復(第 53 圖の 3# 印)したる由。小學校雨天體操場は地上より 2.50 米程浸水。

(泊) 泊にては光り物を見たる者なし。たゞ音響を聞いた者があつた。津浪はこゝでは 11.1 米であつた。

(下甬嶺)(鬼澤) 兩部落にては光を見ず、音のみ聞えたる由、浪の高さは 10 米内外なり。

鬼澤にて浪高を目測するに 12 米、下甬嶺、鬼澤間海岸に金比羅の碑あり此處では浪高 11 米餘であつた。漂流物は崎濱(對岸の)に漂流せりと云ふ。下甬嶺龍昌寺内の井戸濁水せり。

綾里村(岩・氣仙) Map No. II, (40.41)

(小石濱) 海岸附近の家は皆流失せり。津浪は小川に沿つて奥の方まで浸入し奥の方の大きな家のみは外觀上變化なく残りて目立ちたり。浪高は目測にて 8 米位であつたことを認めた。

(砂子濱) 砂子濱部落は家屋皆高臺にある爲流失せるものなく、海岸の納屋等 2 ケ流失、製造場 1 ケ流失せり。砂子濱入口の澤にて津浪は 7.50 米、砂子濱海岸にて 5.5 米位あつたらしい。

砂子濱小學校長管野氏の談;一

「地震は水平動の後に上下動烈しくなり長くゆれたり其時間約 8 分間。強震後約 10 分位にて大砲の如き音聞ゆ。地震後約 10 分以内にて海上に當つて怪火見ゆ。雲に反映した如くに下の方明るく上部ぼんやりしたり。色は黄褐色にて長く続き明るくなつたり暗くなつたりした。方向は釜石の方向。音より約 10 分の後に津浪岸を嘯む。津浪の音はサーツと松林を互る風の様な音であつた。而して引浪が非常に急激で津浪は約 10 分おきに來た。小は無數大は 3 回であつた。」

千田基久兵衛氏の談;一

「綾里にては低所よりも高所で音を聞いた人が多い。海岸近くの低地で音を聞いたもの無し、當夜星異常に明るく光る。」

港小學校長千田久松氏によれば砂子濱部落内の湧泉津浪襲來の直前に全く止り、襲來後10分程にて再び涌出する事常の如しと云ふ。

砂子濱小學校長菅野氏よりの回答によれば、

「砂子濱の浪高は9.1米、小石灣にては12米、大と數へ得べき津浪は5回で最大は3回、就中その3回目が最大であつた。最高の浪の高さ等は其の襲はれし痕跡に就き調べ且つ目撃者に據つて調査したから大體誤りないものと思ふ。津浪の洋上遠方から岸に來る迄はモクモクと盛上る様に襲ひ來り岸に到り家屋等を上に浮し押上げ、引き波は極めて強く總てを拉し去る、是は兩部落(砂子濱・小石濱)とも同じであつた。破壊せられたる建物等にして河川の上流に置き去りにせられたるものに就きて調ぶるも其の上頂部の全く濡れざる物多きに見るも尙此の事實を徴し得べしと。3月3日午前2時31分強震に入り此の強震の時間を約7分間とし其後20分にして津浪襲來す。津浪の襲來當時は微風だに無かりしに海灣内蕭颯として宛も密林を互る大風の如き音しつゝ波濤の到れるは岸を傳へて嚙み來れるものか或は又波の捲き廻しつゝ洋下を渡れるものか定かならず、但し其の蕭颯むしろ淙々たる響を聞きしは何人も一樣とする所なり。

津浪の前7~8分頃東方洋上釜石沖合に當つて大礫の如き音を聞く。同時に光を見たるものありと雖も定かならず。明治29年6月15日午後8時の時は殷雷の如き音なりし」と。

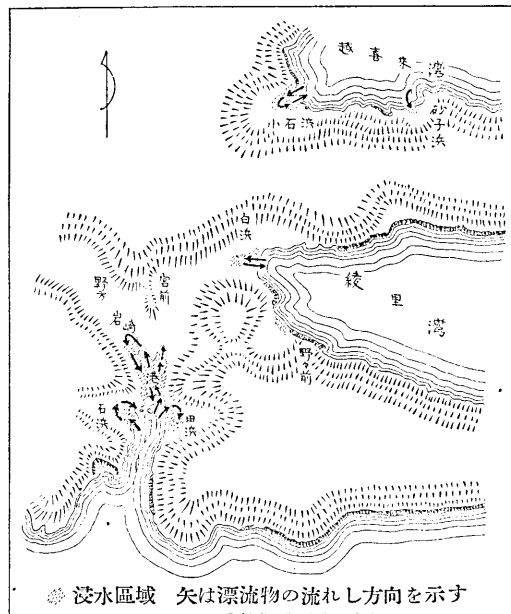
綾里灣は所謂V字型でありその灣奥では非常に浪は高くなり今度の津浪で最高を示してゐる。調査は灣の兩岸は行はずに單に南岸だけにした。(北岸は時日の關係上調査出來なかつた)。

(白濱) 灣奥の白濱は寫眞で見る様な津浪の猛威を振ふにもつて來いの地形をして居り其上浪心に眞向つてゐるから浪高は25米に達してゐる。

被害も甚しく次表の様になつてゐる。

戸 數	罹 災 戸 數	罹 災 人 員	死亡、行方不明
42	35	180	死 15 不 49 } 64

罹災の多寡を論ずるには勿論家の在つた場所の海岸からの高さ等を明かにしない限り意味をなさないが、津浪の勢力を推定するに多少の参考になると思ひこゝに記入しておく。死亡（行衛不明）の多いのを見ても如何に猛烈に非常な勢力で津浪が襲來したかが窺はれる。實地に就て見ても、灣奥の兩岸には濱の小砂が 24~25 米の所までも上つており、又その附近の雜木は水に洗はれて根を綺麗にむき出されてゐる。津浪に眞向ふた白濱の小山の木々は皆同様に根を洗はれ、殊に綾里港に通ずる村道に沿ふた側の杉林は徑 20 糎以上もあるものが幾本となく根本から絶ち切られてゐるのが見える。勿論これは流れて來た家や小舟等が衝突して折れたものと解すべきであるがそれにしても如何に勢力をもつたものであつたかゞ窺はれる。尙明治 29 年の津浪の時には浪はこの村道に沿ふて宮前部落の方へ越したと云はれてゐるが今回は將に越さんとする所で止つてゐる。この所での浪高は 30 米もあるだらう。恐らくこれが今回の津浪に於ての最高と思はれる。



第 54 圖

著者達はハンドレベルを用ひて高さを測つた關係上海岸よりあまり遠い所、殊に傾斜がゆるい所の測定値は誤差が可なり多いと思ふ。上記 30 米の値は海岸より可成り隔てゝ居る場所なる故に確な値ではない。

尙以上の様に測定器の關係上出来るだけ海岸に近い所で、しかも傾斜が急な様な所で、津浪痕跡のある所を撰んで高さを測つたものである。

白濱に於ては普響を聞いた。光は氣付かなかつた。海岸にては堤損壞し、大石打上げられてゐた。津浪襲來の大體の時刻及高さは第 1 回 3 時 05 分、30 米；第 2 回 3 時 10 分、高さ不明；第 3 回 3 時 40 分、9.1 米。

(野々前) 白濱近くの野々前も寫眞で見る様な地形をしており家屋は幸ひ高地に多かつた爲め被害は割合に少いが、津浪の勢力は非常に強く海岸近くにあつたものは跡方もなく大洋に浚はれ、慘狀を呈してゐる。

(田濱) 綾里港の東岸にある此の部落では浪高8米に達した所あり。後に山を控へた海岸近くの低地にあつた民家は津浪の爲に殆ど全部が引きさられてしまつた。損害は次の様である。

戸 数	罹 災 戸 数	罹 災 人 員	死亡, 行方不明
51	35	185	死 1 } 不 1 } 2

(綾里) 綾里港の被害は下表の如く非常に著しきものであるが、しかし津浪の勢力は綾里白濱の様ではなかつた事は明かで、たゞ民家が傾斜緩かな海岸近くに密にあつた爲め家屋は順々に將棋倒しに倒されて被害が大になつた様である。浪高は海岸で8米、綾里港では引き浪で沖に浚はれたものは少く、大多數は押し浪で上手に流され潰された様である。津浪の際、綾里港にては火藥爆發よりも寧ろ長く続きドーツと云ふ音を聞いた。而してこれは津浪の直前4~5分位であつた。

部 落	戸 数	罹 災 戸 数	罹 災 人 員	死亡, 行方不明
綾 里 港 (上 下)	117	116	623	死 56 } 不 29 } 85

海岸近くの宅地、田畑へは砂が厚さ0.3米位に堆積し、港の海底は2~3尋深くなつたといふ噂あるも眞偽はどんなものかと思ふ。

綾里村小學校長千田久松氏よりの文書によると、「生死の場合ですから確かに之を眺めたる者なき筈です。兎に角波に追立てられ命からがら避難した者の話によれば下からモクモクと盛上る様に、上部に白浪が立つてゐた様に眺めた事は何人も一致してゐるやうです。津浪は第1回目は小で第2回目は大なる様に話さるゝも第1回目は確かに大なりと信じます。家屋其他の障害物を破壊した爲に餘程勢力をそがれたる爲、第2回は水勢が強大なる様に感じたものと思はれます。随つて第2回目は最も遠方まで水力衰へずに進行した。これを第2回目の勢力が大なりと誤りたるに非ざるか、第3回目は時間も遅れ勢力も全く減退して大潮の時の如くデワデワと來ました。流失物

は其のまにまに上つたり下つたりして翌日午前 10 時頃まで海面一體に木材破片でうづまつておました。」

午前 2 時 30 分の大強震後 20 分程経て微音があつた。即ち津浪の来る 10 分程前になる。遠雷の響の様にドドンと全く微音で感じた人が少い。方向は東方。但し底力ある音であつた。光り物を見た人もある様なれ共確實ではない。強震直後に東方一體は電光の如く光つたといふことである。津浪襲來の直前に於て井戸水が涸れた事に気がついた者があるから或は一帯に涸れたかも知れない。港に於ける津浪襲來の時刻及び浪の高さは第 1 回 3 時 10 分, 12 米; 第 2 回 3 時 20 分, 高さ不明; 第 3 回 3 時 50 分, 3.0 米。

(石濱) 田濱と相對して綾里港の西岸にある部落で浪高 9 米。海岸近くの低地の家屋は全部引き浪の爲に洗ひ去らる。

戸 數	罹 災 戸 數	罹 災 人 員	死亡, 行方不明
46	29	152	死 4 } 不 2 } 6

赤崎村 (岩. 氣仙) Map. No. II, (40. 42)

(合足) 地圖で見る様に小さい灣の奥にありて、土地の傾斜は割合に緩であり、海岸より可なり奥までひらけてゐる。部落の中央を流れる小川(水なし)の堤に沿ふて並木は寫眞で見るやうに川下に向ふて折れ、又寫眞に撮つてゐないが、一むらの竹藪も悉く川下の方向に倒れ伏して居る。川の兩側にあつた民家は 8 軒流されて全く跡型もない。流死 20 人。神社及び寺のみ残る。合足は全く引き浪であらされたものであり、浪高は海岸で 12.5 米の所あり。

(長崎) 背面に緩傾斜の畑を控え、海岸附近は相當急傾斜を爲して海に臨んで居る。海中には岩礁多く、暗礁も相當に澤山あるらしい。部落は一寸した岬で東西 2 つに別れてゐる。東側の方は急峻な崖で海に臨んで居る爲に被害なし。船は多少流失せる見込あり。西側の方には小港あり。海岸附近の小屋及家屋 2 程倒壊流失せり(何れも地圖記載の道の曲り角の所)。海岸(地圖で記載の道の曲り角)流失家屋のすぐ隣に救護事務所ありたり。白梅の小枝を持つて海岸に遊んで居た小兒數名に聞きただして次の事を知るを得た。

1. 浪の上つた極限の地點, ハンドレベルにて測定するに海面上 7.5 米(津浪當時の海面より直せば 6.7 米)であつた。

2. 光り物を認めた。それは逃げる時に明くなつたのでわかつた。色、形等は不明である。二番目の地震(2時40分頃の餘震か)の後1分もせぬ内にノンノンといふ音して津浪襲來す。

3. 津浪の回数は大3回小は無数なりと云ふ。長崎より下蛸へは立派な新道路が出来てゐる。自動車を通れる。

赤崎村の西側の部落は大船渡灣に臨んでゐる。大船渡灣に就いて以下略述するに海岸地形は全く東岸と西岸とで異り、東岸は小規模ながら非常に複雑な海岸線をつくつておるのに反し、西岸は割合に單調な曲線をなし且つ海の深さも東岸寄り西岸よりも遙かに深くなつてゐる。従つて津浪の浪高も兩岸に於て差があり又その分布状態も異つてゐる。西岸は低く概して1~2米程度であり、東岸は3~4米程度で又西岸よりも浪高が複雑な分布を示してゐる。大船渡灣兩岸には山が海近く迄せまつてゐるので部落は殆ど海岸線に沿ふて發達し甚しきは海面より1米程度の高さの所に民家が見られる。従つて民家の被害も西岸よりも東岸の方に著しいものがある。

目黒盛警察署長談「津浪は一説によれば灣口より直眞に入つて来て丸森茶屋の下の斷岸に衝突し其後二つに分れ一つは細浦を襲ひ他は灣内を幾度も反射しながら奥へ進んだといふ。」

(千丸) 千丸は5萬分の1の地圖(盛)の尾崎岬の尾崎神社と記してある尾の字の右下の小砂濱にある。道路より谷へ下る所に家一軒あるのみにて谷間の中には人家なし。人家に異状なし、砂濱には平素あまり船を置かぬ所らしく船の被害もなく又浪跡も見べきものなし。大體8米位ならんと思ふも確ならず。

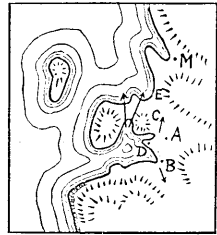
(小外浦) 尾崎岬半島の北岸にて岬といふ字の上の小濱にて大船渡町笹ヶ崎、永澤及下船渡の流失物此處に漂着せるもの多しといふ。

(蛸ノ浦) 蛸ノ浦は上下2つに別れてゐる。下蛸は背後に山を控えた狭い地面に發達してゐる。津浪はBの谷に沿ふて大部奥まで浸入してゐる。船などは流して來てゐるが、Aの邊では盛土して新道路を高く作つた爲に道路の下で波止る。Dのあたりは海非常に遠淺にて汚し、Dの所被害(浸水のみ)一番甚し。其の高さ海面より3.5米と測定(但し此の時引潮にて平均より0.9米海面低し)した。

下蛸Dの所の家にて聞きたる話によれば、津浪の際音を聞かなかつた。但し裏山へ仕事に行つて居て泊つてゐたものにて聞きたるものある由(海岸附近では聞かぬも山手の人は聞付けたり)。

地震後潮が急に引ききたる故 2 階（家根裏を 2 階にせり）や山へ避難した。而して津浪は下から盛り上げる様に來り回数は大なるもの 3 回ありたり。又津浪の前日山にて沖合に當り火薬爆發の如き音 1 回せるを聞きしものありと。光り物を見たるものなし。海岸の松の枝 29 年の津浪にては濡れて枯れたるも今回は其れより 0.5 米位ひくし。

上蛸ノ浦 浸水高約 5 米（平均面へは 4.2 米位）道路丁字形になつてゐる所の角の庭に浸水。土手を少し流し壊す。津浪は半島を矢印の方向に突抜けたる由。A 附近の家は矢の方向 C の方に流され、B にあつた家は矢の方向に流されたものもある。A には水が殆んど天井までとどいた家があり（平均海面より 2.6 米）、その家は藁葺きで丈夫で大きいものであつたので少しの破損もなく、又流されもしなかつた。この家の裏手は直に山に接し前面には 1 軒の住家を隔て、海になつてゐた。此附近一帯に浸水可成ありたれども其割合に被害少し。C にあつた家は破壊し流されたものが 5 軒あり、又 26 人位流死した。



第 55 圖

E 附近の家も殆ど全部が流され土蔵のみ残つており當時の慘狀を物語つてゐる。この邊は矢の方向に岡を越した水が可なり猛威を振つた様で、16 人も流死してゐる。この附近での浪高は 3 米。

（清水）蛸浦より北上すると北西に開いた小灣の奥に清水なる部落あり、浪高は 4 米に達し、低地にあつた民家は災害を受け、全壊流失 6 軒に及び、5 人流死してゐる。尙全壊した家は山手の方即ち東南に倒されてゐた。

清水より北上して永濱コーラ寺に到る間、御前島を前にした所では浪高は 3.3 米あり目立つ被害は全くないが、水鷄島を前に控えた所では浪高は 3 米に過ぎないが 8 人流死し、15 軒流失してゐる。

蛸浦及清水附近の入江にある海苔柴には何等の被害も見受けられない。水鷄島の所の半島の根本には田圃があるが大部高い所まで浸水して船が上つて居る。但し人家まで届かぬ。

（永濱）琵琶島にかくれたコーラ寺では浪高 3.2 米あり。3 軒流失、1 軒倒壊、他の 1 軒は半壊、6 人流死してゐる。

部落の南端 V（第 56 圖参照）では浪高は 4.5 米あり、W なる所は護岸工事より

も1.5米盛土した石崖(永濱の護岸工事はその高さ1米である)の上に家を建て、あつた爲め人畜家屋等の被害は殆ど皆無で、たゞ岸が多少破損してゐた位である。

然るに永濱のXなる箇所では護岸工事も破壊され、附近の家屋も殆んど流失し、永濱部落中では此所が最も被害甚だし。

永濱では11人流死し、10軒以上流失してゐる。永濱の北端Yでは2階建の家で1階の天井裏まで水に浸されて流れないでゐたものもあるが、又1軒の家は矢の方向に流され壊れたものもあつた。そして津浪はYより岡を越して山口部落の方へ流れ出してゐる。Y及びXの所での浪高は3.8米。

(山口) 永濱を過ぎて山口に到る間の海は遠浅であり、被害も殆どなく護岸工事に多少の破損が見られる位である。この附近での浪高は2.5米である。



第56圖

山口部落では2.2米の浪高を示し、人蓄には損傷なく、半壊になつた家が1軒あり又生形に近い家が1軒破壊されてゐる。

(生形) 3人流死し、71軒の内6軒流失、1軒倒壊し尙護岸工事も可なり破損を蒙つてゐる。

赤崎村役場にて助役鈴木養左衛門氏の談によれば津浪の前に大砲の如き音を1回聞いた。津浪は前後3回来た。又光り物を見たる人あり初め赤く後に青く最後に白くなつた山である。

浪の高さ約2.7米(但し津浪當時の海面から2.2米)と測定せり。海岸より約150米浸水せり。

(宿) よく開拓したる大きな谷に發達せる部落。非常に平坦なる爲、此の附近第1の被害地なり。浪高は約4米(平均水面へは3.5米)であつた。(パノラマ寫眞参照)

當部落では津浪に對する村民の警戒が行き届いた爲めであらう戸數64軒の内27軒流失し、1軒倒壊した程の被害を受けてゐるに拘らず1名の死者も出してゐない。

宿を過ぎて大船渡村に行く途中大船渡灣の灣奥、盛川の河口では護岸工事が可なり破損してゐる。尙宿と盛川との間にあつたセメント會社の倉庫が2軒壊され流されてゐるのが見られた。この附近での浪高は3.5米であつた。

盛川下流域は一面の田圃にて、堤防の兩側の田圃は海面と殆んど同高である。川を遡つた津浪は兩岸に可なりの損害を與へ、海岸より約1軒浸入。海岸に近き田圃は砂

にて覆はれ、水は満々と附近に湛へた様である。津浪の朝は田圃一面にカレヒ、サバ、其他の小鱼打上げられて居たる由。

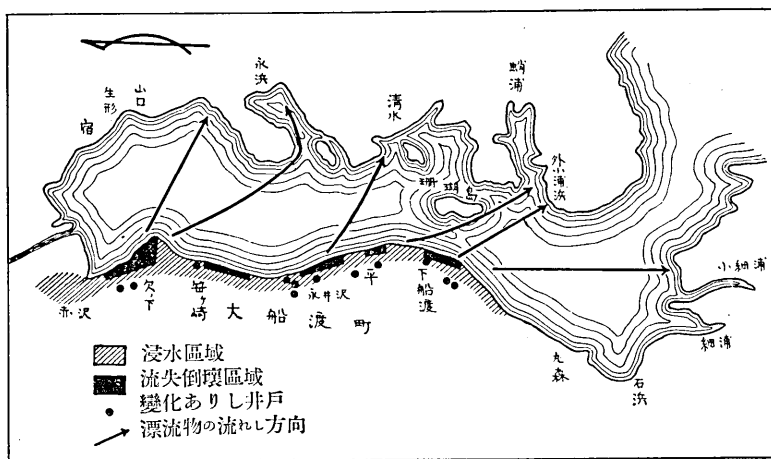
盛町（岩・氣仙）

津浪に依る被害は更になし。

大船渡灣西岸に於ける津浪の状況について述べると、大船渡町より末崎村の船河原に到る間約 7 軒の間たゞ字平附近の被害をのぞいては殆んど見る可きものはなし。浪高は大船渡の字須崎で 1.8 米、それより南下するにつれ浪高は増す傾向をとつており末崎村船河原附近で 4.7 米となつてゐる。平の 3.1 米は特殊の理由により局部的に津浪の發達せるもので例外である。

大船渡町（岩・氣仙） Map. No. II, (42)

（欠ノ下） 欠の下の茶屋前では浪高 1.8 米。この所で罹災した某氏の談によれば、附



第 57 圖

近に山と積んであつた製材所の材木が津浪の爲流され、それが家に衝突して家がこの通り半壊になつた。自分は津浪が來たのでのがれ様として戸口に行くと流れて來た材木で戸口は閉されてゐるので仕方なくそれを押し除けやつとの事で屋根に這ひ上り、裏の木に登つた。水はだぶだぶとたゞへてゐてあまり流れが激しく無いので水の中を歩いて山手の方へ逃れたとのことである。この家の他に今 1 軒新しい家で水が土間より 1.1 米位まで高く侵入しその爲め多少流されたものがある。以上の事實より察するに大船渡では津浪は可なり勢力を失つてゐた様に思はれる。製材所のバラック式

の倉庫は流材の閉塞によるものか破壊せず。欠の下茶屋の井戸は地震前より濁り且洒れた。津浪は割合徐々に來たらしい。大船渡にては津浪前 10 分頃ドーンと大砲でも打つた様な強い音が釜石沖の方面から聞えて來た。又津浪と同時に水の上つたのと同時に銀色に（銀と黒とのまぢりなりと云ふ）光つて上下動を爲しつゝ來た。水の上つた部分が光つて見えたと云ふ。欠の下の津浪襲來の時刻、浪高はの上の表様である。

（笹ヶ崎）欠の下と地形、浸水、破壊の程度は略々同様である。時刻、浪高は次の様である。

	時 刻	浪 高
第 1 回の浪	3 時 20 分	1.2 米
第 2 回の浪	3 時 24 分	2.1 米
第 3 回の浪	3 時 44 分	1.2 米

（永澤）第 1 回津浪 3 時 13 分、41.2 米；第 2 回 3 時 15 分、1.5 米；第 3 回 3 時 30 分、0.6 米と云ふ。井戸變化したる所 2ヶ所あり、満潮なるにも不拘井戸水が濁れて水が出なかつた。又他所では水がつ濁た。漂流物は對岸清水（赤崎村内）へ流れた。

（平）大船渡灣の西岸大船渡より船河原に到る間で唯一の被害を蒙つた所である。然し其の被害區域は極めて狭く海岸に沿ふ僅か 160 米の間に限られ、家屋 11 戸が北より西へ 40° 位の方向に押倒され 3 名の死者を出した。浪高は 3.1 米即ちこの一劃は異常區域とも云ふべき状態を示してゐる。この區域を過ぎると突然浪高は低くなつて 1.3 米となる。第 2 回目浪高最大なりしと。

津浪襲來時刻及び浪高は次の様である。

	時 刻	浪 高
第 1 回の浪	3 時 15 分	1.5 米
第 2 回の浪	3 時 17 分	1.8 米
第 3 回の浪	3 時 35 分	1.2 米

	時 刻	浪 高
第 1 回目浪	3 時 10 分	1.3 米
第 2 回目浪	3 時 13 分	2.0 米
第 3 回目浪	3 時 25 分	—

平よりの漂流物は、大抵對岸赤崎村蛸ノ浦尾崎神社下に漂着せり。地震前數日より津浪後數日に亘り井戸の涸れたるもの、増水したるもの數個あり。津浪は割合に徐々に増水したのらしく浸水(2.5~3米)の割に家屋の破壊輕小なり。水は道路を越して後の山際まで浸水したりと云ふ。

(下船渡) 平より下船渡に到る間は平均浪高は1.3米であるが被害としては見るべきものは殆どない。たゞ平寄りの家が1軒北より西へ40°位の方向に倒されてゐるのが見られた。浸水高が小なる爲め流されることはなかつた。

下船渡の部落に入れば縣道は海岸から隔れて陸地に入る。道路と海岸との間は平坦地にて海面上高さ約2.0~1.5米位で工場等多し。津浪の浸水高は水面上3.5~4.0米にて地上1.5~2米あり。其の割合に家屋の破損少し。但し半壞の家や全壞の家があつたが其等は皆元來貧弱な古い家である。下船渡の丸森寄りの區域では浪高は平均3.5米であるが全然被害はない。丸森と船河原の間の海岸の大部分は小規模乍ら絶壁をなしてゐて波高は4.7米。第1回津浪3時05分、0.6~1.5米、第2回3時10分、1.5~3.0米、第3回3時20分、1.8米。

下船渡にて津浪の押寄せのを見てゐたのには珊瑚島の方に浪が見えた。其時は非常に大きな浪がモクモクと押寄せ其の浪の色は黒く、海岸に來り波が引ける時は銀色に眞白くつてハネ返つて行つた。満ちて來る時は退いた水が一度にモクモクと恐しい様に満ちて來た。浪の打ちつける時は自動車でも走る様にゴォゴォと音を立て、來た。浪は逆巻いたり崩れたりせず下から盛る様に勢よく押寄せて來た。第2回目の波にて損害を受けた。川を廻る津浪も矢張モクモクと盛上り涌き上る様だつたと云ふ。下渡船の漂流物は對岸蛸ノ浦に漂着せるもの7割小細浦に漂着せるもの3割なりと。

(珊瑚島) 大船渡灣内にある島であるが、この島での浪高は概して西側が東側より高くなつており東側は平均2.6米で西側は3米を示してゐる。

末崎村(岩氣仙) Map No. II, (42. 43)

(船河原) 船河原へ丸森より下らんとする道の曲り角の東側に畑あり海水を冠る。海面より高さ9.0米(平均海面より9.1米)。

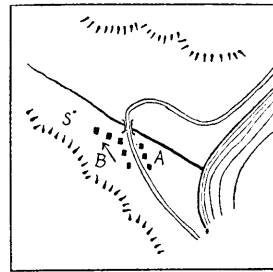
道路面は船河原橋の橋床面は河原より2米位高く、船河原の主部落は河原北側の山地にありて被害なし。

(石濱) 恰も綾里灣の白濱の様な地形にあつた爲めであらう、大船渡灣へ押寄せた浪はその猛威を先づこの石濱に振るつて、18人の生命を奪ひ、家屋8戸を流失してゐ

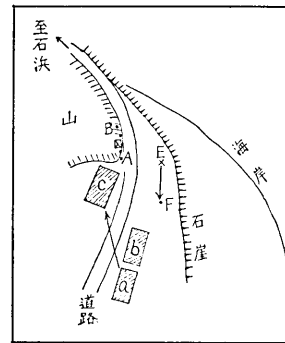
る。浪高は海岸近くで7米、6.5米を示めており、最高點は8.7米位まで達し海岸近くの3軒の家は海中にさらはれ、縣道の向ふ側山手にあつた5軒は矢の方向に押し流されて壊されてゐる。

(細浦) 海岸地形の関係であらう、この所での水の運動は非常に複雑で、その動勢を知るのには困難を感じる。

細浦町北端石濱近くに位せる某家の主人の談を綜合するに(浪高は著者達の測定)圖Bでは浪高は4.5米、Bより僅か70米隔てたAでは2.5米あつて其の間に小さい石地藏がありそれは少しも波を蒙らない。防波堤の石崖は海面より約2米高い。従つてa, b, cなる家屋では浪高は0.5米であり、漸く縁側を浸す程度に過ぎなかつた。然るにaなる三軒長屋のバラツク建ては壊され家cの前まで流された。ac間は約20米。然るにEにあつた大きな石(約50糶)は約10米も反對方向のFに移動した。細浦の家屋は大抵山手へ押付けられたのに反し小細浦の流失物は大抵沖合へ流る。細浦にては出漁準備中の漁船が潮の引きたる爲顛覆したので津浪の來るを豫知して避難した。



第 58 圖



第 59 圖

(小細浦) 細浦の東側にある小灣に臨んでゐる部落であるが浪高は概して低く、灣の入口で3.8~3.0米である。

灣口は大體北に向つて開いており細長い入江の様になつてゐる。灣奥に位する家の所に津浪の爲めの破壊物や小舟等が流れて來、こゝにためられた様に見えた。東側岸を歩くと、灣奥より灣にかけて岸に近く建てられ山を脊にした家は殆ど皆倒されてゐる。村民の話では「小細浦では灣口より津浪がジワジワと崩れずに押しよせて來た。小舟などが全然轉覆せず波の間に流れてゐたのはジワジワ來た證據だと云へる」と。

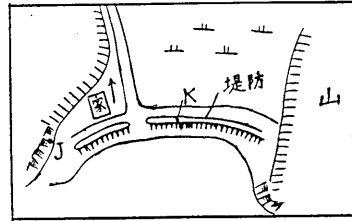
小細浦を過ぎ碁石に至る間の海岸は人家殆どなく浪高は5.5米、6.5米、7米。貝島を向ふにした海岸では12.5米となつて可なり高くなつており、外洋に面した所では波高も大きくなつてゐる事を示してゐる。

(碁石) 碁石濱では津浪の勢力は可なり著しく水は堤防を越し村道を浸し田圃の可なり奥まで進んでゐる。堤防の所で浪高は8米、又Jなる崖の上で6.5米である。

J 附近に山を脊にしてあつた家は矢の方向に倒されてゐた。

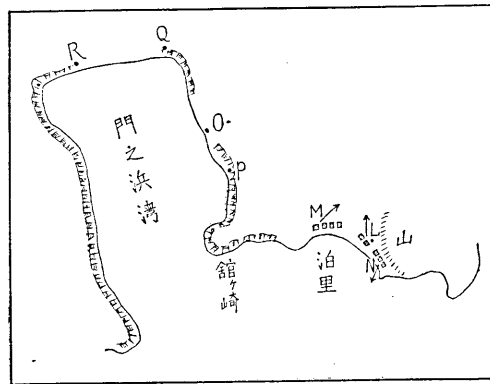
碁石では人畜の被害は先づなかつた。

(泊里) この附近での漁村であるが M 附近の家の内海岸近くのもの 4 軒その場所に倒され、L 附近の住家は 10 軒以上も矢の方向に山手に向つて流し倒され 10 人の死亡者を出してゐる。尙



第 60 圖

N 附近にあつた 3 軒の家は海洋にさらはれ跡かたもなく、M 附近では水は矢の方向に流れたと土地の人は云つてゐた。泊里では村の調べでは倒壊流失したもの 40 軒あるとの事なり。M の所で浪高は 5.5 米、L の所で 6.5 米、N の所で 5.5 米となつてゐる。平時時化の時は M の方が L 附近より波が荒く高いが、今度の津浪の時は反對で L の方が M 點より



第 61 圖

り 1 米も高く波がなつてゐるのは注意に値する。尙 N の所の流失した家の土臺の高さは海面上 3.5 米あつた。泊里の村民は地震後 5~10 分位して底なりのするドーンと云ふ音を聞いた。その後東方に稲光の様な光を見たと云つてゐる。泊里寺の金良虎氏は後光の様な光を見たと云つてゐる。

(中井) 長方形の門之濱湾の東岸に位する部落である。此部落と館ヶ崎との中間の海岸(圖で P の所)で浪高は 5.8 米であり、附近の岸壁 O の所で 6.5 米を示してゐる。

(門ノ濱) 當部落(Q)は家屋に可なりの被害を受け流失したものもある。村役場の調査では倒壊流失したもの 15 軒あり、この附近での浪高は 8.5 米である。

(梅眞) 海岸での浪高は最高 9.5 米になつてゐる。梅眞と門ノ濱の境 R の所での浪高は 7.3 米と出た。梅眞では全然被害を見ない。家屋が高地にあつた爲めである。門ノ濱の人は地震後、泊里部落の人と同じく、5~10 分位して底なりのするドーンと云ふ音を聞きその後東方に稲光の様な光を見た。

廣田村(岩・氣仙) Map No. II, (43)

(長洞) 小友村唯出の隣りにあり。灣奥に位し後方に小山を控へてゐる。浪高は9米に達し、この附近の家屋は倒され唯出の方へ山の手に向つて流された。後述の唯出での水の動きと比べて面白いと思ふ。

(大野灣) 大野灣の北岸は被害は僅少であるが浪高は7米、9.3米、7.3米である。長洞の白衣岩附近より海岸傳ひに恵比須崎に出る。海岸崖の上にあつた一軒屋と鰯粕製造場が津浪の爲めに流失した。この家の夫婦も共に流死してゐる。この附近での浪高は7.5米である。

(大野)(花貝) 大野灣の灣奥にある部落であるが海岸にあつた家が3軒陸地の方へ流され潰された。これ等の家と崖を境とした所にあつた納屋は引き波でその柱が取られ、その屋根は納屋より20米位離れた所に投げ出されてゐた。この附近での浪高は6.6米~7.5米であつた。

(畑)(六ヶ浦) 大野灣口にある六ヶ浦では浪高は6米であるが大野に近い畑部落では11.3米となつてゐる。六ヶ浦より海岸傳ひに岩倉部落まで行く。この間の海岸は地圖でも明かな様に殆んど全海岸が絶壁をなしてゐるが、所々主に谷川に沿ふて海岸に降りて、浪高を計つてみた。黒磯岩附近で10.5米、黒崎神社の突端で8米、9米となつてゐる。

部落民の話では、4米の高さだけ水が引き、引くと殆ど同時に津浪が來たと。

(岩倉) この部落は根岬、集に隣してゐるが住家は高所にあつた爲め人畜家屋の被害は全然なかつた。浪高は灣の入口で13.2米、10.5米、灣奥浸水區域の最高點は海岸から200米近くの所で、その浪高15米に達してゐる。

(根岬) 津浪の浸水の最高點は海岸より100米位離れた奥地になつており、その點の高さは18米に及んでゐる。

地震の後12分位して大砲の様な音が南方で聞え、後10分位して津浪が來たとの話である。根岬部落では75軒の内23軒は流失し、622人の内16人流死してゐる。津浪は可なり猛威を振つたものである。

(集) 根岬の南隣り集は綾里灣の白濱と同じ様な地形位置にあつた爲めと思はれるが浸水區域の最高點は海岸より100米足らずの點で24米に達してゐる。

外洋に直面しV字型灣の灣奥に位し、しかも灣の水深は急激に深くなつてゐた爲め津浪は猛烈な勢力で集を襲ひ寫眞にも見える様に海底の大きな石塊を無數に海岸に打ち上げ又灣内の海底は外洋より運んで來た石の影響を受けて非常に淺くなり船發着

場を變更しなければならなくなつた所もある。

危く九死一生を得た漁夫の言によれば、津浪とは思はれず、霧の様になつて頭上に猛烈な勢をもつて折れ重なつて來た津浪は瞬時にして集を殆んど全滅させ、人畜は殆ど奪はれ、家屋又跡方もなく洗ひ奪はれたと。

尙海岸近くを走つてゐる村道には直径 30 糎餘りの樹木（防風林）を一列に海岸に沿ふて植えてあつたがこれも根こそぎ奪ひ去つたとの事である。

津浪後一ヶ月後に著者達は實地に此の地を見學したが、生地獄そのままの荒涼たる集の姿に接したゞたゞ自然の力の偉大なるに驚くと共に當時の状態を想像して身に粟の出るのを感じた。

村民の云ふ霧の様になつた瓦斯とは思ふに海岸で猛烈な勢でくづれてのしかゝつて來た浪を恐怖せる夜の目に斯く感ぜしものと思ふ。

集でも全く根岬と同じく、12 分位して大砲の様な音をきき、音の後 10 分位して前述の様な状態で津浪が押寄せて來たとの事である。

かゝる猛威を振つた津浪も集の突端廣田崎附近や青松島はては椿島に至るに従つて急激にその浪高を減じてゐる事を調査と共に知り得た。

即ち灣奥より海岸に沿ふて突端に進むに 200 米來た所で 21 米、更に 200 米の所で 10.5 米、更に 150 米の所で同じく 10.5 米と浪高が減じてゐるのを認めた。集より 1000 米位離れた青松島では 8~9 米となつてゐる。尙この島では海面より 8~9 米の高さの所に海底の砂が巻き上げられてゐるのがよく目についた。

尙更に進んで集より 1500 米位離れてゐる椿島では漁夫の言を参考にしてこの島での浪高を 3~4 米と目測した。（波浪強かつた爲め實地に上陸して調査するを得なかつた事は残念である。）

（金室岬） 集の慘狀に目を側めながら村道に沿ふて金室岬附近に到る。此所では浪高 9 米となつた。金室崎より海岸に沿ふて約 300 米の間は津浪の痕跡が水面に平行に直線的にあるのがよく見られた。

（泊） 部落は海岸に向つて緩傾斜をなし浸水區域の最高點の高さは 8 米に達し海岸より 200 米以上の奥まで浸水してゐる。（郵便局の上 100 米位迄）泊は廣田村唯一の港であるが、海岸近くの家屋や製造場は倒壊或は流失してゐる。村役場の調査によれば、津浪前 114 戸、752 人あつたものが、津浪のため、42 軒流失倒壊し、7 人の死者を出してゐる。

又村役人の話によれば、地震後 12 分大砲の様な音を南方で聞き、更に 10 分位して、5.5 米位海水が引き、更に 5 分位して津浪が押し寄せて来た。

尙地震の前日頃気付いた事であるがある場所の井戸水が減水してゐた。そして津浪の後の井戸水は 2~3 日間鹽辛かつたとの事である。

漁業組合の青年の談、「津浪の當時鮫船が出漁しやうとして居たが潮引きたる爲中々船が出せなかつた。」

火薬爆發か雷の様な音がしてから後光る。音の後約 15 分で津浪となる。津浪は小鉄砲の様に打付けて来たが逆巻いては居なかつた。まるで煙の様になつてワット押寄せた。流失物は明神の方から山手の田の方へ流された。

呼べば聞えるかと思はれる位の近い沖を赤い光が走つて居た由。又函館通ひの定期船に軽石降りたる由。又航海中岸近き所にて 3 回衝動を感じ、海水の沸騰せるを見たる由なり。

廣田村郵便局長の談によると沖合に當時非常に軽石が浮遊して居て、岸に漂着せるものを郵便集配夫が採集せるものありと言ふ。(其の 1 片を貰ひ受けて歸京後鑑定せるに石炭の燃料なりし。)

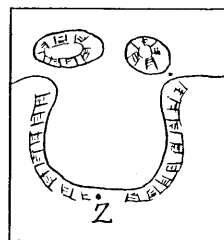
増水は割合に徐々なりし様様なり(家の前に壁土をおき山になつて居たらば其れをよけて脇手の方から浸水して来た等と詳細に観察して居るものあり。急激な増水ではこんな暇はあるまい。)

(越川) 浪高 9 米, 村落は高所にある爲に損害なし。

(太陽) 浪高 7 米, 4 戸流失。

小友村(岩・氣仙) Map No. II, (43)

(蛇ヶ崎) 門之濱灣の西岸の突端蛇ヶ崎での浪高を調べてみた。半島の突端で前面に二つの大きな島を控へその影になつてゐるが Z 附近で測れば長い波長をもつた津浪の眞の高さが出ると思ひ跡をさがし且つ漁夫の言を参考にして計つてみると 5.5 米と出た。



第 62 圖

(唯出) 大野灣口の一小灣の奥にある部落で一部は海岸に密接し一部は山手なり。海岸は砂濱にて海岸の家は皆流失し土臺のみ残つてゐた。

津浪の高さを神社の下の海岸で測るに 7.8 米あり。津浪は海岸より約 500 米浸し郵便局のある十字路下まで入つた十字路下の家 1 軒半壊にて残れり。其の下手には海

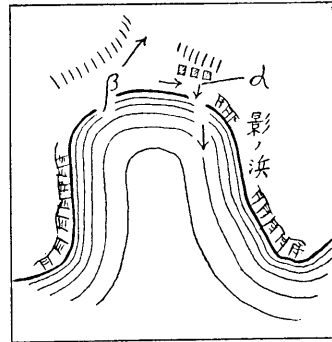
岸附近の家の破片（柱、羽目板など）山積せり。

土民に當時の模様を聞くに地震後 20 分にてドンと云ふ音 1 回、其後 15~16 分にて津浪襲來せり。初め潮引きたる爲船引つくり返る。第 1 回の津浪にては前側 2 軒のみやられたるも第 2 回目津浪にて全部やられたる由なり。

浪は崩れて押寄せたりと言ふ。第 1 回の浪の高さ 3.0 米。其後約 5 分で第 2 回目來る。高さ 3.9 米其の後約 5 分にて第 3 回目來る高さ 3.9 米、大 3、小數回といふ。

明治 29 年には唯出より這入つた津浪は唯出の家屋人畜をひとのみにして田を浸し廣田灣奥の三日市灣に流れ込んだと云はれるが、今度の津浪では海岸より 500 米位の所まで浸水しており、29 年のに比して弱く約 3.0 尺低かつたと云ふことである。

又附近の海岸近く低地にあつた家は皆流されて影の濱の海岸に打ち上げられてゐた。影の濱では浪高は 6 米である。



第 63 圖

（獺澤）（矢ノ浦）共に廣田灣に臨み民家は高所にある爲全く人畜に被害はなかつた。

獺澤にてはドンと音がしてから 25 分矢ノ浦にては 20 分位で第 1 回の津浪來る。其後獺澤 5 分おき、矢ノ浦 6~7 分おいて第 2 回、其後獺澤 3 分、矢ノ浦 3~4 分にて第 3 回來る。

獺澤	第 1 回	3 米,	第 2 回	6.1 米,	第 3 回	4.5 米.
矢ノ浦	„	2.1 米,	„	4.5 米,	„	2.4 米.

何れもデワデワと寄寄せたといふ。北の佐五郎の鼻の浪高 7 米。

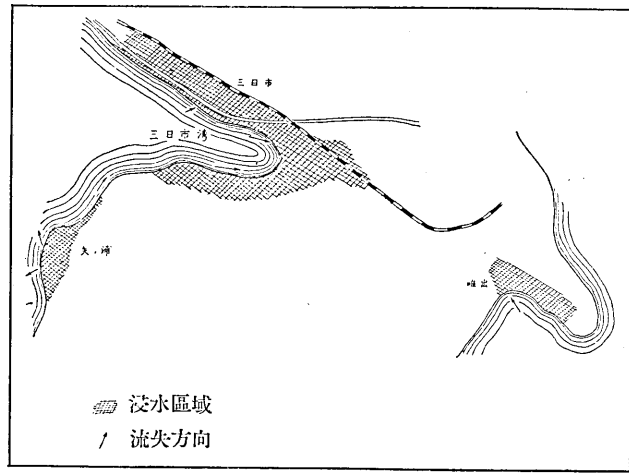
矢ノ浦にては浪高は 6.5, 6.0, 5.0 米あり。海岸近くの家が 2 軒その場所に倒壊されてゐる。

三日市灣の兩岸では被害は次表の通り、たゞ灣奥に位する緩傾斜地の田地が浸入した津浪の爲めにあらされ、村道をつなげる小橋が破壊されてゐるのが目立つた。今西岸に於ける浪高を検べてみるに次の様であつた。

（鳥嶋）（鹽谷）鳥嶋で 3.5 米、鹽谷で 2 米、三日市灣奥での最高は 4.5 米の所あり。

（三日市）全然被害はない。立派な高さ 2 米位の護岸工事がありその上を縣道が走

つてゐる。地震後 20 分にてドンと音がし其後 20~30 分にて第 1 回の津浪来る。第 1, 第 2, 第 3 の津浪襲來の間隔は約 14~15 分で波はジワジワと音を立てて來たと云ふ。浪高は第 1 回 2.1 米。第 2 回 2.4 米。第 3 回 2.4 米。



第 64 圖

(兩替) 地震後音を聞き。其後 40 分位にして津浪の襲來を見る。津浪の間隔 12~13 分位。浪高 第 1 回 2.1 米。第 2 回 2.4 米。第 3 回 2.4 米で三日市と大體同様なり。

當村に於ける大字別被害表

	流失	全潰	半潰	浸水	負傷	死亡	行方不明
唯 出	29	1	3	2	—	8	10
森 崎	—	—	—	1	—	—	—
獺 澤	—	—	—	—	2	—	—
矢ノ浦	—	1	1	2	—	—	—
鹽 谷	—	—	—	2	—	—	—
三日市	1	—	3	28	1	—	—
兩 替	—	4	5	17	1	—	—

米崎村 (岩・氣仙) Map No. II, (44)

(濱砂) (脇の澤) 濱砂, 脇ノ澤は何れも皆浸水床上の程度なり, 道が海岸に沿ひ, 海面より 2 米位高く, 家は道路の山手側にある爲に更に大抵 1 米位地盤高く, 浸水區域は狭いけれども浪高は大である。

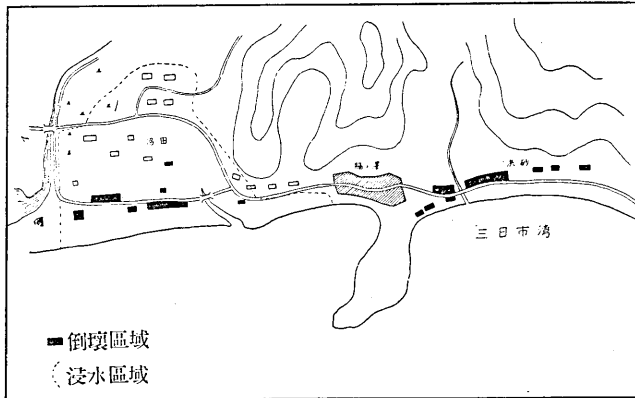
濱砂では護岸工事の破損があるが村民の言では津浪の爲め損したのではないとの事。濱砂より縣道をはなれ, 海岸づたひに米崎を通つて脇ノ澤に出る。米崎では 5.5 米の高さを示してゐる。脇ノ澤は浪高は 4.0 米で, 全然被害は見られない。

脇ノ澤の津浪襲來時刻及び浪高は右の通である。

(沼田) 此處は家屋皆浸水、半壊せるもの甚だ多く附近にて一番の被害地である。波高 4~5 米と

推定す。第 1 回の浪は 3 時 0 分；第 2 回 3 時 15 分；第 3 回 3 時 20 分に襲來せりと云ふ。沼田部落の海岸住宅地よりも高く、浸入せし水は引くことなく所謂引浪なくして濱田川の下流にある沼の方と古川跡の川原崎方面とに押寄せ浪は 2 つに分れて前者は沼を通りて氣仙川に入り後海に入る。故に其の途中で流失物置去りに

	時刻	浪高
第 1 回	3 時 0 分	1.6 米
第 2 回	3 時 15 分	5.0 米
第 3 回	3 時 20 分	1.3 米



第 65 圖

にされてあり。沼田では地震後、津浪の 3 分程前にゴーといふ音高く（終始一様に）沖の方より聞えたり。井戸の變化、光り物なし。

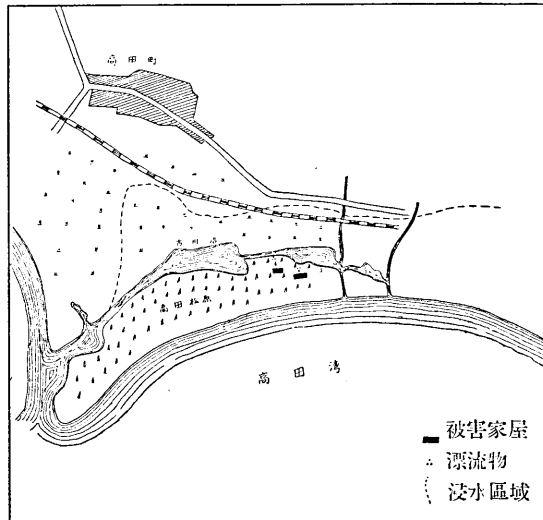
高田町（岩・氣仙）Map No. II, 44

(長砂) 道路の片側浸水せる形跡あるのみで、目立つた事なし。

(高田松原) 松原の東端古川沼の東にある温泉宿は完全に破壊し古川沼に流れ込んだ。後日沼から死體 3 個を發見す。この所での浪高は 4 米。松原に沿ふて西方に進むと寫眞で見る様な松林の松苗の保護柵が可なり長く續いてゐる。この柵はカヤで出来てゐるが柵の柱（柱は約 60 糎毎にある）となつてゐる直徑約 8 糎位の松は根元から折られてゐる所が所々に見られた一般には松樹は幹にやゝ傷あるか、小枝の折れたるとか、小松の折れたる外には大して被害なし。松原の内部に小さな寺があり、本堂も庫裏も可なり津浪の爲めに損害を被り、庫裏の雨戸は中央より 2 つにわられており、壁なども落ちて本堂の床（海面上 2 米位）にも砂を一面に流し込んでゐた。

住職の話では地震後再び寢床に入つたが凡そ 30 分位の後に非常な勢で音をたて松

原を縫ふて進んで来た水は床下を洗ひ去つた、それに驚いて床よりはね起き着物を着換へ帯を結ばんとする時第2回目の流れは雨戸障子を破壊し、火鉢、壘等を押流し、部屋にねてゐた2~3人の者を壘ごとおし流した。自分も流されたが柱につかまり他の人達も同じく怪我がなく助かる事が出来た。3回目に今1度来たがこれは1回目と同じく2回目よりは弱かつた。3回目の津浪が床下を流れ去るのを見



第 66 圖

ると、非常にはげしい勢で流れてゐた様だと。松原のつきる所氣仙川の近くの松原のなかに宿屋（料理屋）がある。この附近の土地は割合に高く海面より3-6米位の様であり、流れはこの家の縁より5寸位高く上つたと云ふ。この所での浪高は矢張り4米あつた。この宿屋の主人の實驗談、「この家は砂地の上にあつたが、地震は非常にはげしかつた、しかし棚の物1つ落ちる事なく、時計は地震の終り頃にゆつくりとまつた、壁もおちなかつた。止つた時計をすぐ動かしそして寢床に就いたが、まだ眠らない内即ち地震後20分位して津浪がやつて来た。第1回目の津浪は床下を流れ去つたが、2回目の水が縁から5寸位上まで来た。そして3回目のものは1回目のものと同じ程度であつた、結局津浪は2~3分おきに3回来た。1回目の津浪が少し引いて地面より5寸位の高さになつた時2回目の津浪が来、2回目のが5寸位引いた時3回目のものが寄せて来た。3回目の津浪が来て全く水が引いて仕舞ふまでの時間は約7分位要した。即ち1回目の津浪が来て第3回目が引いて仕舞ふまで15分を要してゐる。

氣仙村（岩・氣仙）Map No. II, 45

高田松原の西端に氣仙川が流れてゐるが松原の附近では津浪後少しく淺くなつた所もある。松原の對岸縣道に沿ふた所で浪高をはかると1米と出た。津浪はこの氣仙川を溯り松原後方の高田町との間の田にあふれ、又松原をつらぬいて這入つた海水もこ

の田に浸入してゐる。

(長部) 氣仙川を渡つて縣道に沿ふて長部に至ると、港口のコンクリートの防波堤は破壊され又港奥の護岸工事も津浪の爲全く破損してゐる。

港口では浪高 3.0 米あり、浸水区域中のある點では 5 米に達した所もあり海岸から 100 米位入つた所でも 5 米となつてゐる。

住民の流死も相當にあつて又海岸近くの製造所や又民家の流失破損したのも可なり多い。

こゝでは地震後 25 分位してドンと云ふ音を南方に聞きそれより 10 分位して高さ 2 米位海水が引くのにながら気がついた。引く時にはザワザワと云ふ音は聞えず静かに引いた。間もなく津浪がジワジワと浸入して來たとの事である。

長部湊より海岸傳ひに長部白濱に至ると、此所では浪高 3 米であり、白濱には舟大工の假り小屋が岡の下海岸近くにあつたが、津浪の時には水を可なり天井近くまでかぶつたが破れず又流れなかつた。其當時この小屋にゐた 2~3 の人の話では、第 1 回の津浪をかぶつたので目が覺め、水の中を裸で泳いで直ぐ後ろの山の手の方にのがれた。津浪はさしたる勢力はなかつたと。

(双六) 波高は 6 米で、海岸にあつた 2 軒の家が破損した程度でさしたる被害なし。

(要谷) 双六の南隣要谷では海岸近くにあつた家が 6 軒だけ半壊の損害を受けたが死者なし。浪高は矢張り 6 米。

(福伏) 福伏の海岸に出ると津浪による被害の跡全くなし、漁夫の言によれば、たゞ製造場に入れてあつた肥糧が流された位だとの事。浪高 6 米。

宮城縣之部

宮城縣本吉郡

唐桑村 (宮・本吉) Map No. II, 45. 46. 47

大澤部落の北、岩手縣との境は概ね絶壁で調査困難で漸く海岸 2~3 點で浪高を測定することが出来たが5米程度である。

(大澤) 灣奥の兩岸で津浪の高さは E 點で 6.2 米, F 點で 6.7 米であり南側の方が多少高くなつてゐる。

漁夫の言でも津浪當時北側の方が津浪が高く來たとの事である。

又大澤は半島の頸部に當る爲め、津浪に南北兩方の海からせめられた。南側の海岸 G, H でそれぞれ浪高は 5.5 米, 5 米となり。北側の方より 1 米位低くなつてゐる。

村落は主に北海岸と小川に沿ふて發達し南海岸には G 附近に 1 軒あつた位で主に島である。浸水區域は圖に示してあるが、16 軒の家が津浪の爲被害をうけ、5 人の死者を出してゐる。引き浪でさらはれた者はないが、

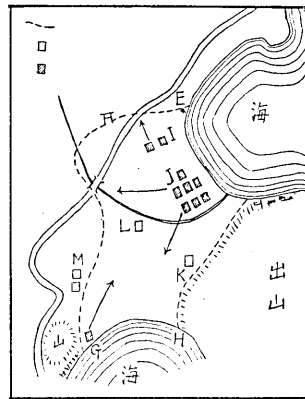
家の流れた方向を矢で示めすと圖の様になり FH 線の間にある家或小川に沿ふた 1 軒の家も無事であつたのは不思議であると村人は云つてゐた。圖の矢の尖端は流れて來た最後の位置を示してゐる北岸より入つた津浪が勢力のあつた事は浪高よりも知られるが、土地の人もこの北より來た浪が南方よりの浪よりも早く浸入して來たと云ふてゐる。

大澤の部落は中央部分の土地が幾分高くなつてゐたので兩側から浸入した水は漸くそこを越した程度で家屋や人畜を海に攫ふまでの勢力は最早持つて居なかつた様である。

(館) 人畜の被害なし。たゞ製造場が 2 軒だけ流失したとの事。

(載鈎) 岩井澤を過ぎ載鈎に來て海岸に出る。小田濱の海岸で津浪を見てゐた村民の談によればジワジワとおして來て 1 回目はひどくなく、2 回目ののが最高で、3 回目は 1 回目と同じ位だつたとの事。

2 回目、3 回目の津浪の浸水區域の境が明かに残つてゐた。2 回目の高さを測つて



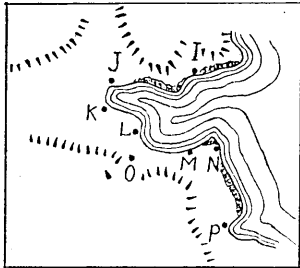
第 67 圖

みると 5.5 米, 3 回目はそれより 1 米低く、4.5 米となつてゐる。

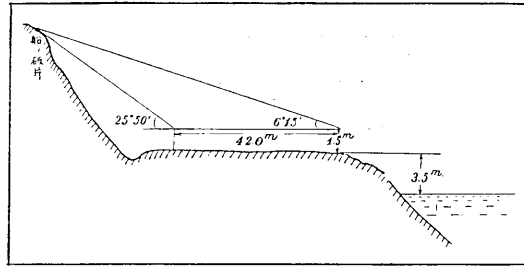
尙地震直後海岸に出て見ると海水が海岸から 30 米も引き, 間もなく第 1 回の津浪が寄せて来たとの事である。

(堂角) 浪高は 6.8 米, 7.1 米である。

(只越) 第 36 圖で見る様に灣奥にある村落であるが灣の北岸は殆んど絶壁をなし



第 68 圖



第 69 圖

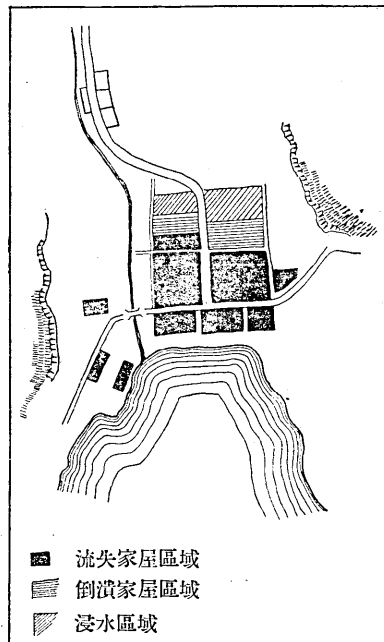
てゐる。灣の入口 I で浪高 7.0 米, 灣奥 J では 6.5 米, K 附近で白濱に通ずる坂路の上り口南側の斜面に船の破片あり, 異状に高き故測量せしに高さ約 10 米ありたり。

灣の南岸は白濱, 出月の 2 部落であるが白濱 (L) の浪高は 5.5 米, 出月 (M, N) 點では夫々 6.5 米, 6 米である。

只越はこの附近での主要な部落であるが津浪の爲め 42 軒だけ破壊され, 内 36 軒は流失し, 残り 6 軒は山手の方に流され倒された。

倒壊せる家屋跡の一番海岸に近き所は奇麗に流失。其の次に海に近き所は家の破片, 柱, 板など一面に山積す。更に其の次の區域にては半壊の家となる。此の半壊家屋は流失物の衝突の爲に半壊となつたと見らるゝもの多し, 大部分は柱の接手より折損す。半壊區域の次は浸水區域にて只越にては此の區分が海岸と並行してよく見られる。

只越は人家が密なる上に上手山に逃げる道が狭く且つ少かつた爲め避難に當り非常な困難を



第 70 圖

極めた跡があり、23人死んでゐる。死者は大體海岸線に並行に走つて逃げやうとした人であるとの事であつた。土地の人の話によると地震後20分で音2回せり、音の間隔は約5分。其後20分にして津浪来る津波は約10分置きに約3回。初め引浪で中の浪最大なりし。音のせる後海面は花火の様に光り海岸通りは明るくなり避難するのに足元が見えた。又別の人に聞きたる談によれば、音の後潮光りあり其のまゝ何にもなかつたが15分位して津浪来る。津浪は走るのと同じ位の早さであつた。又津浪の2~3日前より海濁り居たり。(漁夫の言)

(白濱) 2°30'位の傾斜をした田畠が主に津浪の爲め洗ひさらはれたが道路と海岸との中間に1軒ある民家は床上まで浸水したれども破損せず。浪高は海岸では5.5米位であるが、浸水区域の最高點は7米になつてゐる。Pの所では浪高8.6米であり、1軒屋が流失してゐる。

或る者の話によれば、地震後10分にして大砲様の音2つ聞え、其後20分して津浪来る。津浪は濱鳴りを伴つて来る。巨浪2つまで見たれども其後は判然せず。津浪と判つてから小供等を起して上の路まで逃る時既に足元まで海水が来てゐた。

(高石濱) 浪高は9~10米である。先づ被害はない。

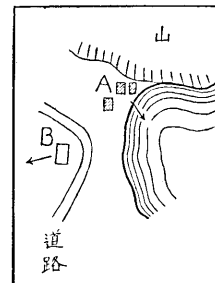
(石濱) 浪高は7米。海岸近くAにあつた3軒の人家は皆浪にさらはれ、6人の人が流死してゐる。村道より奥山手の方にあつた人家Bは津浪の爲め山手の方へおし流された。音3つ聞ゆ。高壓線のスパーク様の青い光沖合を一直線に走る。津浪は大3回。

石濱区内砂子濱で石濱より来る村道は海岸より離れ宿の方に向つてゐるが、村道の通つてゐる田は津浪の爲めに可なりあらされてゐる。海岸に築いた石堤も可なり破壊され田圃には海底の小石が澤山運び込まれたのが見える。

田地は海岸から緩な傾斜してゐるので可なり水は奥まで浸入し、最高點は海岸より200米の所で高さ7米。

この附近にある人家で當時の模様を聞くに「地震後7~8分してドンと云ふ音をきき、21~22分してザワザワと云ふ音と共に津浪がよせて来た。3回来たが2回目が1番高かつた。津浪はひく時が可なり足が早かつた。」

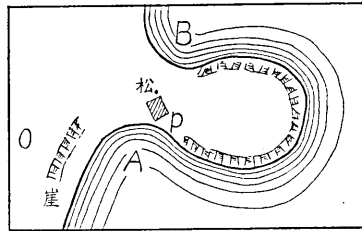
(馬場) この所は外洋に直面してゐるので津浪の勢力も可なり強かつたと思はれ



第71圖

る。海岸の波打際の砂濱は、可成りの大きさを持つて馬蹄形にえぐられ、それが幾つか並んで居り、その上にある2米の高さをもつた崖が津浪の爲め可成りまで破壊されてある。尙この崖を越して崖上にある藁倉をあらしてゐる。浪高の最高點は海岸より70米の處で11.2米である。圖でAより浸入し

崖上の島をあらし岡を越して海Bの方に流れ去つたと土地の人は云つてゐるが調査しても矢張り越した痕跡が明かに認められる。Pの所で浪高は8.1米であり、その1軒屋は跡かたもなく流されており、土地の人に聞いて始めて家があつた跡だなど頷かれた位である。この家に住んでゐた家



第 72 圖

族5人の内4人は家と共に浪に呑まれ、小兒1人が不思議にも家の裏にあつた松の木に引かゝり漸く助かり水が引いてから逃げ出した。尙その小兒は事あまりに急であつたので父母は自分を顧みる暇もなくいづれへかのがれたものと思つてゐたとの事。

(中井) 村道傳ひに中井に来る。海岸に降りてみる。外洋に面してゐるので波もかなり荒く津浪當時の恐しさを思はせる。

浪高は非常に高いが、高所に家があつた爲めに1軒流失したのみで人畜の被害なし。土地の人の話では明治29年のものは今度のより3米も高かつたと言ふ。

浪高は海岸で18米、18.5米となり。浸水區域の最高點では22米を示してゐる。

(瀧濱) 中井の隣であり矢張り押し寄せた津浪の勢力は非常に強く海岸近くではあるが15米も高所にあつた人家2軒は跡かたもなく大洋に洗ひ去られ、僅かに數箇の破片が山手に残てゐた。幸にして人畜には被害がない。浪高は海岸で15米、13米、15米であり、津浪は海岸より300米の奥まで浸入してゐるがこの所の高さは20.5米であつた。

(御崎岬附近) 廣田灣の突端であるが地形圖を見ても明かな様に草木の全くない絶壁であり、従つて痕跡を探すのが甚だ困難であつたが海草を少し隔て、3ヶ所の岩の上で見出し得たので、案内の漁夫に質せば正しく津浪で打上られたものに相違ないと

の事であつた。其浪高は9米である。

(大立) 漁船が1隻津浪の爲め陸上に押上げられてゐる。浪高8米。

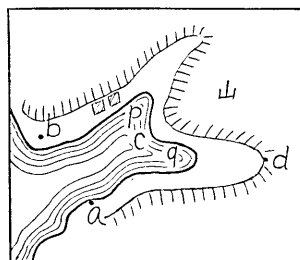
(下の濱) 漁夫によれば平均1.4米立方の磐岩が津浪の爲め19米もおし流されてゐる。この所での浪高矢張り8米。

(長濱) この附近での漁船の港であり、津浪當時港に 16 隻の發動機船がゐたが、その内 13 隻が陸に衝突し或は船と船との衝突の爲め破壊されて仕舞つた。

(津本) 住家は高所にあつた爲め床下に浸水したものがあつた位で人畜共被害はない。崖が非常に津浪の爲めにくづれてゐる。この所での浪高 7 米、海岸近くに住せる土地の人の言では地震後稲光の様な光を 2 度南方に見、大砲の様な音がした。地震後しばらく経て海水が引き、間もなく津浪が来たが 2 時間位の間に 4~5 度押し寄せて来た。最初の浪が大きく、ザクザクと音をたて、来た。

(神止) 高所にあつた爲め全然人家の被害はない。たゞ舟が 3 隻港のなかにゐたのが、内 2 隻だけ津浪の爲めにこはされ、乗つてゐた人が 4~5 人死亡してゐる。

(小鯖) この附近では甚しく被害を蒙つた部落である。20 軒位流失してゐる。小鯖は圖で見るやうに港の奥には小山が突出してその両側の開地に展開してゐる部落であるが北側の奥より南側の奥の方が浸水区域の最高點は高くなつており、従つて被害も港の南寄りの方が大きかつた。勿論北の灣の奥にあつた人家は南側同様に流失してゐるが、灣奥の突出部にあつた民家は高所にあつた 2~3 の家を除いては全部が流失或は



第 73 圖

破壊しその状態惨たるものがある。灣の北岸 b 附近の人家は破損程度のものであるが南岸 a 附近のものは殆ど破壊流失してゐる(尤も b 附近のものは家が大きく頑丈なものが多かつた)。浪高を測つてみると、a では 4.2 米、b では 3.5 米、c では 4.5 米、そして、浸水区域は南奥では海岸より 160 米の所まで及びその所の高さは 5 米、北奥での高さは 4 米である。d 附近の田のなかに家具や壘などの破片が未だに取片附けられずに散ばつてゐるのが見られた。

土地の人の話では「地震の時外に飛び出したが何も光の様なものは見えなかつた。地震後 20 分位してドンと云ふ大砲の様な音を聞きそして 2~3 分してサーと云ふ音と共に水が引いた。港の深さ 1.5 米位の所にゐた舟の底が海底に着いたので舟に寝てゐた人は驚き飛出して山手の方に逃げた。港奥の海岸から 12 米位も水が引いたものと思ふ。水が引いて後 1 分位して水がはげしい勢をもつて押し寄せて来た。最初押し寄せたこの波の爲めに瞬時にして家は恐しい音と共に押し流されて壊されて仕舞つた。その時の恐しさは例へ様がない。水の引くのと同時に自分達は先きを争つて裏山に逃

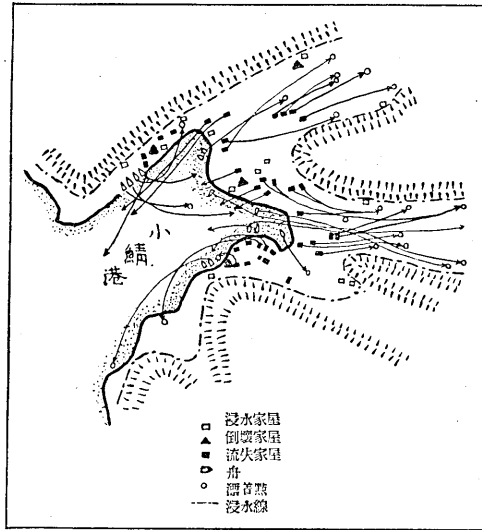
れたが、最初の波が来てから 20 分間位の間、それが未だ引ききらぬ内に幾回も小さい浪が来た。約 2 時間位して平常の高さに復した。又朝の 6 時頃縁の下を浸す位の浪が来たがその後は津浪らしいものは来なかつた。」又他の人の話では「地震後 15~20 分にて火薬爆發の如き音 1 つせり、其後約 15 分にてザーツと音して潮が引けたそして津浪来る。津浪は大きなもの 3 度来たが小さいのは夜があけても未だ来てゐた。」

(鮪立) 小山 1 つ隔てた北隣の部落であり。地形も見掛上小鮪と似てゐるのにこの所は全然被害がないと云つてよい位で、岸に建てられた貧弱な納屋すらも壊れない程度であつた。海岸に 2.5 米程度の護岸がある。流失家屋 1 戸。其の外はたゞ半壊程度の所が 1~2 ケ所見られた位である。前者と比較して眞に不思議に堪

へない。浪高を灣口から灣奥まで測つてみるに 3.0 米、2.9 米、3.0 米で灣口より灣奥に至る間で浪高の變化は先づ見られない。土地の人も津浪はただジワジワと押寄せて来た位でさしたる勢力はなかつたと云つて居た。

(藤濱) 鮪立から海岸傳ひに浪高を計りながら藤濱に来る。その間浪高は 2.2 米、1.9 米、1.7 米、2.7 米藤濱で 3.0 米となつてゐる。この附近では殆んど被害は見られない。たゞ海岸にあつた貧弱な家が津浪の爲めに潰されてゐる位である。

(宿) 灣奥にある爲め被害が多少ある。海岸にあつた人家が 4 軒だけ破壊され流失してゐる。この邊りでの浪高は 3.2 米、3.4 米、3.1 米、3.4 米である。



第 74 圖



第 75 圖

地元の話では宿の港に泊つてゐた發動機船が地震後 20 分位経て船底が海底に着き傾いたので驚き丘に避難した。海岸から 12 米も水が引いたのでらう。海水はザワザワと云ふ音をたて、退いて行つたが間もなく津浪がゴーツと云ふ音をたて、堤防の様な形をして押寄せて來、この浪の爲めに海岸にあつた家が壊され引波に浚はれた。津浪はその後 2~3 回來たが 1 度來た津浪が引き終らない内に次の波が押し寄せて來た。夜明け頃まで常時の海面より 1 米位水位が高まつてゐた。當部落では津浪の前約 20 分西南方に爆音が聞えた。可成り強大な音であつた。又午前 2 時半沖の方に青い光が渦狀に見えた。

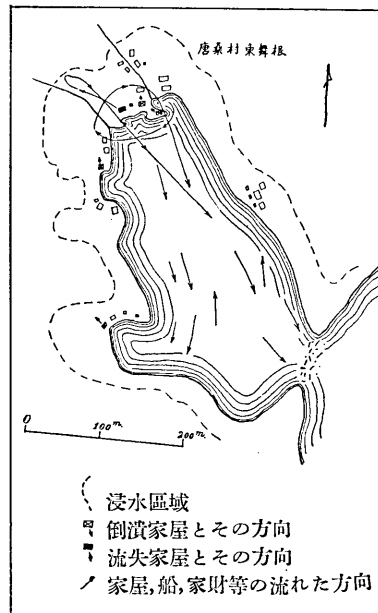
(舞根) 宿より村道づたひに舞根に來る。途中さしたる被害は見られない。たゞ 1 軒岸近くにあつた家が倒された所があつた。舞根は小さい灣奥の低地にある部落であるが半壞家屋が 4 軒あり、倒壞したものが 1 軒見られた。半壞家屋の内 1 軒は、津浪の爲め 2 米位山手の方へ流されたが家の裏にあつた杉柵の爲め危く倒壞するのを免れた。舞根での浪高は平均 3.3 米である。

東舞根に於ては第 1 回の津浪は 3 時 30 分頃で 2.1 米、第 2 回は 4 時 00 分高さ 2.4 米、第 3 回は 4 時 10 分 1.5 米であつた。一時干潮のときよりもずつと潮が引いて海底はブジブジといふ音を立て、ゐる内に(約 30 分間)海水は少し逆卷いて下からジワジワと音を立て、モクモク盛上つて來た。津浪の押寄せる度毎に同様であつた。

(日向貝) 大島瀬戸を舟で廻る。兩岸の所々で浪高を測つたが先づ一様で 1.9 米、鼎浦の入口で 2.0 米、2.1 米位となつてゐる。日向貝で海岸にあつた某家は全然壊されてゐない。この家は明治 29 年の時も壊されてゐなかつたと。この瀬戸の兩海岸では何等崖崩れ等もなく津浪があつた様な痕跡は見當らない。

大島村(宮・本吉) Map. No. II, 46. 49

大島は東側と西側で浪高も又被害の程度も異つてゐる。又浪の押寄せ方も本島の東側と西側とで稍其の趣を異にす。



第 76 圖

東側即ち外洋に面した海岸では一旦海水がズーツと沖の方まで引いて間もなくドウツと逆巻いて打付けて来た浪は 2 回目 3 回目と回を経るに従つて緩かになつた。

西側即ち氣仙沼灣に面した海岸では灣の入口へ可成り大きな浪が寄せて来たが次第に浪の高さが低くなつて、潮の満ちる様に、然し勢強くゴーゴーといふ異様な音を立て、押寄せた。

一般に東海岸の方が浪高も高く従て被害も割合に大きい。たゞ南端に近い両側の海岸は外洋に面してゐるので浪の勢力も同程度であつた様で、浪高も先づ同じ位であり、被害も同程度である。同島北端大島瀬戸の海岸では前述の如く全く被害なく浪高も概して低く 1.9 米であつた。

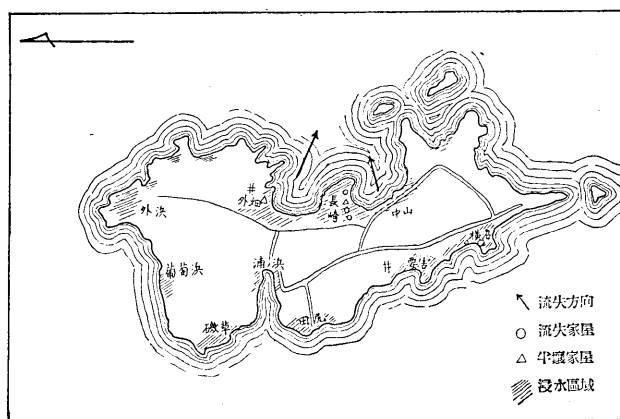
津浪到着時刻及高さは次の通りである。

	第 1 回	第 2 回	第 3 回
廻館(東側)	3 時 00 分 (7.3 米)	3 時 3 分 (7.3 米)	3 時 15 分 (4.5 米)
長崎(東側)	3 時 00 分 (9.0 米)	3 時 3 分 (9.0 米)	3 時 15 分 (6 米)
浦ノ濱(西側)	3 時 30 分 (0.9 米)	3 時 50 分 (1.5 米)	4 時 00 分 (0.6 米)

當村に於ては津浪前 20 分位に北東沖合よりドーンと大砲の様な強き音響を聞いた。是と同時に北東海上に青色の光見へたが形其他は人により一致せず。

津浪の前後に井戸水の濁つたもの 2ヶ所。1 つは東側に 1 つは西側にあり、雨上りの水の様になつたさうである。

津浪の 2~3 日前より毎晩 7~8 時頃遠方にて大砲を打つた様な音がした。然し附近に鐵道工事、石灰岩爆破等の工事があつたので津浪の前兆とは思はれなかつた由。



第 77 圖

當村全體の被害は流失 4 戸、半潰 3 戸、死人村内になし。(出稼、出漁中のもの 15 人)負傷 2 人、道路破損 2000 米、船及小舟 70 隻、床上浸水 8 戸、床下浸水 19 戸、

田畑浸水 85 町歩.

(外濱) 大島北東端の村落である。浪高 1.8 米。全然被害なし。

(廻館) 外濱より海岸に沿ふて廻館に着く。この附近での浪高 4.2~4.4 米と出る。

(長崎) 浪高 5.9 米、海岸近くの家が 3 軒流失してゐるが人畜の被害は全然ない。長崎附近の海岸には小松林があるが、これが津浪の爲め殆んど全部枯れた。

(通島崎) 長崎より船で松崎に行く、この所の浪高 5.2 米、船を尙進めて通島崎に上陸する。この所は外洋に直面してゐるので浪高も可なり高くなつてゐる。全く人家はない。崖壁であるが海底の砂など高く岸壁上に打ちあげられてゐる。壁上の松も枯れてをり、海草などが引掛つてゐる。これ等から浪高を測つてみると 8~10 米となる。

(横沼) 大島の南端龍舞崎、黒崎島を横に見て舵を轉じて西海岸に出で、横沼に上陸する。大島最南端の部落である。海岸には可なり海底の石が津浪の爲めに押し上げられてゐて、津浪の勢力も強かつた様だ。被害の見べきものはない。たゞ海岸近くに(家が高所にある爲め)あつた家が 1 軒山手の方へ押しつぶされてゐる。その所で浪高は 5.9 米、横沼の西入口で 6.4 米あつた。

(要害)(駒形) 横沼の北隣の部落で全然被害なし。駒形をすぎ要害に着く。被害の見べきものなし。此所で浪高は西ノ鼻の南側で 4.6 米、北側で 4.1 米。

土地の人の話では、水が引いて間もなく、白浪を立て、非常な勢で津浪は要害をかすめて氣仙沼の方へ進んで行くのが見られたと。

(浅根)(高井)(田尻) 要害より北上し浅根の海岸を通り高井の海岸での浪高 4.3 米を測る。全然被害は見られない。高井より田尻に行く。此所も被害なし。浪高は 4.3 米。

(浦ノ濱) 氣仙沼灣に開く小さい灣の奥にある部落であるが、灣奥の護岸工事も無事であつた。浪高も低くて 2.4 米。

(大水) 浦ノ濱より大水に行く、この所浪高は 2.0 米。

(磯草) 全然被害なし。浪高は 2.8 米。磯草より磯草崎をかすめて船を大島瀬戸の入口の絶壁に着ける。この所では浪高は 2.1 米となつてゐる。

鹿折村(宮・本吉) Map. No. II, 46

(鶴ヶ浦) 大島瀬戸を越す途中鶴ヶ浦に入る。浦の入口では前述の様に 1.9~2.1 米であるが、奥に入るに従つて浪高は高くなつてゐるのが見られた。灣奥の岸では 4.2 米となり、浸水区域は底地の爲め可なり奥まで(目測による)及び居り海岸より 300~

400 米山手の方に達してゐる。

最初の浪はドツと押寄せて来たが、2 回目からは波が逆巻き崩れ乍ら盛上る様に寄せて来た。鶴ヶ浦は灣深く入込んでゐる爲に先の津浪が未だ引かぬ内に次の津浪が来るので灣内は他部落よりも高くなつた。灣奥の兩岸にあつた家の内、東岸では納屋が 3 軒共流され西岸にあつた人家が 1 軒流され、家族 4 人が流死してゐる。海岸から 100 米以上奥に入つた所の家が 1 軒流されてゐる。この所での浪高は 4.5 米である。一回目の浪は 3.6 米 2 時 40 分、3 米；第 2 回 3 時 00 分、3.6 米；第 3 回 3 時 20 分 2.0~2.5 米。大 3 回、小は十數回襲來す。

津浪前 20 分砲音を聞く、同時に青い光を南方沖に見る。

(梶ヶ浦) 浦の入口の海岸で浪高 1.9 米。この所では奥の方で多少壊された家もあるが先づ被害はないと云つてよい位。

第 1 回 2 時 40 分、2.1 米；第 2 回 3 時 00 分、3.0 米；第 3 回 3 時 20 分、2.5 米なりと云ふ。

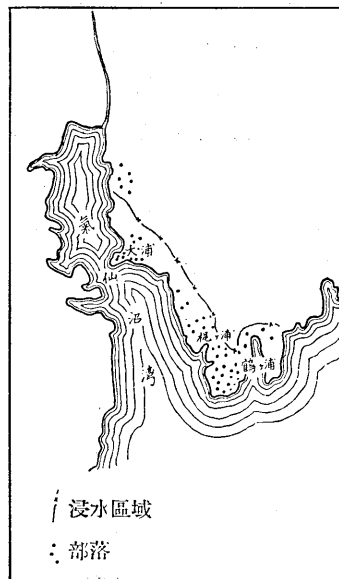
氣仙沼町(宮・本吉) Map No. II, 48

(内ノ脇) 鹿折村梶ヶ浦より船で氣仙沼に行く。途中の兩海岸には全然被害は見られない。浪高も低く 1~2 米と目測する。縣の水産試験場のある内ノ脇には、全然被害はない。浪の力もこの附近へ來ては全く弱つてゐたらしい。浪高も 1 米位と思はれる。土地の人の話では津浪は上潮の様にデワデワと來、引く時もユルユルと引いたさうである。

松岩村(宮・本吉) Map. No. II, 46

(片濱) 被害全くなし。浪高は 1.7 米であつた。

(尾崎) 海面より 5~6 米の高さの所にある部落であり。浪高は 3.5 米であつたので津浪は丘を越える事が出来なかつた。この附近より千岩田部落に至る海岸一體には海苔柴を一面にさしてある。この柴は丈 3 丈もある木の葉を拂ひ枝を適宜に拂ひこ



第 78 圖

これを海底岩磐に1.5米位の穴を穿てそれにかたく差込んだものである。土地の人はこれ等の柴のために津浪の勢力を弱らされて、その爲め尾崎部落は助かつたと云つてゐる。この柴を植ゑない頃は普通の荒の時でも浪が丘を打ち越す事が屢々あつたが、これを植ゑてからは可成りの時化でも浪が宅地にはいる様なことはなくなつたと云ふてゐる。この柴の植ゑてある總面積は200間平方であると。

階上村(宮・本吉) Map. No. II, 46. 49

(臺ノ澤) 部落背面は田圃にて東濱街道に接す、前面は數間の砂濱にて海に臨む。部落の地盤は海面上2.5米位なり。

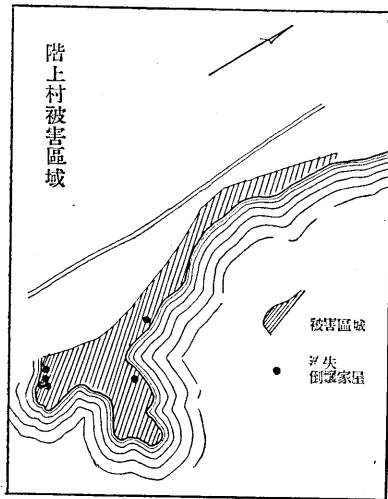
地震後40分にしてガラガラと云ふ音と共に沖合30米程まで潮引く(高さにて1.8米程)、其後直ちに津浪襲來す。浪の高さは4米位であつた。光り物、音響は氣がつかなくなつた。

(川原) 臺ノ澤の直ぐ南に接す。部落の地盤は海面上1.5米位にして海岸に高さ約3米の堤防あり。津浪は此堤防を越さざるが如し。堤防直後の家等大した被害もなし。途中排水の爲堤防の切れて居る所あり、此處では海面上2.5米位は浸水したらしい。

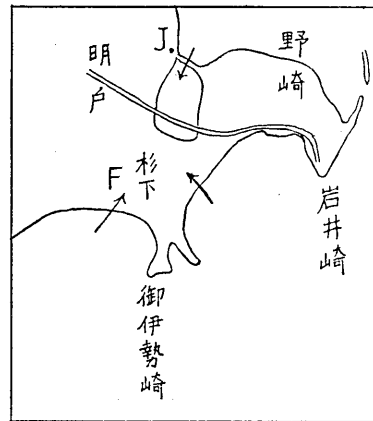
(臺ノ澤) 川原共津浪はジワジワと増水したのらしく浸水したるも破損せる家少なし。

(七半澤) 浪高3.7米。被害なし。

(濱) 浪高4.4米。被害なし。



第 79 圖



第 80 圖

(波路上) 波路上杉ノ下の間の道路の東は岩井崎の丘を除けば、非常に緩起伏の低地(海面上約 4~3 米)であつて一面の麥畑である。字明戸には昔鹽田に用ひられた沼がある。此沼の南部を過ぎて岩井崎まで救済工事による道路が出来た。

此邊一帶風光明眉なり。津浪の爲沼の堤防(高 2.6 米 幅 2.5 米位)約 9 米程決潰石積鹽田中に押し流さる。棧橋を洗ひ流さる。棧橋前の雜貨商方にては床上少々浸水す、海面上高さ 2.8 米 なり。棧橋の元にありし製造工場の半建のもの洗ひ流されて溜池のみ残り。J での浪高は 3.4 米であつた。當所にては津浪の前に大砲様の音を聞きたるものもあり、又熟睡して居つて聞かぬ者もありと云ふ。津浪の前に潮 3~4 米引きて底を現す。其後ジワジワと増水して來た。大浪は前後 3 回にて第 3 回目もの最大にして其後次第に少なくなりしと云ふ。

土地の人は前記破損せし堤防のために杉ノ下は被害をのがれ得たと云つてゐる。

(崎野) 海岸近くにあつた家が 1 軒潰されてゐた。此所では浪高 3.3 米であつた。

(岩井崎) 氣仙沼西灣入口を扼する所にあつて風光明媚なる公園あり。神社及岩井館といふ宿屋及燈竿信號所あり。周圍海岸は斷崖をなし海中暗礁、岩礁多し。燈竿看守を尋ねたるに招魂祭にゆきたりとて不在なりし故、岩井館主人に就きて當時の模様を聴取するに、非常に強い地震が長く 10 分間も揺れた。其後約 15 分にして爆音の様な音が聞へて來た。此處は明治 29 年の津浪にも大丈夫であつたから大丈夫とは思つたが津浪が來るかも知れないと思つて起き出して屋根へ上つて海を見てみると眞黒な潮が押寄せ來た。間もなく近所の部落で半鐘を鳴らして人々に警報を發して居るのが聞へて來た。津浪は 10 分置きに 3 回來たが 3 回目が最大であつた。

岩井館では宿屋稼業の外に海苔の製造をやつて居るが海に置いた海苔の棒なども少しも流失せず。津浪の高さは 3 米であつた。

岩井崎より新道路に出る。道路は南海岸より押し寄せた津浪の爲め破壊され、津浪は此道路を越して田に浸入し此附近での浪高 5.3 米であつた。此の濱から上つた津浪は西側の御伊勢崎、大谷間の濱から浸入した波と合體し旭崎の高所のみを残して一帯に浸入。杉ノ下部落附近の田圃中にまで船を押して來た。旭崎の高所は大きな砂丘であるが津浪は意外な高所まで浸して居た。御伊勢崎附近での浪高は 9.3 米であつた。

(旭崎) 津浪の數日前より井戸水濁り濁渇せりと。旭崎にて土民に聞くに 2 番目の地震の後潮音激しくなりたる故船を見に海岸にゆくと船は最早や流されて了つて居た。津浪は 3~4 回來たが別段に光り物や音は氣付かなかつた。

シヨウガ磯の側から杉ノ下に浸入した津浪は可なりの勢力をもつてゐた様で、3軒の家が押し倒され、或はつぶされてゐる。又海岸より村道を越した所にあつた家を1軒押し流してゐる。海岸近くにたてられてあつた掘立小屋は津浪の爲め壁板を破壊されたきりであるが、この小屋よりも陸地の方、岸より遠い所にたてられた人家は完全に破壊されてゐる。この附近での浪高は7.0~9.1米。

當時に於ける津浪の時刻及び高さは次の通りである。

	第1回浪		第2回浪		第3回浪		大	小
	時刻	高さ	時刻	高さ	時刻	高さ		
和城前濱	2 ^時 30分	8米	2 ^時 40分	5米	3 ^時 10分	3米	3回	8回
波路上濱	2 32	5	2 42	4	3 13	2	3	8
長磯濱	2 32	5	2 42	4	3 15	2	3	8
最知濱	2 33	4	2 45	3	3 16	2	3	8
明戸濱	2 30	7	2 40	5	3 11	3	3	8

又津浪襲來當時の様様に就いて次の回答を得た。

津浪の約20分位前沖の方からゴーツと物凄いな音がした。又浪の押寄せる音はドンドンと地響を立て、15分位續いた。方向SEの沖合、室内で太鼓を打つのを10丁位離れて聞く様であつた。

津浪は潮の満ちて來る様にデワデワと來た。然し早さは急でモクモクと盛上る様に來た。第2回目は折れて來たと思はれるが、第2回目以後はモクモクと同じ様に來た。

波路上地福寺前より明戸濱を一目に眺めたが1回目の浪が岸を打つ時浪が光つて明るくなつた。光るといふよりも明るくなつたと云ひ度い。薄白くなつたのである。本村の漂流物は皆本村内に漂着したれども、和城前濱には大谷村の物多數漂着せり。

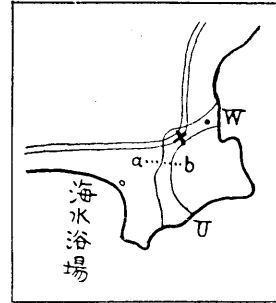
大谷村(宮・本吉) Map. No. II, 50

旭崎より大谷に至る海は綺麗な砂濱にて海水浴場らしく濱の中央に小屋あり、下部をすつかり打抜かれて居る。大谷部落の北入口の少し手前の海岸、斷崖の處、通稱牛コロバンと云ふ所では崖に垂れ下つた松の枝が潮にて枯れたり崖の草が抜かれたりして居る。浪の高さは崖の爲に異狀に高くこの所では6.5米、8米、6.5米となつてゐる。津浪當時この附近は雪が積つてゐたが、津浪の朝、この所を通ると雪の解けてゐた所がある。これは津浪のしぶきの爲めに解けたのだらうとの事。その所より海面までの高さを測ると18.5米となる。大谷川に入る直前の小崖には4.5米位の浪高を測

定せり。

(大谷) この部落は明治 29 年津浪に死者 200 人以上を出し、50 戸の家が流され殆んど全滅した。其後部落の大部分を高所に移轉した。そのため今回の津浪では被害は少なかった。

明治 29 年の時には U の方より浸入した津浪の勢力が強くて、部落を一呑みにして、シヨ-ガ磯の方へ流し去つたが今度の津浪では W 附近にあつた人家 6 軒、工場 3 が W の方より入つた津浪の爲め西の方におし流され破壊されてゐた。そして W より入つた水は縣道を越して、200 米餘り西の方まで浸入してゐる。



第 81 圖

U の方より岡を越して浸入した水の爲めにはあまり荒されて居ない。W 側にあつた小舟などが ab 附近まで流されて止まつてゐた。W 附近での浪高は 6.5 米、U の浪高は 7 米、6.9 米である。

街道の曲り角(地圖の大谷の谷の字の東 300 米)に明治 29 年の津浪記念碑あり。津浪の當時に積雪ありしが記念碑の上部 15 糎程残して水に浸りたる事判明した。其れ程水に浸つても顛覆せずにあつたことは不思議である。然も平らな面が海と並行な方向になつてゐる。

大谷にての聴取したところによると津浪は大 3 回にして 2 回目のもの最大なりし。地震後暫して引潮の音ガラガラと激しく鳴り、それが止んで静かになると共にズズと潮が寄せて來た。津浪は逆卷いては來なかつた。浪が浪に重なる様になつて水嵩が増えて來たとのことである。又沖合の暗礁に津浪の當つた時浪は崩れて光つた。多分夜光蟲であらうと云つて居た。

其他電光より少しく赤き光一瞬間パツと東南方にて光れりと。津浪後に井戸水の濁したものもあつた。

當方よりの照會に對する回答によれば、第 1 回の浪 3 時 4.5 米；第 2 回 3 時 10 分、5.2 米；第 3 回は時間不明、2 回目のよりも小さかつた。浪の主力は第 2 回目で、津浪の來る直前には潮が 3 回とも急にザアザアと川鳴の様に澤山引いた。

津浪襲來の直前普通干潮の數倍も干潮せりと見る内に大浪となり押寄せ來る。海は次第にモクモクと盛上る様に増水して陸地へ上つた。2 回目、3 回目も同様なり。

ドーンと爆發の如き音津浪より 30 分位前に聞ゆ。地震より 5 分位後なり。山の方

でも音せりと云ふ(多分反響ならん)、方向は東微北又は東南沖合であつた。又津浪と共に東南より浪の上にかたまつて青い光がキラキラと押寄せた。井戸水は(津浪後)1週間位濁れた。又他の井戸は津浪後3~4日経て減水して淡白色に濁つた。津浪後蛤蜊多数腐敗した。

(明神崎) 大谷より明神崎に至る。明神崎附近は椿甚だ多し。明神崎では浪の高さは6~7米、Uの側では8米となつており、断崖の縦の小木は枯死してゐた。

明神崎、館鼻崎間は小松林を押倒して津浪浸水し大谷の方へ濫入したらしい。

(館鼻崎) この近くでは浪高は7.7米と出る。Uの側は矢張り外洋に直面してゐる爲だらう浪高が高い。館鼻崎を廻れば大谷の海水浴場がある。この附近での浪高は4.5~4.7米となり急に低くなる。

(日門) 道路は海面より約10米位の高所を走つてゐる。海岸の絶壁の所で浪高を測ると6.2米となつた。道路と海との間に人家1軒あり、其處にて當時の模様を聞取るに大きな地震後間もなくザーツと音して灣の中程まで潮引きたる故これは津浪と思つて小供等と呼聲して逃げ仕度をして居ると津浪が來たので跣足で逃げた。其後の事は判明せぬ。

日門の灣は隣の旭崎より明神崎を含んだ大谷の灣と殆んど同じ形で半圓形をなしてゐるが、大谷の灣に比して、概して浪高は低くなつてゐる。

(前濱) 海岸石濱にて傾斜割合に急なり。流失1戸、浸水數戸。此附近海岸波高4.2米あり。第1回の浪3時05分、第2回3時08分、第3回3時12分にして浪高は通常の満潮より約3米高し。浸水田畑の土の流れ具合より推測するに去る29年の時の浪は押浪も引浪も實に強かりしも今回は押浪強きも之に比して引浪は幾分弱しと云ふ。此の引浪弱き爲と當夜は南の微風ありし爲流失物は沖合に流れず日出迄には大既岸に漂着せり、但し漂着物は何れも同部落なるも幾分北の方へ漂着せりと。

津波の前日午後1時頃南西沖合にて雷聲1回聞ゆ。津浪の前に大きな音が聞えた。當時の空模様は風なくどんよりと曇りて厭味を帶ぶ。雷聲は底鳴の様に聞えた。空は一帶にどんよりと曇り無風鬱々たる日に雷あるときは必ず天變ある事多しと云ふ由なり。津浪前の地震で外へ出たときは空は氣味悪い程澄んで星が異様に輝いてゐた。

津浪後2~3日間は潮の干満に不拘(海水上下し)小さな津浪と思はれる様なのが4~5回あつた。數日前より井戸濁れたりと云ふ。

(赤牛) 津浪の大なるものは1回のみであつた。津浪の前に大きな音響を聞いたが

光り物は見なかつたさうである。

御嶽村(宮・本吉) Map. No. II, 50

(大澤) 大澤は登米澤と共に近在での木材集散地らしく大澤海岸($\frac{1}{50,000}$ の地図の大澤の東)には巨材が打列べてある。海岸は漬物石位のゴロゴロした石多く急傾斜の荒濱で平常でも波は高い。浪の引く度にガラガラと云ふ物凄い音を立てゝゐる、海岸の木材は津浪前からあつたのださうだが1つも流失しなかつたのださうだから津浪の高さは約 6.0 米であらう。

(風越) 風越及登米澤海岸は澤庵石大のゴロ石の荒濱になつてゐて非常な急傾斜で海に入つてゐる。背後は直ちに急な山腹となつてゐる。崖になつてゐる所もある。山腹に所々津浪の痕跡を認める事が出来た。其の高さは大凡 5~8 米である。何分海岸がゴロ石の急傾斜故浪が非常に荒くて海に近寄れないから 0.5 米は誤差があるかも知れない。

(登米澤) 登米澤入口は小さな谷になつてゐて木馬道(木材搬出の爲の橋道)がついてゐる。此處に小杉が拾數本樹の頂だけ残して下枝は皆潮をかぶつて枯れてゐるのがあつた。其れで津浪の高さを測ると 6.8 米。津浪は海岸から 150 米も陸地へ入つたらしい。

小泉村(宮・本吉) Map. No. II. 50. 51

(小泉) 小泉川の海に注ぐ所は長さ約 1 軒の松原になつてゐて、前面は砂濱、背面は沼澤地を狭んで田圃である所、高田松原と同様な地形を爲してゐる。

高田松原と松の年齢は略同様であるが、高田松原が下生皆無であつて町民の好遊歩場であるに反して此處は小松や磯狎れの孫生曾孫生が密生してゐて一寸原生林の趣あり。松原の中は多くは歩かれない。然し津浪は此等下生の十重廿重の防塞を破り押倒して裏の沼や田に押込んでゐる。

津浪の高さを松の枝にかゝる海草や松枝の損傷等から測定して見ると北の方面高く南の方面低く約 2 米程の差がある。

(二十一濱) 小泉の東南約 1 軒、 $\frac{1}{50,000}$ の地図の二十一とあるは廿一濱の誤である。地図で見る様に恰も唐丹村本郷に似た然し幾分本郷より谷が廣い地形を爲して、平坦な谷底を有する長い谷に發達した部落である。津浪は谷に沿つて約 600 米も浸入し、流失 17 戸、死者 15 名を出してゐる。

義足をはめてゐる青年に當時の模様を聞くに、「2 回目の地震と共に東北の方角に

當つて、大砲でも打つた様な重苦しい音がし、間もなくゴーザーザーといふ音と共に第1回目の津浪が来た。此の津浪で一番海に近かつた2~3軒がバリバリ壊される音が聞えた。私は不具であるので早速逃出して(彼の家は橋の袂にあつた)一町も行くとならば第2回目の津浪が来て私の家もすつかり流されて了つた。私は杉の木にしつかりつかまつてゐて流される事を逃れた。此の2回目の浪が一番大きかつた。親爺の死體は此の沖合で上つたが、舎弟のは歌津村の石濱の崎へ行つてゐた」とのことである。光り物は別段に見なかつた由である。

$\frac{1}{50,000}$ の地圖の二十一の十の字の縦棒の下に金比羅様や湯殿山等の碑が5~6建つてゐる所がある。此處で津浪の高さを測るに6.0米あつた。

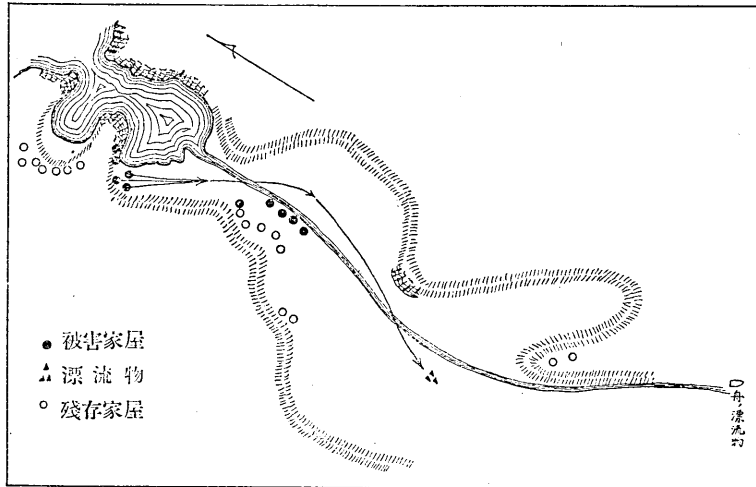
(今朝磯) 家の敷地何れも高く6~8米あり、海岸は斷崖にて小舟の置場にも困る程なれば、津浪にては小舟少し流されたる外には一向に被害なし。海岸の崖にて浪高4.2米。

(藏内) 海岸に沿ひたる小部落、海岸に2米程の護岸あり。浪高4.4米程にて大凡の家は皆浸水せり。

歌津村(宮・本吉) Map. No. II. 51

(港) 附近地勢は非常に細長い谷で入口狭く奥却つて廣し。津浪の勢力比較的緩なりしが如く浸水の割に流失せざる家もあり。

海より衝當りの崖にて浪高3.4米。第1回の浪2時58分、4.0米; 第2回3時00分



第 82 圖

4.8 米; 第3回不明.

津浪襲來の模様は下の方からモクモクと盛上る様に來た. そして近海底の砂を多量に運んで來て浸水區域一面に多い所で厚さ 30 糎位, 少ない所で 7~8 糎平均に砂が置き去りにされた.

同夜は丁度小雪 3 糎位あつたが波が押寄せて來る時に雪を解かして來るのでよくわかつた. 堰き止めてゐた水が水量が増した爲 1 度に堰を崩して押流して來る様に水がモクモクと流れて來る様であつた.

第2回目の大浪によつて家等破壊されて山手に山積されたそして引浪がさらつたもの丈沖へ流失した.

津浪の 20 分位前遠方で大砲でも打つたかと思はれる音が 2 回聞えた. 先の音は強く後のは弱かつたといふ事である. 但し山手の人は明瞭に聞いたさうだが學校では聞かなかつたさうである. 又 2 時 40 分前後に東北方震源地の方向の空がサツと青白くなつたのを見た人がある由.

(田ノ浦) 入江の奥に發達した平坦な廣き谷で一面田圃である. 家は谷の北側稍小高い所にあつたもの多く, 大多數は庭に浸入したる程度なるも田圃と同じ水準で海岸近くにあつた家及納屋は流出せり. 倒壊流失 26 戸, 死人 29 人あつた.

津浪の高さは海岸にて 5.0 米. 海岸より少し内にて 4.5 米であつた.

此處で聞くに津浪は浪の上に浪が重なり合つて水嵩がどんどん増して來るのであると. 津浪の前約 30 分に音が聞えた由. 光り物を見た者もありと云ふ.

(石濱) 海岸は小石の急傾斜の濱で成る程石濱といふ感じがする. 船を修理してゐる老爺に當時の模様を聞くに津浪は最初のが一番大きくドーツと勢よく打付けて來たさうである. 地震後 20 分頃大砲の様な音 2 回聞えたが第 2 番目の地震後忽ち津浪が襲つて來た云々.

當部落の漂流物中下手半分は沖へ運ばれ, 山手にあつた家や他の物は山手へ運ばれてゐた.

津浪の高さは異狀に高く 10.5 米あつた.

(名足) 強い地震後約 25 分, 2 番目の地震の後 1~2 分にして津浪襲來す. 津浪襲來の模様は沖の方からモクモク盛上つて押寄せて來た. 津浪の來る 10 分前にサーチライト狀の青白い光が上に昇つた. 大砲の様な音を聞付けたものもあり. 又言ふに地震直後に薄赤い光見ゆ, 又津浪前に連続的に大きな音がした. 第 2 回目のが一番大き

かつた。1 日程前より井戸減水せり。

海岸に鯨の頭骨砂の中より半分露出して居る。今度の津浪にて洗はれて出たるものなりと。29年の津浪の際にも鯨骨現れたりと言ふ。

津浪の高さは石濱より名足に下る口にて6.2米あつた。

(中山)(馬場) 津浪は大3回で第2回目のものが最大であつた。津浪は潮の花咲かずに黒く盛り上つて押寄せて來た。別段に大砲の様な、或は雷の様な音も聞えなかつた又怪しき光を見たる者もなし。但し當時沖に居つて陸の方で見慣れぬ光があるのを見掛けたる者ありと言ふ。

津浪の高さ中山にて6.0米、中山と馬場の間通稱牛コロガンにて8.2米、馬場にて5.0米。

(泊) 地震後30分程にて大きな音ドーンと轟く、其後20~30分にて津浪襲來す、津浪は2度目のもの最大であつたといふ。

(管ノ濱) 管ノ濱は平坦なる海濱にして道路と海面の高さは餘り差はない、此の道路と濱との間に田圃及製造工場1個あり。

製造工場は周圍に高さ1米位の上に小松を植えたる堤を周らす。製造場で聞いた談によると、

2回目の地震の直後に津浪が來た。其の前に大砲の様な音が1回聞えて來た。海上が津浪の時は赤黄色に光つてゐたといふ。

津浪の高さは小松の堤防を越えた程度で3.2米位であらう。

(伊里前) 伊里前町は伊里前川北岸に沿つて高さ約3.6米の堤防あり、津浪は此の堤防を2ヶ所破損し少々之を越したれども町家の浸水は大した事なし。

橋1ヶ所流れて約200米移動せり。

津浪の高さ宮下の崖にて3.9米、堤防にて4.0米。

(寄木) 地震後14~15分でワラワラと音して津浪が來た。當夜は星の光が特に強い金光りす。津浪前に雷又は大砲の如き音聞えず又別段に光り物をも見た事なし。津浪の回数は大なるもの3回小は無數なり。而して津浪は引潮を以て初まる。井戸の變化せるものなし、舟は大部分沖へ流さる。

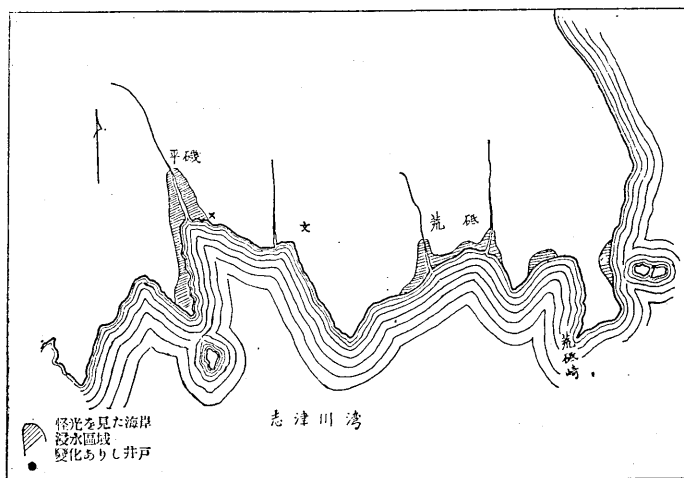
(韭ノ濱) 地震後20~30分頃ゴーツと沖鳴して引潮となり後津浪來る。津浪は第2回目のもの最大にてデワデワと増水して來た。津浪の爲漸く床とスレスレ位に浸入す。高さ2.9米位なり。大砲の様な音を聞いたと言ふものもあり。

菰ノ濱海岸の石垣、スレート石の中にアンモナイトの化石あり。

志津川町(宮・本吉) Map. No. II, 51. 52. 53

(荒戸) 2 度目の地震後見る見る内に津浪襲来す。即ち最初の強震より 40 分後であつた。津浪はジワジワと盛上つて前後 4 回来た。第 2 回目のもの最大で、

ノン(方言水の流れる様)とやつて来た。又或る人の言によれば津浪は最初に潮が満ちて来る時の様に小波がデワデワと来て、それから約 2 米位後方に高さ 2.0~2.5 米位の大浪が小波に乗つて滑べる様に来た。



第 83 圖

これは各回共同様であつたさうである。津浪より 35 分位前に南々東沖合にゴーゴーといふ音(餘り強いととは言へない)聞ゆ。又光り物南方沖に青白く強い光に見え可成り長く光り續く。第 1 回浪 3 時 02 分, 3 米; 第 2 回浪 3 時 26 分, 3.6 米; 第 3 回浪 4 時 05 分, 2.4 米。大なるもの 3 回小 5 回といふ。

(平磯) 津浪は數回 15 分置きに襲来した。初めの津浪は地震後 30~40 分であつたらう。大砲の様な音は別に聞かなかつた。津浪は丁度川の堤防が切れた様に来た。但し最初に引潮あり。平磯にては別段井戸の變化もなし。

南々東の沖に青い光を見た人もあり(午前 2 時 50 分頃)多分夜光虫ならんと云ふ。當所の海は夜光虫が多いと云ふ。

(袖ヶ崎) 別段音は聞かなかつた。浪の崩れるのより外には別段光り物を見なかつた。津浪は 3 度目位までは小さかつた。

(志津川) 志津川は志津川灣の一支灣に沿ふ町であつて。此の支灣は遠淺である。町の海岸には平均水面上約 1.2 米の護岸あり。 $\frac{1}{50,000}$ の地圖の志津川町の町の字の左に 250 米角程の埋立地あり。此の高さ平均水面上 1.4 米程である。更に町外大森

崎に陸地と島を連絡する堤防を作りつゝあり。

津浪は海岸護岸附近にて1.4~1.5米の高さで埋立地は全部浸水し、護岸少々破壊せらる。埋立地に入ると手前のところは少々地盤低く、此處に浸水家屋十數戸あり。津浪の高さは1.3米であつた。家の床上0.5米程浸水したるものあれども一向に破損したる所なく、緩漫に浸水したる様に見ゆ。津浪は此處より川筋を傳つて更に奥に、町外新井田に至る道路の西側田圃中に浸水した。浸水距離海岸より約600米である。津浪は更に海岸通り幅約100米及町の西端の川に沿ひて約500米程奥まで浸水せり。

志津川松原(中ノ瀬町の海岸)にては波高1.7米あり。地震直後青白色の怪光を認めたまつた。地震後約20分大砲の様な音が1回した。其後約20分で津浪襲來す。

戸倉村(宮,本吉) Map No. II, 53. 54

(折立) 折立入口(志津川より)の海岸側の家少々浸水し海岸にある工場は浸水小破した。海岸の堤防所々決潰す。浸水は學校の裏手までであつた。浪の高さ約2.7米であつた。

此處では津浪は夜明までに總計10回來たが最初のもは最大で次第に小さくなつた。但し夜の明け方一寸大きいのが來た。大砲の様な音も聞えず。光り物もなかつた。井戸にも變化なし。

(波傳谷) 波傳谷は松崎の東側及西側にあり。西側にては田圃に少し浸水し、又水戸邊在方面へは600米位浸水し小流中に漁船を押込んだ。浪高2.0米、東側にては浪高少々高く2.8米あり。津浪の前大砲の様な音したる由。津浪は夜明までに6回あり。6回目最大であつたと云つてゐる。津浪の押寄せる時はゴォゴォと音がした。又津浪の水は大層温かであつたと言ふ。又植物には毒なものを含んでゐるのか杉其他の樹が平素鹽水がかゝつても枯れないのに津浪をかぶると枯れると言つてゐた。

(津ノ宮) 津ノ宮海岸は少々急な濱で浪高は3.5米、道路に沿ふ海と反對側にある。家に浸水したものがあつたが一般に地盤は高い。

(瀧濱) 一般に地所低く殊に地圖の瀧の字の所低し、此處にあつた家へは甚しく浸水した。浪高は2.3米。

津ノ宮、瀧濱兩部落共に大砲様の音のみ聞きたりと言へども其他の事は一切不明なり。

(藤濱) 幅狭く且傾斜急なる谷に沿ひたる部落である。津浪は道路(海面より4.5米距離50米)を越して向ひ側の雜貨店に吹付けた。其の高さ海面上5.5米。店にては床

上約0.5米位浸水した。

此所では地震後30分位後に津浪襲来し、たゞき付ける様に來た由。其他は就寝中にて一切不明なり。

(長清水) 稍廣く平坦なる谷に沿ふ部落で津浪の高さ約5.0米あり。道路より海岸に近き所の家は殆んど全滅した。但し部落の一番西北の家は土地高き爲海岸側にある臺所床位まで浸水しただけであつた。

地震後約20~30分頃飛行機の様な音がし出し段々強くなり。終に雷の如き音となつた。そして津浪が襲来した(ドンといふ音だつたと言ふ者もあり)。第1の津浪後約10分位にて第2の大津浪襲来せる由なり。

十三濱村(宮・本吉) Map No. II, 53. 54. 55

(小瀧) 小瀧は海岸から少し離れた部落で昨年11月の火災で部落全焼し、未だに昨日焼けたかの様な惨状を呈してゐる。小瀧濱は小瀧の少々北、地圖に記載してある小徑を海の方へ下つた所である。海岸は約 30° の急傾斜を爲してゐる。

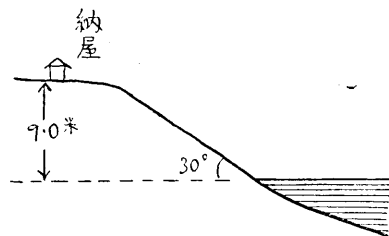
津浪の高さは側壁で7.8米であるけれども小瀧の最奥では9.6米となり納屋2棟は0.3米餘浸水した。

津浪當時の模様を聞くに、海上遠くダイナマイト様の音がして、東南海上に光を見た。津浪は第3回目のものが最大であつた。津浪は奔流の如くに押寄せたといふことである。

(大指) 海岸の小平坦地に密集してゐる部落である。海岸に一番近い家は骨組丈夫で且地所及床が高い爲大した事なく、其の前の老朽家屋(2階建)は階下一面に浸水し階下は殆んど破壊された(但し倒壊するに至らず主に浸水の爲戸、障子、襖を抜かれたのである)。津浪の高さは3.8米であつた。

住民に當時の模様を尋ねるに東南海上に當つて電光(稲光り)があり、後同方向から大砲の様な音が聞えて來た。地震後10分位にて津浪押寄せ浪は何回も來たが回数は不明であるとのことである。

(相川) 追波灣の北側の入口にある小瀧の奥にある部落で地圖記載の小徑の里道に合する所に2階建の家あり、前面及側面に杉木立がある。此の家は1階の天井まで浸水したるも倒壊せず。津浪は此處にて5.5米あつた。



第 84 圖

當時の模様を聞くに地震は上下動が激しくて寢床から起上らうと思つたが起きられなかつた。此の地震後約10分にて揺返しがあつた。其の後10分程するとドンドンとダイナマイトの様な音が連続して2回聞えた。其後20分で津浪が襲來した。浪は3つ重なつて真中のものが最も大きかつた。地震の最中に稲妻の様な光が海上に當つて見えた。津浪は海岸より約300米浸水せり。

(小泊) 津浪は5.0米あつた。

(外濱) 海岸道路に沿つて2.0米位の高さの護岸がある。道路上にやゝ浸水したるかと思はれる位にて被害皆無である。

(長鹽谷) 道路から海岸までは廣い砂浜である。道路は海面より約2.8米の高さにある。此の道路の海と反対側の地盤は0.3米位低くて家屋がある。この家は床下に浸水した。尤も此家のすぐ脇には小川があつた。津浪の高さは海面上3.2米。

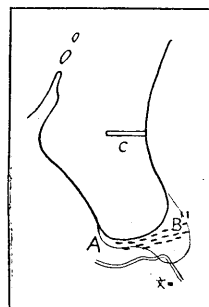
地圖の警報標の印のある所の2階家屋は道路の反対側に流失し階下は破壊流失して2階が1階になつてゐた。これは小事務所風の建物で元來構造が弱かつたらしい。

(月濱) 殆んど浸水せず、津浪は地上に少し上つた位である。浪の高さは2.0~2.5米位である。

宮城縣桃生郡

十五濱村 (宮・桃生) Map No. II, 55. 56. 57

(船越) 船越の部落は海岸にすぐに接近して(10米位汀線より隔るのみ)家屋あり浪高もAの所にて3.7米, Bにて4.0米を測定し得、地上よりの浸水にてはA 1.8米, B 2.5米位なれども家屋の倒壊せるものなく、破損の程度割合に輕少なり、たゞし海岸にては柱のみ残して家の内を洗ひ流されたるものも無きには非ず。家屋一般に柱太く頑丈にして且規模大なるもの多き爲か、又はCの防波堤のありし爲か。A(パノラマ寫眞を撮した所)の家は地盤他の所よりも約0.5米高く海面上(平均水面上)2.0米位あり、家は殆んど破損なし。



第 85 圖

地震直後大砲の如き音を1回聞きたり其後約15分にて津浪襲來せり。金華山の方向に當つて光り物を見たるものあり。津浪の回数其他不明。地震の直前に井戸涸渴したるものあり。第1回3時30分, 2.4米; 第2回3時35分, 3.6米; 第3回3時40分6.0米。

汀より10間の地所に住む者が實際目撃せる實話（船越部落武田榮左衛門（48歳）の談）、「午前3時の強震に起床し焚火をして就寝せずに居りました處戶外にて津浪だといふ2〜3人の聲を耳にし戶外に出

で、汀に立つて沖の方を見た。然るに暗夜なりしも音もなく沖の方にある小島を見れば平素より海面が非常に高く見えたあの黒く高く見えるのが何だらうかと考へてゐる内（1分か30秒位と推定す）に自分の立てる汀の水が沖に向つてガラガラと引いた（ガラガラは砂礫の音）其の引方が生れて見た事のない程沖に引いて行つた。汀の小舟が引かれて行き其の高さが汀の家の屋根よりも高い位に沖

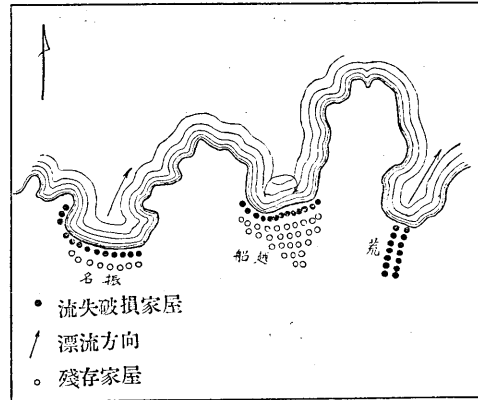
の方に見えたので此は津浪だと感じ飛ぶが如くに家内に入り家族を起した時はもう既に浪が戸を破り家内に入り家族は膝切り水に入つて逃げた。裏山に登つてからガラガラと家屋が壊れて沖に引かれ行く音が實にすさまじい有様であつた。其後約5〜6分置き位に右の様なすさまじい音が繰返した。」

漂流物は沖へ出ず灣内に止る。

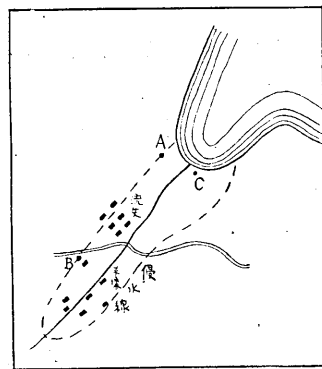
午前3時の地震後約10分ザーツと云ふ風の吹く様な音が聞えた其の後約10分て又前と同様の音が聞えた。其の後、津浪の來襲より5〜6分前に大砲の様なのが唯1度ドウツと聞えた其の方向は東北の方。光り物に就いて見た者なし。

（荒屋敷）唐丹村の本郷式の細長き谷にして谷底の傾斜も緩なり。此處は平素より波荒くして附近の巡航の汽船も寄港する事稀なる由なり、外洋に直面せり。

津浪は海岸より約500米浸入して海岸附近の家（圖の道路より海へ近き家）は礎石のみ残り皆流失し、中程の家は半壊といふ位に破壊す（此の邊にて



第 86 圖



第 87 圖

一番浪の勢強かりし様なり)。全部落28戸中23戸流失、死者90名。山手に近い處にては地震の後大砲様の音を聞きたるものあれども大抵は平素波荒き關係上聞かざりし由なり、津浪は最初のもの最大にして之にて皆やられたる由なり。數人ものものに聞直すに不意に津浪襲來して逃げる間もなかりし故、當時の様子の觀察など思ひもよらずと口を揃へて言へり、唯一度にて山崩に遇ひたる如くに突然に家屋が破壊倒潰したもののらしい。大風の様になつき壊されたとも言ふ。波高A點で11.4米、B點大棒のある所で12米を計る。C點の大岩水面上7.4米あるものは水をかぶり、岩上に砂を残してゐる。

(大須) 部落は全部高さ8米以上の所にあり、住家にて浸水せるものなし。1番海岸に近い所に納屋あり、土間へ少々水つく、其の高さ海面上3.8米なり、被害なし。

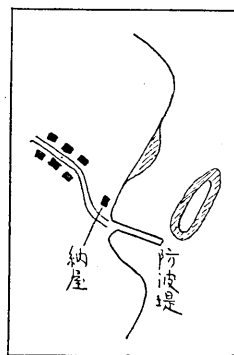
海岸は部落よりの出口を除く外皆斷崖なり、部落の出口はやゝ崖ひくゝ海中に突出して防波堤あり狭く入江を作る。海中暗礁多し。地震後30分にて津浪來る。津浪は第2回目のも最大なりし。津浪は上げ潮の急激なるものと同様に別段逆まいては居ない。但し下の方が少々まくれて押寄せて來た。地震後北の方に當つて大砲の様な音が聞えた。

(羽坂) 第1回浪3時30分、4.0米；第2回浪3時37分、4.0米；第3回浪3時45分、3.6米。大3回、小3回、

津浪の寄せて來る前に潮がドツと引き、それからモクモクと盛上る様に來た。岩の附近は渦巻いて丁度繪本にある鳴戸海峡の潮の様になつた。斯様にして満ちたり干いたりして浪が寄せなくなつても渦巻をしてゐた。家屋の流失なし。舟のさらはれたるものは灣の中程から沖の方を漂つてゐた。地震後大砲の様な音がした。これは津浪より15分位前で方向は南方沖合、強さは野砲の空砲位であつた。其他空模様常と變りてどんよりし、日入、月入が至つてボンヤリして居た。又海水の流れが南の沖に非常に早かつた。

(桑ノ濱) 地震後約10分にて津浪來る。地震直後に海上に火事の様な火を見た。

地勢。部落の最低地盤は海面上2米位なれども浸水家屋なく、寫真中央の家の前の井戸まで潮上りしのみ。浪高2.3米。灣内に臨むを以て浪平素より靜かにして津浪も亦低し。



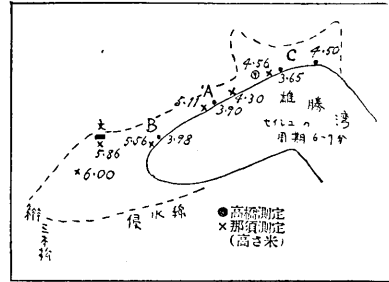
第 88 圖

(分^{ワキ}濱) 津浪の高さ約 1.8 米, 海岸に近き所少々浸水したる程度, 多くの人は津浪も知らざる如し. 但し地震前より井戸の水全部濁れりと言ふ.

(立濱)(大濱) 何れも雄勝灣に臨む小部落にして地盤水面上 2.0 米内外にして浸水高も亦 2.0 米なるを以て海岸に一番近き納屋等に少しく浸水したる程度, 被害なし.

(雄勝) 雄勝は雄勝灣の最奥部の海岸に發達したる部落にして全戸數約 400. 背後は直ちに山地となる. 但し灣奥に平坦なる畑地海より約 1 軒位發達せり.

被害程度は B の邊最も甚しく A, C と順に被害減少せり, A 及 B の邊にては倒壊流失せるもの多く AC にては道路海岸側の方に流失せるもの多く道路の反対側(山側)は半壊乃至浸水程度なり. 流失, 倒壊せるは平家建の小家屋多き様に思はる (2 階建は割合に丈夫).



第 89 圖

郵便局, 役場附近は家の地盤道路面より高くなつて居り, 浸水程度も比較的輕微であり家屋の被害なし.

A の所に(寫眞)前(道路を隔て)及左右の家は倒壊したり流失したりしたのに倒壊もせず残在して居る家があつた. 但し家内は柱及壁のみ残して建具等大部分流失, 家は山手へ 20~25 糶押し付けられて移動, 椽側床下の柱挫折して居た. 浸水した高さは異狀に高く座敷の鴨居上まで(寫眞臺所の入口上の欄間の明障子に浸水の跡あり), 地上約 2.6 米. こんなに高くまで浸水して倒壊せぬのは珍らしい. 家が柱貫など太くて頑丈で重かつた爲めと裏が直に山であつた爲水の流力が弱かつた爲か. 一般に見て雄勝は浸水の高さが大でも倒壊しない家が多い.

地震後大砲の如き音 2 回聞いた人あり, 津浪襲來の時刻は 3 時 12 分で第 1 回の浪が最大であつたと言ふ. 家は皆第 1 回目の押浪にて山手に押寄せられ倒壊し其後の引浪にて沖へ流失したのだと言ふ. 津浪の來方は今度のは床下から盛上げて來た. 明治 29 年のものは雨戸へ打付けて來て雨戸を脱したが今度のは雨戸は其儘で床板がはがれて來たと言ふ. 5~7 分置きに津浪が來た由, 大 3 回.

石巻町(宮・桃生) Map No. II, 64.

當町は地震のため土藏の壁落したものが數戸あつた程度で外觀上に表はれた被害はない.

津浪の翌日石巻警察署を訪れたるも署員の大半被害地に赴きたるためか情况等知る由もなかつたが石巻町の津浪被害は全然無かつたことだけは知り得た。

北上川河口の改修事務所の検潮儀は3時15分頃0.10米の緩昇で始まる津浪の襲來を記してゐた。

尙ほ附記して置くのはこの改修は鹿又附近の灌漑排水のため行はれてゐることである。津浪のあつた時刻に大砲のやうな音を聞いたといふ者もある。

宮城縣牡鹿郡

女川町(宮・牡鹿) Map No. II, 57, 58.

(指) 被害は少ない、浸水高海面上2.5米位なり。第1浪3時05分、1.8米;第2浪3時20分、2.1米;第3浪3時35分、1.5米。

(御前) 御前灣の奥の部落である海岸線に並行した道路を越して津浪が田圃を濕してゐる。棧橋は半壊、浪の高さは2.5米位に思はれた。

第1回浪は3時05分に來り高さ1.8米、第2回目は其後15分後3時20分に襲來す、高さ2.1米、最大なり。其後又15分して第3回浪來る1.5米、大3回、小20回程。3時00分頃40米も潮が引いた、すると潮の滿ちて來る様にヂワヂワと津浪が來た。各回共同様。

津浪の1週間前から井戸水濁り且つ半分位に減少した。

(桐ヶ崎) 部落全部浸水、浪高2米位なるも被害なし。

(石濱) 女川附近にて一番被害多し、スレート屋根1、藁屋1戸倒壊せり。浸水高地上1.5米。海面よりは3米。海面より割合に急傾斜にて家の敷地に到る、護岸なし。家は浮いて漂流せり、壁の下部洗はれて小前をあらはせるもの多し。家屋は殆んど全部床上以上浸水せり。

(宮ヶ崎) 宮ヶ崎部落はスレート石塊をつみたる護岸工事あり、護岸工事破損せる所あるも大したことなし、石濱に至るまで道路の破損殆んどなし。

(女川) 此の町を訪れたのは津浪の翌日4日の朝であつた。町の人々は家財道具の運搬や掃除でごつた返してゐた。家々の壁や襖の水浸しになつたのが町の到るところに見受けられた。この濱での津浪の高さは2米位に思はれる。女川灣に沿つた女川の海岸一帯は比較的緩漫に津浪が押寄せたと云ふ話であるが海岸向のガラス障子などは水浸しになつただけでガラスも壊れず丁度大水に見舞はれた様で破壊されたものは僅かであつた。當時避難民や見舞客等入亂れて町を行き交はして非常に混雜してゐた、

附近の舟は津浪のため被害を受けしため舟の數少く、定期船もこの混雜では何時出るか全く當もなく待たなければならぬので舟で調査することは到底望まれなかつた。神社前の通は土盤も低く兩側の民家へは泥土が流入して慘澹たる有様を呈し道路も泥濘にて歩き憎い。魚市場の横の溝には船が流れて来て丁度船渠にでも入つた様に止つてゐた。郵便局は特に地盤低く土間上數十糎浸水した模様である。

津浪直後に此の町の調査をした時にはあの混雜のため土地の人々の話を聴取ることが出来なかつた、2回目にこの町を訪れたとき某校の生徒に當時の模様を話して貰ふことが出来た、それによると津浪は大きなもの3~4回で何れも高さ3米位。小さいものは無數あつたさうである。

又他の人によると初め3回強くその2番目に來たものが最大であつた。そして浪の週期は初は8~10分、後になると浪の高さも減じ週期は10~15分位になつた。

(高白) 當部落では2.0米位の高さに水が押寄せたらしい。

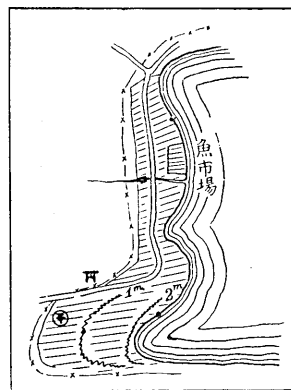
(江ノ島) 本島(江島)の海岸は急傾斜を爲し家屋は島の中腹にある。浸水区域も極小部分で家屋の流失はなし、併し海岸に繋いであつた舟十數隻流された。

第1回浪 2時50分、6.0米；第2浪 3時10分、3.0米；第3浪 3時30分、1.5米。

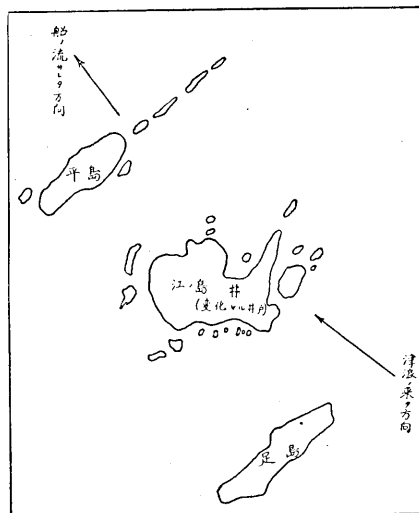
大きなものは3回限りであつた。或人は4回ありたりとも云ふ。

津浪は潮の満ちるが如くジワジワと來た。通常の潮汐と異なる所を挙げれば其のジワジワと來る中に島のウネのやうな小さい波が幾つもあつたと云ふ。而して津浪の引く時は急激だつたと云ふ。各回共同様であつた。

津浪の20~30分位前に大砲の如き音東東南の方向に聞えた。夫はボンとボンヤリシ



第 90 圖



第 91 圖

た音であつた。又2時30分頃南東東海上に廣く赤くボーツと大きく光が見えた。津浪數日後に井戸濁る。前日(2日午後6時頃)遠くて大砲を打つ如き音聞えたりと云ふ。墓石地震の爲移動す。

(出島) 地震後30分位にて津浪襲來す。津浪は大なるもの15分置きに3回、其の内最大な浪の高さは海面より2.2米、夜明6時頃やゝ大なるもの1回ありたり。光、音等特種なる現象を見聞したることなし。津浪は急激に潮の上げて來るときのやうであつた。

大原村(宮・牡鹿) Map No. II, 59. 60. 61. 62

(寄磯)(前網) 急峻なる階段狀地形に寄る部落。海岸に2.5米位の護岸あり。家屋には殆んど浸水せず。浪高多分2.6米位ならんと推測す。

(鮫ノ浦) 鮫ノ浦灣の小支灣に發達せる細谷にある部落。津浪の高さ4.8米程にて谷に沿ひ田圃へ500米浸入す。引潮にて西側の住宅地を掃へりと云ふ。

(大谷川) 谷川の直北にある細長き谷にある部落。海岸に高さ水面上約4米幅上端3米程の堤防あり内側は田圃にして北に偏しやゝ高き地盤に住宅あり、堤防中央部全潰。田圃へ約500米浸水せり。津浪の高さ5.0米なれども家屋は大低床下浸水程度なり。津浪は地震後30~40分で襲來し大3回といふ。

(谷川) 鮫ノ浦灣の奥の平地に發達した部落で、海岸は砂濱を爲し住宅地との間に堤防あり。高さ水面上約3米、幅は上部で3米程ある。其の内側は一面田圃で一部に住家が1ヶ所に構比してゐる。津浪は住宅の海岸寄りの約3分の2を掃失し、北側の田圃中には海岸より約500米程も浸入し小舟を田圃中に置去りにしてゐる。堤防は數ヶ所決潰流失した。Aの位置にある渥美といふ家は周圍の家皆倒壊して流失したにも不拘小破したるしみに殘存してゐる。構造頑丈なる爲か、但し家の前の物置などは皆流失した。(Bの位置にて矢の方向を向きて取りたる寫真に見るべし。)

當の渥美氏其他數人に就き聞くに津浪は地震後約30分に來り前後約6~7回襲來したが、第2回目のものが最大であつた。(第1回目が最大であつたとも言ふ)津浪の直前東の方に當つて大砲の如き音2回せる由。浪高は第3回目よりはずつと小さくなつたと云ふ。渥美氏の家で浸水高を測るに5.0米(屋根裏2階の床まで)津浪の週期は約10分。逆卷いて水鐵砲の如く來れりと。

(小淵) 網地嶋に向つて開いた細長い淺い灣の奥の小平地にある部落で構への割合に多きな家が多い。浸水高は此の附近としては非常に高く、灣の突當りで2.9米の所

に浸水の線をくつきり残して土壁を有する物置があつた。此線は地上よりは約1米である。此の物置を初め他の住宅の床上まで浸水したものの数戸あるも何れも損せず。救済金を頂き勿體ない様な気がするなど云つてゐるものもある。浸水は割合に緩であつたらしい。土民に尋ねると地震後40~50分で海水200米余りも引けた(海浅く深さにて2尋位)其後に津浪が来た。津浪は水の頂上が滑る様に早く来るのであると言ふ。津浪の回数は6~7回で3回目だか4回目だか最大であつた。6時頃となつて大きなのが1回来た。大砲の如き音を地震後15分頃聞いたものあり。

(大原) 郵便局前の食品店にて聞くに津浪は都合3回来たが2回目のものが最大であつたと云ふ。津浪の高さは2.1米乃至2.3米にして護岸を少しく越して海岸側の家では床下に浸水するかせぬかの程度であつた。

(給分) 大原に殆ど同様なも道路の海の方の側の特に低いところに家2~3軒あり、こゝで床上0.6米まで浸水した。但破損した所はない。浪高は2.1米であつた。

鮎川村(宮・牡鹿) Map No. II, 62. 63

(山鳥) 急峻な崖に寄り海面から20米の高さに渡船切符賣場がある。海岸にはコンクリートの高さ2米程の棧橋があつた。其の袂の崖に植ゑられた小松に浪に洗はれた痕があつた。然し津浪の高さは詳かではないが多分3.5米位であつたらう。

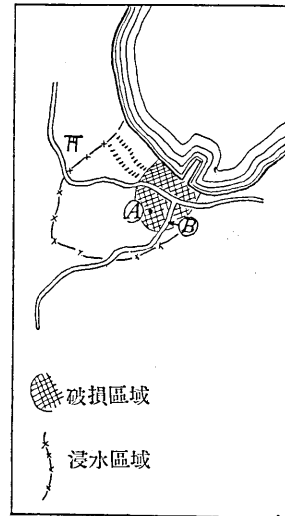
渡船の船の船夫に尋ねたるも當時津浪を知らずに寝てゐた由なり。

(鮎川) 海岸には海面上2.5~2.8米程の岩壁あり、其の中央部より稍西寄りに港川の口がある。津浪の高さは棧橋附近で3.2米(此處は異状に高し)、港川河口で2.3米。

Aの捕鯨會社の工場は浸水して半壊、Bの橋の袂の家は地盤低く且河に接せる爲浸水多く床に上る。其他には浸水家屋なし。(第93圖参照)

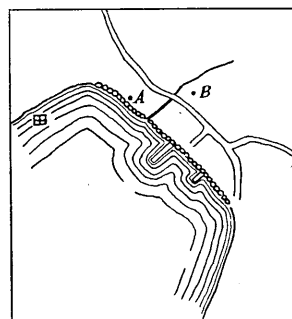
土地の者の言によると、地震後約40分にして津浪襲來す。初め引浪にて次に押寄せて來る。夜明までに7~8回襲來す。3回目のもの最大なりと云ふ。

地震後20分程して大砲の様な雷の様な音を聞いた。方向東南海上。光り物は見ざりし由。



第 93 圖

(金華山) 山鳥よりの船のつく所にコンクリートの
 棧橋あり。其の袂に渡船事務所がある。津浪は事務所
 前の道路まで上つたと云ふ。其の高さを測るに水面上
 3.6 米である。津浪は數回襲來せる由なれども回数、
 當時の模様等不明である。金華山燈臺は海面上高さ 30
 米程の斷崖上にあり。



第 93 圖

燈臺看守に就き當時の模様を聞くに 2 時 30 分強震
 があつた。燈臺の廻轉装置の水銀溢出して、レンズ廻
 轉不能となる。朝になつて無電により津浪のあつた事

を知つたが當時當番で起きて居た人達は津浪らしい物も認めず。又別に特別な音や光
 も認めなかつた。燈臺下の斷崖は平素でも非常に波が荒いから判らなかつたのであら
 うと云つて居た。燈臺下の斷崖を海に下つて見たが何等津波の痕らしいものもなかつ
 た。

荻濱村 (宮・牡鹿) Map No. II, 63. 64

(牧の濱) 午前 8 時 1 回高さ 1.5 米位の浪襲來せるを認めただけである。本部落錦
 木トクヨの井戸は津浪前 3~4 日より濁り次第に甚だしくなつたが、今までの白濁(蛤
 汁のような)が津浪後急に赤味を帯びた泥水になり、5~6 日飲用出来なかつた。

(小積) 地震後 20 分頃沖の方で大砲を打つた様な音がした、津浪は 5 時頃になつ
 て襲來したが最初のもの一番大きく 3 回位やつて來た。別段に光り物には氣付かなか
 つたと云ふ。浪高は灣の最奥にて 2.5 米、小積の小といふ字の所にて 2.8 米、住宅に少
 しく浸水した程度である。午前 8 時頃にも襲來す。浪高不明なるも濱より 6.0 米(?)
 高き地に上る。午前 5 時或は 8 時といふと最初の津浪とすれば襲來の時間は餘りに
 遅過ぎると思ふ、恐らくこれは後に來た浪を見たのであらう。

(荻濱) 海岸通り、川筋に沿ふ家 10 戸程床上 0.3 米程浸水した。津浪は夜明になつ
 てから襲來し大きなものでは前後 3 回、2 回目が最大であつたと云ふ。浪高 1.8 米位。

(小竹) 第 1 浪 2 時 40 分、1.2 米、第 2 浪 3 時 40 分、1.8 米で大 2 回小 1 回
 であつたといふ。

津浪は潮の満ちる様にヂワヂワ來た。各回共同様の來方であつた。但し其度毎に部
 落西南の灣口(水深普通干潮にて 1 米位、口廣約 330 米)で浪が崩れてザワザワ音
 がした。津浪より 30 分位前に爆音が北東方に聞えた。石油タンクの爆發の様な音で

あつた。

仙臺市（宮・）

仙臺市にては地震の爲に電燈は消えなかつた。地震は皆屋外に飛出す程強かつた。

但し時計は止つたのもあり止らぬのもあつた。柵の物落ちた。地震終ると共に石巻方面に當つて光り物あり。色は光輝ある黄色にて少しく緑がいつてゐた。持続時間は1~2秒、形は横に帯状を爲す。又一般に音は聞かなかつたやうである。

宮城縣宮城郡

松島灣 灣内何等の異状なく津浪當時の様相等知る由もなし。

鹽釜町（宮・宮城） Map No. III, 1

鹽釜附近では表によつても知られる通り浪の高さは大體2米内外である。松島灣に面した海岸は殊に低く、別項検潮記録によれば大體0.3米程度であつて土地の人々でも津浪の襲來に氣付いた人は殆ど無かつたのである。太平洋又は石巻灣に面して浪の高さが2米内外に及んだ部落でも、津浪の來襲を認めた人は僅少であつて住家の被害は勿論漁船の損傷も見られないのである。海岸は大體40~50米の間砂濱の緩傾斜になつて居り、その後に砂丘があるので、2米程度の高さの浪では到底それより内陸に侵入することは出来なかつたであらうと考へられる。

七ヶ濱村（宮・宮城） Map No. III, 1

（菖蒲田濱）（松ヶ濱） この海岸では3米位の岸壁が築いてあるので、之を越えて部落内に侵入するには恐らく更に數米高い浪でなければならなかつたであらう。比較的多く浸水したと思はれるのは、菖蒲田濱より花淵濱に至る間の海濱の一部で、此處では砂丘らしきものはなく、波打際から100米位の間砂礫の濱でその傾斜も緩である。此處では漂流物の散亂状態から推して海濱から70~80米は浸水したであらうと思はれるが、附近に住家がなく確かめることは出来なかつた。

七郷村（宮・宮城） Map No. III, 1

（深沼） 深沼は仙臺市の東南約2里の太平洋岸で夏は海水浴場となる。此處に於ける津浪の高さは前表の如く2米餘であつた。こゝでは津浪の來襲を認めた人々も少ない。時刻は午前3時頃と言ひ或は3時過ぎと言ふが3時過ぎといふのが多い。波打際から約100米の緩傾斜の砂濱を隔て、高さ5~6米の砂丘があり、住家はその内側に建てられてゐるので勿論被害はなかつた。砂濱に海水浴用のよしす張の小屋の骨組だけが立つてゐるが、之についても殆ど損傷らしきものを認め得なかつた。海水浴

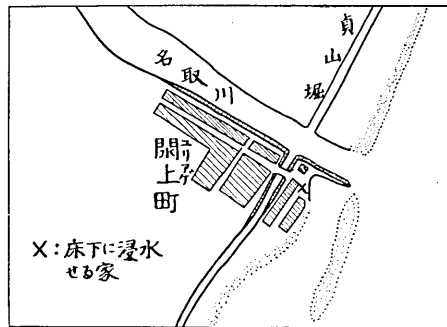
の浴客用の便所であるよしず張りの小屋では内部が幾分か砂に埋められてゐた。被害といへばこの位のものである。漁船の流失等のこともなかつたやうである。

來襲した津浪は數回といふ者もあり、3回又は4回と明瞭に言ふ人もあるが、其等の中のある者の如く“逃げてしまつて解らなかつた”といふのがむしろ真相に近いのではなかつたかと思はれる。併したゞ1回のみではなかつたであらうとは推定出来る。

宮城縣名取郡

東多賀村(宮・名取) Map No. III, 1

(關上) 東北本線陸前中田驛から約8軒、名取川の河口に關上の町がある。此處では津浪は3月3日の午前3時過ぎに來襲したといふことである。浪の高さは約2米と推定出来る。それは、名取川の河岸は南岸に於て石の岸壁が築かれて居りその高さは川の水面上約2米であり、津浪はこの川岸から溢れん許りの有様で押寄せたといふことから推定出来るのである。當時河岸に繋留してあつた發動機船は數丁の上流まで押流されたと言ふことである。南岸に立つて北側の對岸を望めば、岸壁を築いてないその岸は處々崩壊してゐる様子が見える。



第 94 圖

家屋の被害は殆どないのであるが、若し強いて挙げるとすれば、圖に示す様に河口の砂洲に抱かれた入江の奥部に面してゐる春日館といふ旅館の床下に多少浸水した。併しそれも實際水位がそれだけ昇つたといふよりは寧ろ、泡沫の尖端に洗はれたといふ程度に過ぎない様である。

津浪の勢力は名取川の存在する爲めに陸上の構造物に被害を及ぼす程度には至らなかつた様にも考へられる。

宮城縣亶理郡

荒濱村(宮・亶理) Map No. III, 1

(荒濱) 常盤線亶理驛の東約8軒、阿武隅川の河口に位する荒濱村に於ける地形は前述關上に於けるものに甚だ似たものがある。阿武隅川に沿うては高さ約4米の土堤が築かれて居り、河口には砂洲に抱かれた沼がある。たゞ、河岸に大小の松樹の繁茂

してゐる點が少しく異り、村落も岸上に於けるよりは海岸から距つてゐる。津浪の痕跡としては、河原の一部にある倭松の枝に漂流物の懸つたもの及び堤防の一部が崩壊してその跡に堤の土とは全く異なる砂が堆積してゐること（寫眞参照）などにより津浪の高さは2米足らずと推定される。

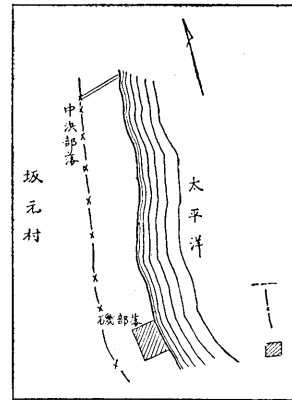
津浪の來襲した時刻についてははつきりしない、午前の3時過ぎとも3時半とも言はれてゐる。又、朝8時頃にも小さな津浪が來たと言ふ者もある。この後のことは多くの檢潮記録にもあらはれてゐる様に海面の振動がかなり後までも繼續してゐたことを示すものであらう。

坂元村（宮・亙理）Map No. III, 2

坂元村は宮城縣内で太平洋岸に面する南端の村であり、海岸に沿うて、中濱、磯濱の2部落がある。この村は、鹽釜以南に於て津浪の被害最も激しかつたところである。その1つの理由として、海岸に堤防乃至砂丘の無かつたことが擧げられる。

（中濱）この海岸に於いては、波打際から約100米の平坦な砂濱を経て防潮林がある（寫眞参照）。この防潮林の外側（海の側）に數軒の漁家があつて、これは勿論海水に浸されたのであつたが、特に破損はしてゐない様であつた。海水は防潮林を浸して、その内側の堤防迄到達した。此處に於ける津浪の高さは別表にある通り3米を越えてゐる。海岸の砂地に破船が埋められてゐるのが寫眞にも見える。

（磯濱）磯濱部落は前述の如く鹽釜以南に於て被害の最も甚だしき處である。倒潰家屋11、半潰傾斜又は移動せるもの數棟、漁船は盡く破壊せられ、筆者の訪れた3月29日に數隻の船の修理成つて津浪後初めて出漁したといふことであつた。此處で津浪の害の甚しかつた理由の1は、屢々繰返した様に防浪施設の無い海岸に接近して住家が建てられてゐたことである。勿論津浪の高さも比較的他の場所よりは高かつたので



第 95 圖

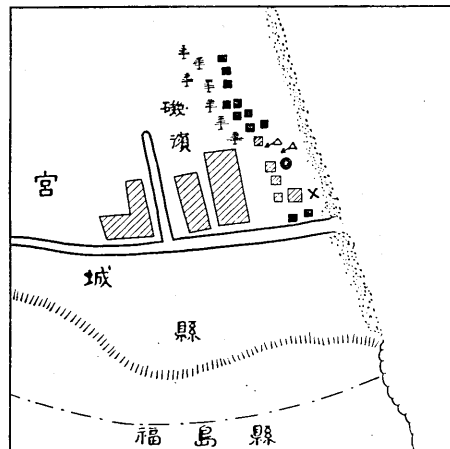
あるが、それだけ前述の如き状況は津浪の害力を遠うさせるのに一層都合のよい條件となつてゐる。下圖は磯濱部落に於ける倒潰家屋の分布の略圖である。これで見るとやうに部落の中でもことに海岸に近く津浪の防禦物の殆どない北部に於いて6棟の家屋が全く破壊されてゐる。他に南部の小川に沿ふた所で2棟、それ等の中間で3棟とな

つてゐる。中間部に於て倒潰家屋の少なかつたことの理由として次のやうな事實が認められる。その1は中間部では住家が直接に海に面せず。數戸の網小屋があり、是等の小屋は土臺との緊結が比較的ルーズであつた爲めに何れも30~40 程位陸方に移動してゐる。その爲めに津浪の勢力は幾分減殺されたであらうと思はれる。その2は、この附近(圖の×の位置)に堤防を築く爲の砂利が積んであつた。その高さが約2 米で津浪の時は海水がこの砂利の堆積物の上を漸く越す程度であつたと言はれて居りそのすぐ後の家は何の損傷を被つてないのでこの砂利層は津浪を防ぐのに充分役立つたと認められるのである。

津浪は激しいものは前後3 回來襲し、第1 回目は午前3 時過ぎに來たといふことである。又、全潰家11 棟の中1 棟は最初の津浪で倒され、他の10 棟は2 回目の浪で倒潰したといふことである。

その倒れ方も巨浪が衝突してその場に倒されたといふのでなく、家がそのまま流されて、松林(防潮林)にたゞきつけられて潰れたものゝやうである。

この部落での人畜の被害は、婦人1 名流れてきた舟に挟まれて胸部に打撲傷を負うたものと、馬が厩舎と共に流されて防潮林に打ちつけられて死んだのと2 件のみである。



■ 倒潰家屋 ● 傾斜せる家
 ▨ 部落(被害なき部分) △ 移動せる小屋(矢の方向に)
 松林 防潮林 × 砂利の堆積

第 96 圖

福島縣之部

福島縣相馬郡

福田村(福・相馬) Map No. III, 2

(埜濱) 坂元村磯濱の部落から南へ丘を越えると、もはや福島縣に入る。此處から更に南方原釜港に至るまでは磯濱に於けるものに次いで津浪の高さが高かつたやうである。埜濱部落の北方宮城縣に接してゐる部分では、海岸の砂濱に徑 0.6 米位の岩塊が散亂してゐる。其等の岩塊は一部防潮林の中にも見られた。(寫眞参照)。是等の岩塊は恐らく、宮城縣と福島縣との境界附近の斷崖をなせる海岸の崖下に崩落してゐたものが津浪によつて運ばれてきたものであらうと想像される。埜濱の南部海岸では海濱に砂丘が發達し、その高さ 4.5 米乃至 5 米であつて、津浪は之を越へることは出来なかつた。砂丘の背後に少し許り畑が作つあつてそこにあるものは少しも害を被つてゐない。

新地村(福・相馬) Map No. III, 2

(釣師) 釣師は埜濱の南約 2 軒の海岸である。此處では海岸の地形は埜濱に似て砂丘が發達してゐる爲めに津浪の被害はなかつた。部落の北の外れで 1 ヶ處砂丘の稍々低いところが破れて浪の流入した形跡がある。

釣師より南方今泉の小部落に至る間の海岸は、砂濱と斷崖とが交互連続してゐる。其等の砂濱では大抵津浪の流入した痕跡を認めることが出来る。特に釣師から 2 つ目の谷の砂濱では、汀線の距離南北約 300 米陸上又は水田の中に砂を押し上げ、漁舟を押し上げてゐる。

(今泉) 用水溝がコンクリートで築いてあるが、その用水の海へ注ぐところに閘門があつて、その附近で、コンクリートの用水溝壁が一部分崩壊してゐる。土地の人々は、この崩壊は地震の數日前の嵐の時に崩壊したのであつて、地震津浪で崩れたのではないと言つてゐる。その嵐のことは次の原釜に於ても聞いたのであるが地震前後の頃の天氣圖を見ても其れらしいものは見當らず未だに不可解に思つてゐる。地震津浪による被害は勿論無いと言ふことである。

松ヶ江村(福・相馬) Map No. III, 2

(原釜) 原釜部落の北のはづれに海岸に沿うて墓地がある。この墓地内は砂濱の盡きるところに粗朶を結んだ垣に圍まれてゐたのであるが、津浪の浸入により大半砂に埋もれてゐた。原釜の町は、併し乍ら、砂濱から一段高く築かれた石垣の内にあり、津

浪の際多少の海水は浸入したが、津浪の痕跡はなく、従つて津浪の被害といふものもない。たゞ1軒網小屋の傾斜してゐるものがあつたが、それは前項にも一言した様に津浪前の暴風によるものであると土地の人々は主張してゐる。此處では津浪は午前3時半より5時半迄の間に4回来襲し、2回目の浪が尤も大であつたと云つてゐる。

原釜以南の眞野村(鳥崎)、福浦村(村上濱)、同(前谷地)、同(角保内)等の各沿岸部落では海岸に、高さ5米位の高い土堤又はコンクリート堰堤が築かれて居り、部落はその内陸側にあるので、津浪の襲來を知つてゐるものは殆どない。又氣付いてゐるものでも、多少浪音が激しかつたといふ程度である。勿論被害などは無く、海濱に打上げられた漂流物から浪の程度をやややく想像する位である。たゞ前谷地で、コンクリートの防波堤に砂が12~13 種の厚さに打ち上げられてゐたことゝ、前谷地から角保内に至る途中の土堤の一部が崩壊して砂礫が500坪許りの區域に浸入してゐるのが特に目立つた程である。

福島縣雙葉郡

富岡町(福・雙葉) Map No. III, 3

(佛濱)(富岡) 相島郡眞野村、福浦村の各部と地形も略同じて津浪當時の模様を知つてゐる者もなく従つて津浪も大した事はなかつた。

木戸村(福・雙葉) Map No. III, 3

(山田濱) 上記の諸部落に比し、山田濱は低平な砂礫の海岸で防波堤が築かれてゐない。部落と海濱とは一帯の防潮松林で隔てられてゐるのみである。併し、こゝでは津浪の勢力が最早左程強くなかつたのであらう。防潮林の中に砂礫が運びこまれたのと、砂濱に建てられた。某の堂宇の礎石が0.3米程砂に埋もれたのみで、住家に被害はない。津浪の勢力がもう少し強かつたら防潮林を越えて部落内に浸入したかも知れないと思はれる。

福島縣石城郡

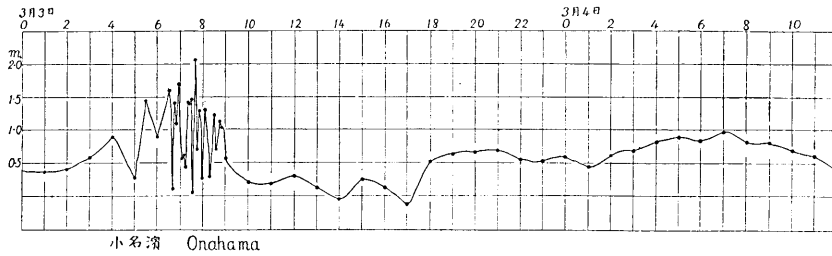
小名濱町(福・石城) Map No. III, 3

小名濱町に於いても、又その外港江名に於いても。具體的に津浪の被害と言ふべきものは一つもなく。海岸に残されたと思はれるやうな痕跡も甚だ不鮮明である。津浪の高さは大體1米位と推察されるが、この港にあつた検潮儀が1昨年(昭和7年)秋の颱風の時に流失してその後復舊されず1時間毎の定時観測であつたので、津浪の來襲の事實は確かであるがその時刻などは明かでない。

その観測値及びその観測値によつて畫いた潮汐の曲線は夫々第 IV 表及び第 97 圖に示してある。

第 IV 表 小名濱に於ける水位の観測 (小名濱築港事務所)

時 刻	潮 位	時 刻	潮 位
3 月 3 日 午前 1 時	0.36 米	3 月 3 日 午前 7 時 00 分	0.90 米
2 "	0.41	05 "	0.55
3 "	0.58	10 "	0.63
4 "	0.88	15 "	0.43
5 "	0.28	20 "	1.42
5 " 30 分	1.45	25 "	1.40
6 " 0 "	0.90	30 "	1.48
6 " 30 "	1.62	35 "	0.06
35 "	1.35	40 "	2.08
40 "	0.10	45 "	0.72
45 "	1.44	50 "	1.31
50 "	1.08	7 " 55 "	1.14
55 "	1.70	8 " 00 "	0.28



第 97 圖

小名濱に在る福島縣水産試験場につき地震前後の海並びに漁業の状況を聞いた所を並べてみると次のやうなものである。

i). 毎月 2 回港口及び口外 1 哩の沖で海面及び下層 (6 米乃至 10 米下) に於ける水温及び比重を調査してゐるので、その結果を掲げてみると第 V 表の如きものであつて、地震前後で多少の變化もある様に見えるが、これが地震又は津浪の影響であるか否かは速断し得ない。

ii). 底引網による 300 尋の深さに於ける漁獲高が、地震前後に多かつたがこれも亦必ずしも地震のみに依るものとは考へられないといふことであつた。

iii). 鰯の漁獲高が津浪に關聯して著しい差異を示すことがあるとは屢々注意されたとあるが、三陸津浪前に於ける小名濱附近の漁獲は殆ど變化がないと言つてよいと言はれてゐる。昭和 6 年 4 月以降の毎月の鰯の漁獲高として次の第 VI 表に示

すやうな値が得られてゐる。もう少し時の尺度を長くして、短時日の統計を以て示したならば何か津浪の影響らしきものが見出されるかも知れないが、この表にあらはれたところでは地震、津浪の影響らしきものは殆ど見えないやうである。

第 V 表 小名濱港内外の海水の温度及び比重
(福島縣水産試験場調査)

I. 港 口.

時 日	水 温 °C		比 重 (塩分 1/1000)	
	表 面	下層 (6 米)	表 面	下層 (6 米)
2 月 20 日	8.0	8.5	25.55	25.55
" 27 日	8.5	8.0	25.58	25.70
3 月 6 日	8.3	7.8	25.28	25.41
" 25 日	9.8	9.3	25.44	25.55

II. 港 外 1 哩 沖.

時 日	水 温 °C		比 重 (鹽分 1/1000)	
	表 面	下層 (10 米)	表 面	下層 (10 米)
2 月 20 日	8.2	8.5	25.70	25.55
" 27 日	8.7	8.2	25.48	25.55
3 月 6 日	8.8	8.0	25.28	25.36
" 25 日	8.3	9.0	25.41	25.44

第 VI 表 小名濱に於ける鱈毎月漁獲高 (マイワシ)

年 月	漁 獲 高 (俵, 1 俵は 13 貫 500 匁)	年 月	漁 獲 高 (俵, 1 俵は 13 貫 500 匁)
昭和 7, 3	8327	昭和 6, 4	8949
4	9407	5	7127
5	3748	6	4904
6	5481	7	2510
7	132	8	1344
8	2587	9	761
9	2813	10	1360
10	4515	11	3150
11	5938	12	2541
12	13472	7, 1	1568
8, 1	8948	2	9966

茨城縣之部

茨城縣多賀郡

大津町(茨・多賀) Map No. III, 3

大津港では港灣工事事務所員の談によれば 3 月 3 日午前 8 時頃工事場に出てみると、満潮時であるのに、平常よりは 0.45 米程潮位が低かつたといふことである。是は明かに津浪を認めたものであると考へられる。其他の津浪の痕跡らしいものは殆ど認められない。

大津港以南では津浪の痕跡は益々不明瞭で、海岸近くに住つてゐる人々でも、地震は感じ乍ら、津浪に對する懸念を持つた人々は殆ど無かつたやうで、従つて津浪の痕跡らしきものが多少残されてゐたとしても、それが果して三陸津浪のものであるか否かを判断する資料が無いのである。